

長者屋敷遺跡

中津市文化財調査報告書第26集

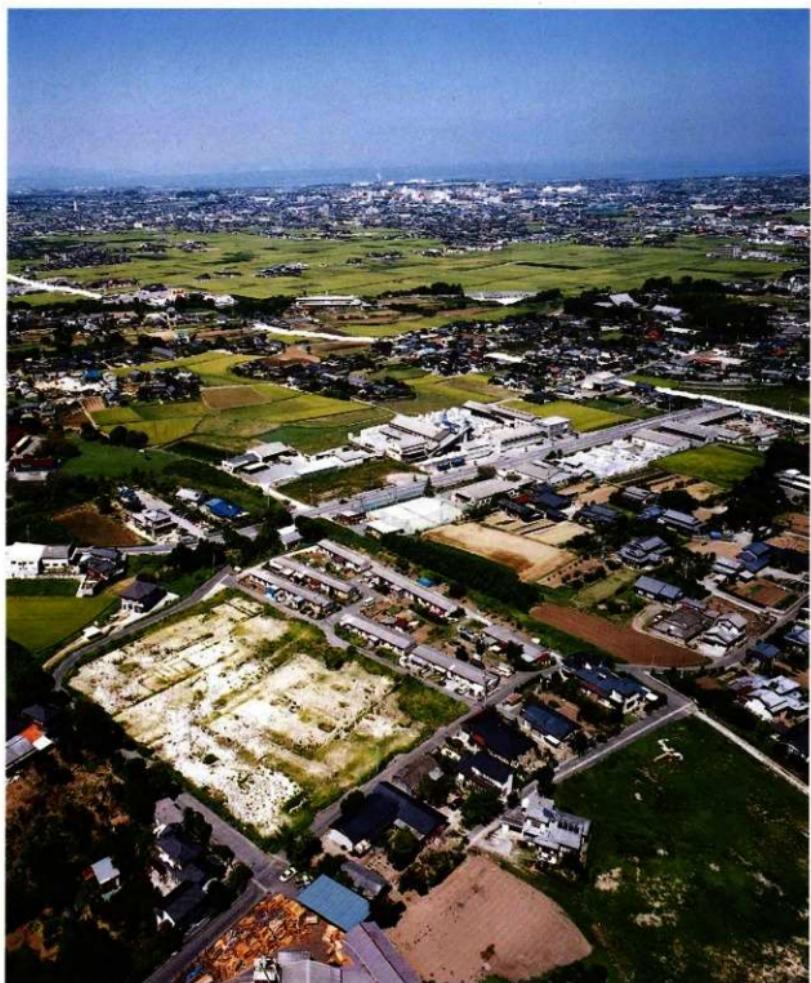


2001

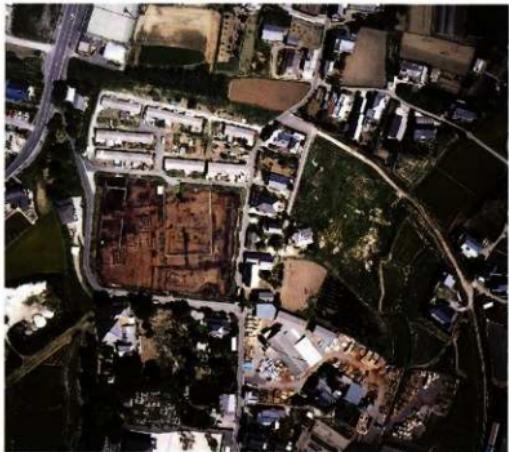
中津市教育委員会

正誤表

頁	誤	正
例 言 報告書抄録	和佐野喜久雄	和佐野喜久生
3頁28行	正	和利
	福岡市	福岡県



1. 長者屋敷遺跡から沖代条里を望む（白線は推定古代官道）



2. 長者屋敷遺跡推定範囲全景



3. 平成 7 年度調査区主要建物群

序

この報告書は、中津市教育委員会が実施した長者屋敷遺跡の発掘調査の記録です。

平成7年、中津市大字永添の市営住宅建て替えに先立ち調査を行った結果、大型の据立柱建物群が発見されました。

この地は古代官道にほど近く、周辺には宇佐八幡宮の祖宮薦神社や、沖代条里、相原廃寺などが展開する、古代史上重要な地域です。遺跡は古代下毛郡衙正倉と推定される、大変貴重なものであることがわかりました。

埋蔵文化財は長い時を超えて私達に届けられた文化遺産です。現代に生きる私たちは未来の人々へ遺産を伝える責任を持っています。市では遺跡の重要性を認識し、後世のため保存活用することを決定しました。本書が文化財への認識と理解を深める一助となり、教育及び学術研究の分野においても役立つことを願います。

最後になりましたが、ご協力いただいた地元永添地区の皆様、ご指導いただいた各先生方、大分県文化課はじめ、関係各位に対し、心より御礼申しあげます。

平成13年3月31日

中津市教育委員会

教育長職務代行者

管理課長 於久 孝正

例　言

一、本書は中津市教育委員会が1995年度から2000年度にかけて実施した長者屋敷遺跡発掘調査事業の報告書である。

一、空中撮影は以下の業者に委託した。

平成7年度調査区遺構写真・・・㈱東亜航空技研・㈱写真エンジニアリング

タ　　写真測量・・・㈱写測エンジニアリング

遺跡全景写真及び遠景写真・・・㈱スカイサーベイ

巻頭図版2の写真2は、㈱スカイサーベイの全景写真に、㈱写測エンジニアリングの遺構写真を合成したものである。

一、本書に掲載した遺構図は調査担当者（高崎、花崎）が作成した。

一、遺物整理は秋吉三和子、岩崎弘子（中津市歴史民俗資料館）が行った。

一、遺物の実測は主として高崎が行い、金丸孝子、中島二三恵（中津市歴史民俗資料館）の協力を得た。

製図は金丸孝子（中津市歴史民俗資料館）が行い、高崎が補足した。

一、写真撮影は高崎、花崎がおこなった。

一、上記のほか報告書を作成するにあたり中野温子（中津市歴史民俗資料館）、猪立山順子、岩本敏美、上川幸枝、清永洋美、相良紀善見、穴井英保子、福山美樹、中村香代子、松村たか子、塩谷絹子の協力を得た。

一、本書の執筆、編集は第一章～第七章を高崎が担当した。

一、第八章は小田富士雄先生（福岡大学教授）、第九章は和佐野喜久雄先生（佐賀大学教授）の玉稿を賜った。

目 次

巻頭図版 1・2

序

例言

第一章 はじめに

- | | |
|-----------|---|
| 1. 調査の経緯 | 1 |
| 2. 調査団の構成 | 3 |

第二章 地理と歴史的環境

第三章 平成 7 年度の調査

- | | |
|----------|----|
| 1. 調査の概要 | 7 |
| 2. 古代の遺構 | 7 |
| 3. 中世の遺構 | 28 |
| 4. 近代の遺構 | 34 |

第四章 平成 8 年度の調査

- | | |
|----------|----|
| 1. 調査の概要 | 36 |
| 2. 遺構 | 36 |

第五章 平成 12 年度の調査

- | | |
|----------|----|
| 1. 調査の概要 | 41 |
| 2. 遺構 | 41 |

第六章 出土遺物について

- | | |
|--------------------|----|
| 1. 平成 7 年度調査区出土遺物 | 45 |
| 2. 平成 8 年度調査区出土遺物 | 62 |
| 3. 平成 12 年度調査区出土遺物 | 65 |

第七章 まとめ

- | | |
|-------------|----|
| 1. 古代遺構について | 67 |
| 2. 長者伝説について | 75 |
| 3. 八並城跡について | 77 |

第八章 中津市長者屋敷遺跡の性格 ~豊前下毛郡衛正倉群をめぐって~

第九章 長者屋敷遺跡の炭化米特性と稻作起源

図版 1 ~16

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1/5000)	1
第2図 中津市内主要遺跡分布図 (1/50000)	5
第3図 官道沿いの古代遺跡 (1/50000)	6
第4図 平成7年度調査区遺構配置図 (古代) (1/500)	8
第5図 SB-1平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	9
第6図 SB-2平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	10
第7図 SB-3平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	11
第8図 SB-4平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	12
第9図 SB-5平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	12
第10図 SB-6平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	14
第11図 SB-7平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	15
第12図 SB-8平面図 (1/100) 土層図 (1/50)	16
第13図 SB-9・10平面図 (1/100) SB-10土層図 (1/50)	17
第14図 SB-9土層図 (1/50)	18
第15図 SB-11平面図 (1/100) 断面図 (1/100)	19
第16図 SD-3,4,5,6,8上層図 (1/40)	20
第17図 SD-10平面図 (1/200) 土層図 (1/40)	21
第18図 SX-1平面図・土層図 (1/60)	23
第19図 SX-3平面図・土層図 (1/40)	25
第20図 SX-11平面図・土層図 (1/40)	26
第21図 SX-6,7,SD-1,SX-9土層図 (1/40)	25
第22図 SX-1平面図・土層図 (1/40)	26
第23図 平成7年度調査区遺構配置図 (中世・近世) (1/500)	29
第24図 SD-1,2土層図 (1/40)	30
第25図 SD-1・5トレンチ土層図 (1/40)	31
第26図 SK-2,3平面図・土層図 (1/40)	33
第27図 防空壕1 (1/40)	35
第28図 平成8年度調査区遺構配置図 (1/200) 土層図 (1/40)	37
第29図 SD-13-D地点平面図・土層図 (1/40)	39
第30図 平成12年度調査区平面図 (1/500)	42
第31図 第3トレンチ平面図 (1/400) 土層図 (1/100)	43
第32図 2,6,11トレンチ土層図 (1/100)	44
第33図 SB-3,5,6,7,9出土遺物実測図 (1/3)	45
第34図 SX-1出土遺物実測図 (1) (1/3)	46
第35図 SX-1出土遺物実測図 (2) (1/3)	47
第36図 SX-1出土遺物実測図 (3) (1/3)	48

第37図	SX-1 出土遺物実測図(4) (1/3)	50
第38図	SX-2,3 出土遺物実測図(1/3)	51
第39図	SX-3 出土遺物実測図(1/3)	52
第40図	SX-6,8,9,11出土遺物実測図(1/3)	53
第41図	SX-11西・SD-1,6,9出土遺物実測図(1/3)	55
第42図	一括遺物実測図(1/3)	56
第43図	SK-2,3 出土遺物実測図(1/3)	60
第44図	SK-3 出土遺物実測図(1/3)	61
第45図	SD-12,13出土遺物実測図(1/3)	63
第46図	SX-21,SD-15出土遺物実測図(1/3)	65
第47図	出土土器編年図	66
第48図	掘立柱建物の存続関係	68
第49図	建物配置模式図(1/1000)	69
第50図	平成7年度8年度12年度調査区全図(1/1000)	73,74
第51図	八並城跡周辺地図(1/3000)	78
第52図	確認した土塁・溝(1/3000)	79
第53図	長者屋敷遺跡全体図(上), 7年度調査区遺構配置図(下)	83
第54図	掘立柱建物の存続関係	84
第55図	下高橋(上野・馬屋元)遺跡遺構配置図(1/2500)	86
第56図	小郡都衙遺跡遺構変遷図(1/2500)	88
第57図	比較遺跡(北部九州, 韓国)の炭化米粒長・幅平均値の分布図	91
第58図	長者屋敷及び比較遺跡(北部九州, 韓国)の炭化米粒長・幅平均値の分布図	93
第59図	長者屋敷及び比較遺跡炭化米粒長・幅平均値(付・95%信頼区間)の分布図	93
第60図 1, 2	長者屋敷の炭化米粒長の頻度分布図	94,95
第61図 1, 2	長者屋敷遺跡の炭化米粒写真	101,102
折り込み図: 平成7年度調査区遺構配置図(1/200)		

表 目 次

第1表	出土遺物観察表(1)	45
第2表	出土遺物観察表(2)	58
第3表	出土遺物観察表(3)	59
第4表	出土遺物観察表(4)	60
第5表	出土遺物観察表(5)	65
第6表	出土遺物観察表(6)	66
第7表	掘立柱建物計測表	68
第8表	下高橋遺跡主要掘立柱建物一覧	87

第9表 稲粒（米、穀）特性の指數、指數別階級値及び特性の表現法	90
第10表 稲粒（米、穀）の粒長・稻幅指數による粒型分類	90
第11表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差	92
第12表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差	96
第13表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒長／幅比の頻度分布・平均値・標準偏差	96
第14表 1, 2 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表	98,99

図版目次

図版1	1 7年度調査区全景	図版7	1 SX-3
	2 主要建物群		2 SX-21
	3 7年度調査区東側		3 SX-21トレンチ
図版2	1 SB-1		4 SX-21トレンチ床面
	2 SB-3	図版8	1 SD-8 コーナー部
	3 SB-5		2 SD-12,13 (東から西を望む)
図版3	1 SB-6		3 SD-13 (東から西を望む)
	2 SB-7	図版9	1 炭化米洗浄風景
	3 SB-8		2 出土炭化米
	4 SB-9		3 SD-13炭化米出土状況
図版4	1 SB-1 Pit21	図版10	1 SK-2
	2 SB-5 Pit1		2 八並城の堀 (SD-13北側)
	3 SB-5 Pit3		3 八並城の堀 (SD-13北側)
図版5	1 SB-6 Pit3	図版11	1 SD-1,2 (北から南を望む)
	2 SB-6 Pit1		2 SD-1 3トレンチ北壁
	3 SB-7 Pit11		3 SD-1 2トレンチ北壁
	4 SB-7 Pit1		4 SD-15 (5トレンチ)
図版6	1 SB-9 Pit1		5 SD-15 (6トレンチ)
	2 SB-9 Pit4	図版12	1 防空壕1
	3 SB-9 Pit16		2 防空壕2
	4 SB-9 Pit14		3 神戸製鋼引き込み線
	5 SB-9 Pit18	図版13~16	出土遺物

第一章 はじめに

1. 調査の経緯

中津市は大字永添所在の市営住宅建て替えを計画し、平成7年度埋蔵文化財確認調査を実施した。現地は中津市南部の標高約30mの低台地で、戦時中は神戸製鋼の軍需工場が建設されていた場所である。戦後、国から市に払い下げられ、木造平屋の市営住宅として活用されてきた。住宅は台地の北端に位置し、住宅の北には当時の工場引き込み線跡の土手が今も残る。建物は老朽化が進んでおり、7年度はその2/3の南側部分約8,000m²を解体し、発掘調査終了後、鉄筋コンクリート3階建てにて建て替える計画であった。また、残りの北側部分については、平成10年に同じく建て替えを行う計画であった。



調査は平成7年の9月18日より実施した。調査区は東西約100m、南北約80mの長方形で、西南の隅より、重機によりトレンチを掘削した。調査区南部は掘削の必要もないほど浅く、地山面がほぼ現地表面に露出していた。地山は北へ行くほどやや傾斜していた。土質は黄褐色の堅い粘質土で、調査区全体に軍需工場のコンクリートの基礎が走り、また市営住宅のトイレ跡などが地山を痛めていた。

トレンチを開けていると、ほどなく黒褐色で直径約1mの椿円形遺構を検出した。トレンチを広げるにつれ、同様の遺構が等間隔で連続するようになり、大型建物の柱穴ではないかと推察するに至った。遺構の存在が確認されたため、試掘から引き続き本調査へと移行した。

調査区全面を開け終えた結果、調査区西側に大型建物が集中し、北の調査区外へと伸びていた。東、南、西の端では、建物群を取り囲んで溝がめぐっていた。これらは、企画性を持った大型建物群で、県内外から多くの研究者が現地を訪れた。遺跡は出土遺物、建物の規模などから、古代の官衙遺構、下毛郡衙正倉と推定された。平成7年度当時、大分県内での官衙遺跡は、大分市の地蔵原遺跡、下郡遺跡、日出町の会下遺跡など、官衙的といわれる遺跡は散見してきたが、郡役所と断定できるものはなく、当遺跡の重要性が叫ばれ、保存を強く要求する声があがった。その後の調査は保存を前提として行い、遺構の性格を把握する上で必要最小限と思われる部分のみを掘り下げることとした。

第1図 調査区位置図 (1/5000)

平成8年2月12日曜日、まだ調査途中であったが、考古学ファンの声に答え、現地説明会を実施した。奇しくも同時期、騰村の福岡県新吉富村でも大ノ瀬下大坪遺跡で推定上毛郡衙正庁が発掘されたため、新吉富村教育委員会調査担当者と相談の上、現地説明会を同日に設定し、多くの方々に遺跡を見学していただくことができた。その後、大分県立博物館の山田拓伸氏に柱穴のひとつの土層はぎ取りを依頼した。最後に写測エンジニアリングに依頼し、遺跡全体の写真測量を行い、調査を終了した。

平成8年、7年度調査区南側で寺の建設計画がもちあがった。遺跡は全形が不明であったため、平成8年度も引き続き周辺の確認調査を実施することとし、寺建設予定地の調査を実施した。現地も軍需工場が建てられていた場所で、調査区内に建物の基礎があった。調査の結果、調査区の北端に東西方向の溝を検出した。溝の南側にもトレンチをいたが、遺構、遺物とも確認できなかった。ゆえに、溝を遺跡の南限と判断した。

平成12年、長者屋敷遺跡の範囲確認のため、7年度調査区の東側の空き地にトレンチを設定し、国庫補助事業による確認調査を行った。東端のトレンチから7年度調査区と同時期の土壌を検出した。8年度12年度の調査で遺跡は当初想定していたよりも、広範囲な広がりがもつことが確認できた。

また調査の進行と平行して、市では保存か住宅建設か再三協議を重ねてきた。文化財のためとはいえ、保存が決定すれば、市営住宅の住民はじめ、多くの関係諸氏、機関に迷惑をかけるのは必定であり、各方面の方々に多大な苦労をかけた。その結果、市は住宅を他所に建設することを決定、遺跡は将来にむけて保存することとなった。

今回の報告は平成7年度、8年度、12年度に行った長者屋敷遺跡発掘調査の報告書である。12年度調査の結果は、中津市文化財調査報告 第25集「中津地区遺跡群発掘調査概報(XIII)」(2001)に即し掲載した。

2. 調査団の構成

調査体制は以下の通りである。

調査主体 中津市教育委員会

調査責任者 高椋 忠隆（中津市教育委員会教育長 平成9年1月31日まで）

前田 佳毅（ 同 教育長 平成9年2月1日から13年1月31日まで）

於久 孝正（ 同 教育長職務代行 平成13年2月1日から）

調査事務 麻川 尚良（中津市教育委員会市民文化センター館長 平成10年3月31日まで）

尾畠 畏彦（ 同 館長 平成10年4月1日から）

田中布由彦（ 同 係長）

富田 修司（ 同 主任）

調査担当 高崎 章子（ 同 主査）

花崎 徹（ 同 主任）

現場作業は以下の皆さんの協力による。

山縣信大、中和代、田原文子、徳永賀子、植山ヨシカ、今永キク子、植山松枝、松本勲、植山京子、辛島雅美、黒川洋美、草野都雄、黒川みゆき、神崎文子、長岡久美子、宮崎真理、植山トミ子、湯口ヒロ子、寺内勝美、辻原霞、袖田由美、(故)黒土勲

調査期間中、多くの方々にご指導、ご助言を頂きました。大変お世話になりました。記して謝意を表します。

中山敏史、井上和人（奈良国立文化財研究所）、赤川正秀（大刀洗町教育委員会）、中村修身、梅崎恵司、佐藤浩司、柴尾俊介、(北九州市教育文化事業団)、小田富士雄、武末純一（福岡大学）、亀田修一（岡山理科大学）、木下良（古代交通研究会）、木本雅康（長崎外国語短期大学）、栗原和彦（九州歴史資料館）、清水宗昭、渋谷忠章、村上久和、小林昭彦、後藤一重、田中祐介（大分県教育委員会）、(故)賀川光夫、後藤宗俊、飯沼賢二（別府大学）、(故)甲斐忠彦、真野和夫、高橋徹、櫻井成昭（大分県立歴史博物館）、小倉正五、林一也、佐藤良二郎、江藤和幸（宇佐市教育委員会）、柴田博子（宮崎産業経営大学）、高倉洋章（西南学院大学）、坪井清足（大阪府文化財調査研究センター）、坪根伸也、塙地潤一（大分市教育委員会）、木村幾多郎（大分市歴史資料館）、西谷正（九州大学）、口野尚志（佐賀大学）、宮田浩之、中島達也（小郡市教育委員会）、松村一良、水原道範（久留米市教育委員会）、赤司善彦、飛野博文、小田一正（福岡市教育委員会）、柴焼憲司（豊前市教育委員会）、八木充（山口大学）、大林達夫、吉瀬勝康（防府市教育委員会）、中島恒次郎、山村信榮（太宰府市教育委員会）、矢野和昭（新吉富村教育委員会）、渡辺正気（福岡県審議委員）、田中正日子（第一経済大学）（敬称略・順不同）

以上の外にも、大分県教育委員会、他県、近隣市町村の調査研究者の方々に、多くの御教示を頂きました。御礼申しあげます。

第二章 地理と歴史的環境

中津市は大分県北部、福岡県との県境の商業都市で、人口約6万7千人、面積約55.67km²である。一級河川の山国川河口に位置し、北は遠浅の周防灘を望む。山国川のつくる扇状地「沖代平野」と、市の東南をしめる洪積台地「下毛原台地」とに分かれ、山間部は市の南に隣接する三光村境にわずかにある。東は古代強力な政治力を誇った宇佐八幡宮が座す宇佐市に隣接している。

市内の旧石器時代は才木遺跡や大坪遺跡で石器を確認できるのみである。縄文時代では早期後半に黒水遺跡で陥り穴が検出された。遺跡数が増大するのは後期からである。犬丸川沿いの福島台地には、入垣貝塚を伴う集落のボウガキ遺跡、山国川沿いには三光村の自然堤防上に集落の佐知遺跡の集落がある。山国川河口附近では高畠遺跡で上偶が発見された。弥生時代になると、遺跡は台地上や沖代平野内の低地でも確認できる。前期後葉から中期初頭、山国川沿いの低丘陵上の上ノ原平原遺跡で、貯蔵穴群が検出された。中期になると犬丸川沿いの福島遺跡で集落が展開し、住居跡、濠と二列埋葬の土壙墓群が確認されている。また中津市と三光村にまたがる森山遺跡では、前期末から後期初頭までの集落全域を検出できた。古墳時代には沿岸部や山国川沿いに古墳、横穴（幣旗邸古墳、上ノ原横穴墓群など）が築かれ、微高地には住居跡が作られる。沖積平野の低湿地では水田も確認されている。生産遺跡としては南東部の山地に大規模な窯跡群が作られ、6世紀後半から8世紀にいたるまで、須恵器、瓦などが生産された。

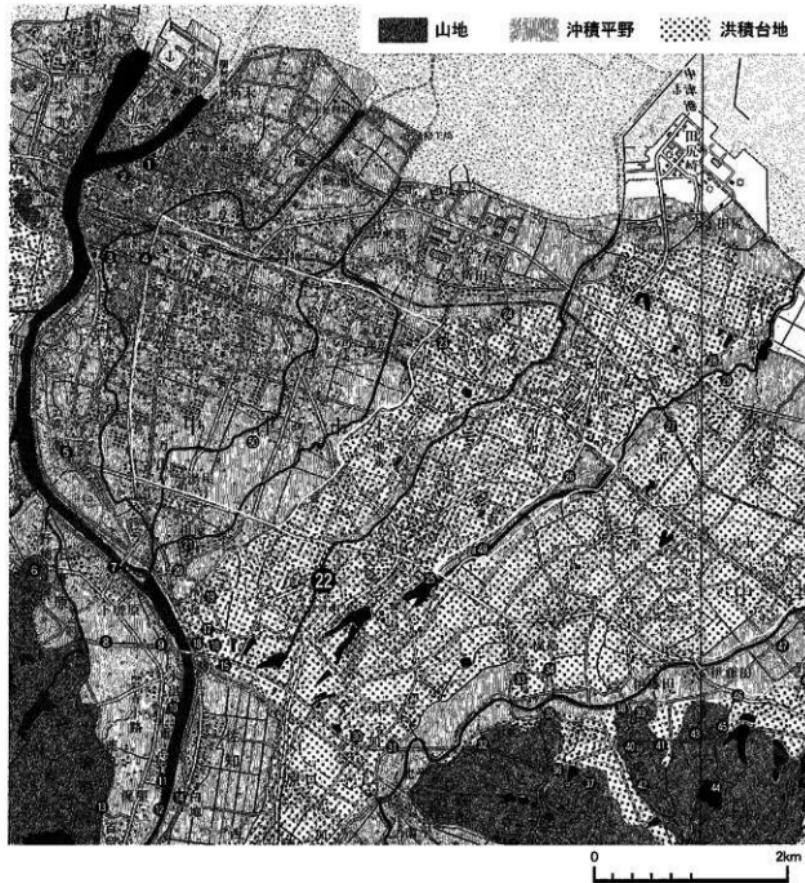
中津市は古くは豊前國下毛郡に属していたが、もともとは川向こうの福岡県築上郡とともに三毛郡であった。しかし、大宝二年（702年）の正倉院文書ではすでに上毛郡の記載があり、このころには現在の福岡県側は上毛郡（4郷）、大分県側は下毛郡（7郷）に分割されていたようである。

古代史上主要な遺跡は市内南部を東西に横切る推定古代官道沿いに集中する。この道は、宇佐八幡宮へ向かう勅使が通る通称「勅使街道」であり、当時のメインストリートである。道の南、山国川の東岸に、白鳳寺院の相原廃寺が建立された。現在、塔跡と思われる基壇と礎石が残存するのみであるが、塔跡周辺では古瓦が散布する。市教育委員会は5カ年にわたり発掘調査を行ったが、未だ全容は不明である。礎石の配列より、主軸はほぼ北をさす。7世紀末の建立と考えられている。

また沖代平野では、おそらくも8世紀前半に県内でも最大級の沖代条里の地割りが制定された。条里の阡線は東に約17度傾き、その南限は推定官道が踏襲しており、官道の成立と条里の施行時期が深い関わりを持つ。条里は年々開発の波に押されているが、現在でも方形の区割りをたどることができる。

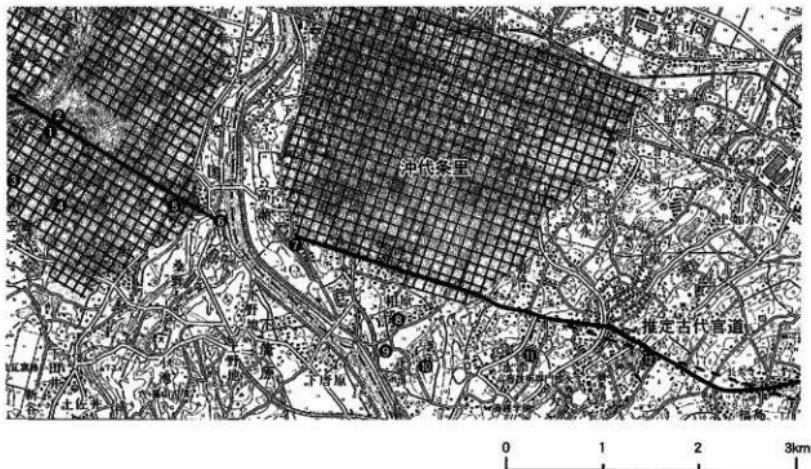
沖代平野の東南には下毛原台地が小高くひろがる。その西南端の高台に相原山首遺跡の墳墓群が構築される。ここでは7世紀～9世紀にかけて方墳が造られ、主体部は横穴式石室から、8世紀中頃～後半に火葬墓に移行し、主体部に蔵骨器をもつ方墳が現れる。9世紀前半以降は単純な火葬墓や土壙墓を構築する。またこの墓域の眼下には、相原廃寺の寺域と、古墳時代から10世紀まで続く三口遺跡の集落を望むことができる。三口遺跡からは、相原廃寺と同じく北を指向する掘立柱建物群が検出されており、綠釉陶器や、墨書き土器などが出土した。この場所は、寺院（相原廃寺）、掘立柱建物群（三口遺跡）、墳墓群（相原山首遺跡）と、7～10世紀を語る上で重要な地域である。

下毛郡側に百濟系古瓦を有する相原廃寺が建立され、川をはさんで上毛郡側には8世紀、大字垂水に、新羅系古瓦を用いる垂水廃寺が建立された。垂水廃寺は官道沿いに方二町の寺域をもち、その軸は北より30度東に傾き、官道に沿う。上毛郡の官道沿いでは上毛郡の郡庁と推定される大ノ瀬下大坪遺跡が有名である。官道沿いの条里内微高地に立地し、現在国指定史跡となり保存されている。近年周辺調査が



1. 中津城	11. 百留居屋敷遺跡	21. 相原廃寺	31. 大坪遺跡	41. 草場窯跡
2. 潘校進脩館跡	12. 上唐原了清遺跡	22. 長者屋敷遺跡	32. 森山遺跡	42. 大谷墓跡
3. 高畠遺跡	13. 百留横穴群	23. 亀山古墳	33. 福島遺跡	43. 畑ヶ追窯跡群
4. 豊田小学校遺跡	14. 佐知遺跡	24. ガラヌノ遺跡	34. 福島地下式横穴	44. 木下池窯跡群
5. 高瀬遺跡	15. 上ノ原平原遺跡	25. 薩摩社	35. 洞ノ上横穴群	45. 大池窯跡
6. 能満寺古墳	16. 勉助野地遺跡	26. 原遺跡	36. 洞ノ上窯跡	46. 是則塚
7. 下唐原宮闇遺跡	17. 弗旗即古墳	27. 定留貝塚	37. 才木遺跡	47. 野依糸里遺跡
8. 郷ヶ原遺跡	18. 上ノ原横穴墓群	28. 和間貝塚	38. 城山横穴群	48. 野依古墳
9. 上唐原遺跡	19. 相原山首遺跡	29. 定留遺跡	39. 城山古墳群	49. 大悟法糸里遺構
10. 上唐原稻本屋敷遺跡	20. 三口遺跡	30. 黒水遺跡	40. 城山窯跡群	50. 沖代糸里遺構

第2図 中津市内主要遺跡分布図 (1/50000)



- | | | |
|-------------|------------|------------|
| 1. 大ノ瀬下大坪遺跡 | 6. 八坂神社 | 11. 長者屋敷遺跡 |
| 2. 堂ノ前遺跡 | 7. 海神社 | 12. 菩神社 |
| 3. フルトノ遺跡 | 8. 相原鹿寺 | |
| 4. 下島ヲカ遺跡 | 9. 三口遺跡 | |
| 5. 垂水鹿寺 | 10. 相原山首遺跡 | |

第3図 官道沿いの古代遺跡 (1/50000)

継続されており、平成 12 年度に調査されたフルトノ遺跡は、大ノ瀬下大坪遺跡の前身的建物群で、評術の遺構と推定され注目を集めている。

当、長者屋敷遺跡は、大ノ瀬下大坪遺跡とはほぼ同時期で、下毛郡衙の一画と推定される。標高約 30m ほどの低台地上に位置する。古代官道から約 350m 南に入り、官道との比高差は約 5 m である。遺跡は南から北へのびる舌状台地の先端西側部分にあたり、東と西は比高差約 2 ~ 5 m の谷部になる。先の相原山首遺跡は、深い谷をはさんだ隣の台地上に位置する。直線距離では約 1 km である。当地は字を長者屋敷といい、官道までの間はハッ並西後という。以前より炭化米の出土が知られており、八並長者伝説が残る。ここは古代は野仲郷に属す。野仲郷は宇佐神宮の祖宮である鷦鷯神社を有し、早くより宇佐神宮封戸になった。宇佐宮との深い関わりから、この地は人的にも歴史的に最も大きな力を發揮した。

鎌倉時代には大丸川沿い（大丸川流域遺跡群）で集落が検出された。特に前田遺跡では、井戸から青磁、白磁、瓦器碗、土師器などの良好な一括資料が得られ、縦杵、下駄などの木製品が出土した。15、16 世紀には市内各地に堀や土塁を持つ豪族居館が作られ、各所にその痕跡を残す。

中世の建久年間には、宇都宮氏が豊前に入り、その庶流が下毛郡の地頭職についた。宇都宮重房は野仲郷を本貫とした。以後 16 世紀末まで、野仲氏が勢力をふるった。16 世紀末、秀吉から豈前をもらった黒田氏が山国川の河口に城を築き、宇都宮氏を初めとする地元の豪族を打ち破り、江戸時代を迎えた。

第三章 平成7年度の調査

1. 調査の概要

調査は、市営住宅の南側部分の建物を破壊後、重機にてトレーニングを設定して行った。表土をはぐと、次々と連続した大きな穴がみつかり、本調査へと移行した。調査区は南北約80m、東西約100mの長方形である。検出された遺構は主として古代と中世の二時期に大別される。調査区の西側には掘立柱建物群をはじめとする古代の遺構が集中するが、東側には一転して中世の遺構が展開する。古代遺構が柔らかい黒色土であるのに対し、中世はややかための白っぽい褐色土、茶色土が主である。遺構検出面が現地表面からあまり差がなかったことから、市営住宅による搅乱がめだった。さらに、調査区は戰時中、神戸製鋼の軍需工場があった場所で、調査区内を工場のコンクリート基礎が縦横に走り、細長い溝が建物群の柱穴を連続して寸断していた。そのため、掘立柱建物の柱穴を思う場所で断ち割ることができなかった。また、重機によるゴミの廃棄坑も多数あり、切り合いの確認をさえぎった。調査途中から保存を前提にするため、極力遺構を完掘しないことがきまった。

2. 古代の遺構

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物には側柱建物6棟(SB-1,2,3,4,10,11)と総柱建物5棟(SB-5,6,7,8,9)がある。全て7調査時に検出したもので、7年度調査区の西側半分に集中している。それらのほとんどはほぼ南北に主軸をとり、整然と並んでいる。建て替えが認められる建物は、最初の建物をa、二度目の建物をbとして表記した。

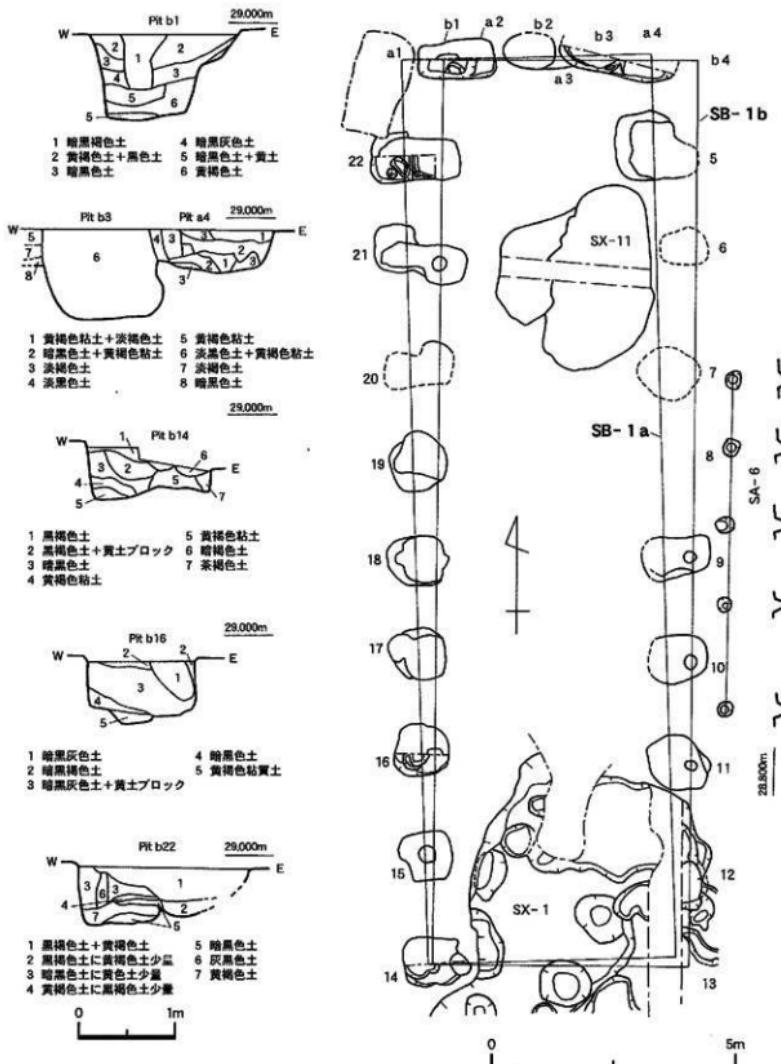
SB-1 側柱建物。一度建て替えられており、最初の建物をSB-1 a、二度目の建物をSB-1 bとする。いずれも南側をSX-1に切られており、全形は不明。

SB-1 aは3間×9(+a)間、主軸は2°西にふれる。柱穴規格は柱掘り方が一辺約1mの隅丸方形だが、SB-1 bに切られており、全形のわかるものは少ない。Pit 1は市営住宅の搅乱をうけ消滅。また神戸製鋼の基礎により、1、5、6、7、8、9、10、14、20は搅乱をうけ、1、8は消滅している。6はSX-11にきられる。2、4、14、16、22の柱穴の土層観察をおこなった。建て直される際、柱が抜き取られたり、土を流し込まれたりしたと思われ、SB-1 aの土層は乱れており、判別しにくいが、本来掘り方の埋土はSB-2同様、単純なきめの細かい柔らかい黒色土と思われる。柱痕は直径約20～30cmで灰白色土。深さは約0.7m。炭化米はない。SB-2と柱筋がほぼ通るため、同一の建物の可能性も考えられるが、SB-2では建て替えが認められないため、ここでは別の建物として表示した。SB-2と別棟であれば、同時存在した場合、間隔をおいて建てられたと思われ、SB-1の南端はPit 14に求めるのが妥当ではないか。そうすると梁行5.1m、桁行18.5m、床面積は94.35m²になる。

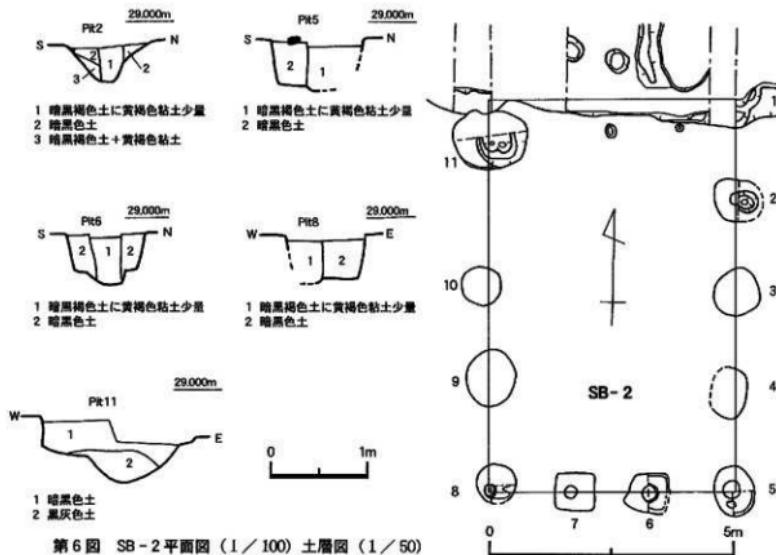
SB-1 bは軸をやや東によりにかえ建て替えられており、主軸方位はちょうど北をさす。柱掘り方はSB-1 aと同じ一辺約1mの隅丸方形か丸みを帯びた掘り方になる。深さは約0.9m。Pit 4は調査区外になる。搅乱をうけた柱穴はaであげたもの以外に、Pit 5が工場基礎にこわされる。柱掘り方埋土は黄色粘土と黒色土のまざったまだらな上で、SB-1 aの柱穴を掘り返した土を利用したため、まだらになったと見られる。あまり多くはないが、掘り方と柱痕から炭化米が出土する。建物の東側にSA-1が平行する。



第4図 平成7年度調査区造構配置図（古代）（1／500）

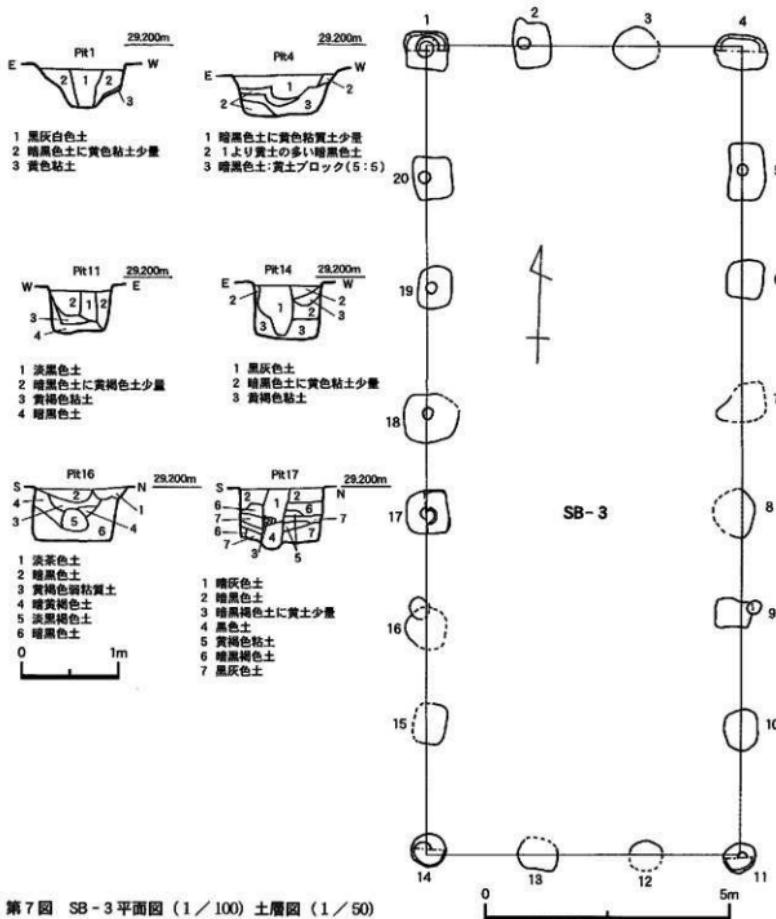


第5図 SB-1平面図(1/100) 土層図(1/50)

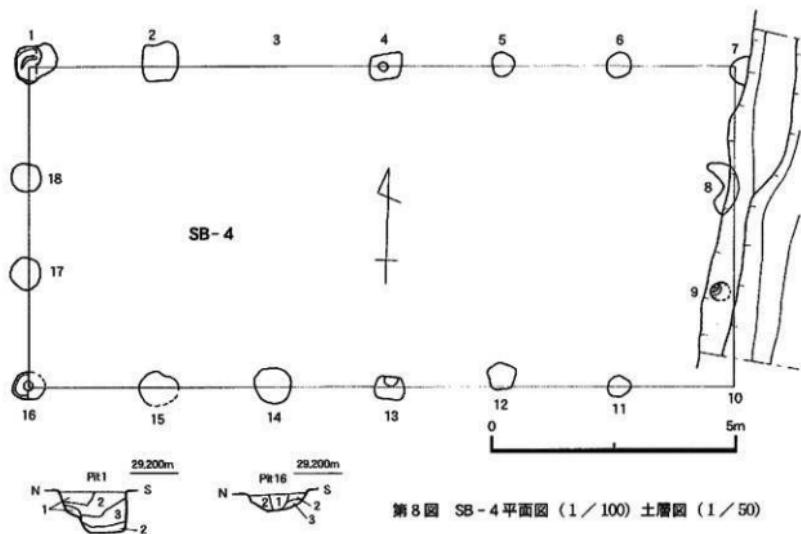


SB-2 側柱建物。 3間×4(+a)間、北側はSX-1に切られるため、全形は不明。建物の主軸は2°西にふれる。南棟の柱間寸法は1.7m、東棟は2.0mである。梁行5.1m、桁行8.0(+a)mで、SB-1 aとほぼ棟をそろえており、同一建物の可能性がある。近代の溝がPit 2の東側、3の中央、4の西側を破壊している。8、9、10も神戸製鋼の建物基礎に一部カットされている。Pit 2から10の柱穴は一辺約70~80cmの隅九方形のものと円形ぎみのものがある。版築はない。掘り方の埋土は単純なきめの細かい柔らかい黒色土、柱痕は直径約30cm、深さ約50cmで、SB-1 aと共に通する。Pit 10とPit 11の間隔が開きすぎているが、二つのピットの間は建物基礎で削られており、本来、等間隔の位置にピットがあったのかは確認できない。Pit 11の土層には柱痕がたどれず、柱はぬかれたものと思われる。建て替えは認められない。柱掘り方、柱痕とも、炭・炭化米は出土せず、火災にあったかどうかは不明である。

SB-3 側柱建物。 3間×7間、側柱建物では唯一全形を把握できる。梁行6.5m、桁行16.5mで、身舎面積は約107m²。主軸は2°西にふれる。Pit 1~2の柱間寸法は2.05m、西棟のPit 1~17までの柱間寸法は、2.65m、2.25m、2.55m、2.0mで、間隔はまちまちである。神戸製鋼の建物基礎により、Pit 7、8、12、13、15、16、18は一部破壊されている。柱掘り方方は一辺約90cmの隅九方形、約60cm×110cmの長方形が主体だが、南辺のPit 11~14は直径約80cmの円形である。Pit 1の柱掘り方埋土はSB-2と同じく、単純なきめの細かい柔らかい黒色土であるが、他の柱穴では黒色土と黄褐色粘質土を交互に版築状態で見ついているのが確認できた。柱痕はきめの細かい白っぽい黒灰色土で、柱穴の埋土は掘り方、柱痕ともSB-1 a、SB-2と類似する。建て替えの痕跡はない。炭化米は確認できないが、Pit 4上層には、炭化材が多量に堆積しており、火災にあったことをうかがわせる。



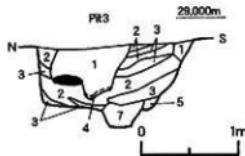
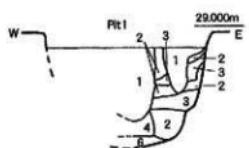
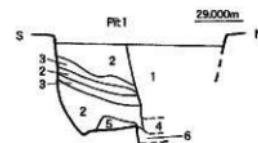
SB-4 側柱建物。SB-1,2,3と直行し、東西にのびる。東棟はSD-1にきかれているが、SD-1の西壁面に柱穴の痕跡が確認できたため、3間×6間の建物と判断した。梁行約6.6m、桁行14.5m、身舎面積は約95.7m²。主軸は2°西にふれる。西棟の柱間寸法は約2.2m、南棟はPit16と15の間が約2.5m、他は約2.4m。柱掘り方は一辺約70cmの方形と、直径約60cmの円形が混在する。Pit 1、16の土層を観察した結果、深さは約40cm、埋土は基本的に黒色土だが、黄色粘土もまじる。少量の炭化米が認められた。



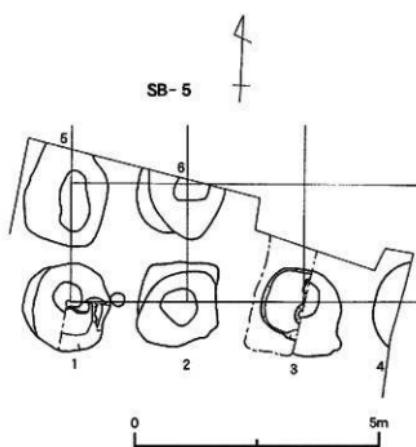
1 黄褐色粘質土
2 1に黑色土少量
3 黑色土

1 黑褐色土
2 黑褐色土に黄褐色土少量
3 黄褐色土

0 1m



第8図 SB-4 平面図 (1/100) 土層図 (1/50)



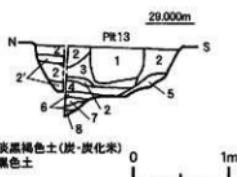
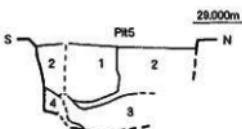
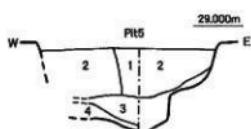
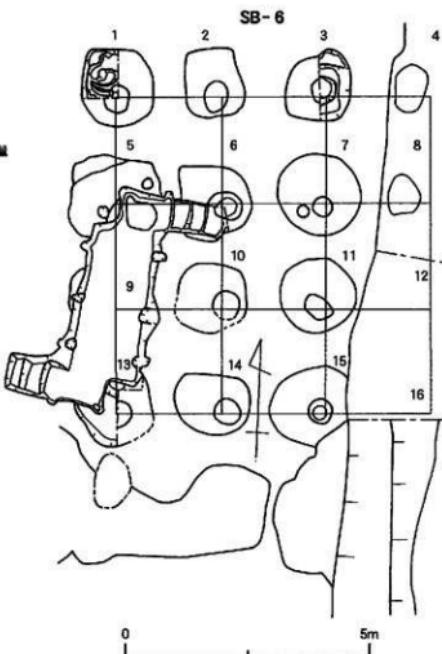
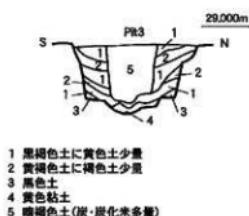
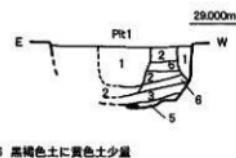
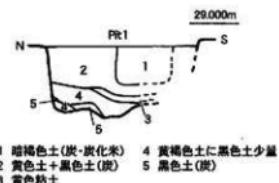
1 結褐色土(炭・炭化木多量)
2 黄褐色土・黑色土
3 黑色土に黑色土少量
4 やわらかく赤茶色土
5 黄褐色弱粘質土
6 黄色粘土
7 淡黄褐色土

第9図 SB-5 平面図 (1/100) 土層図 (1/50)

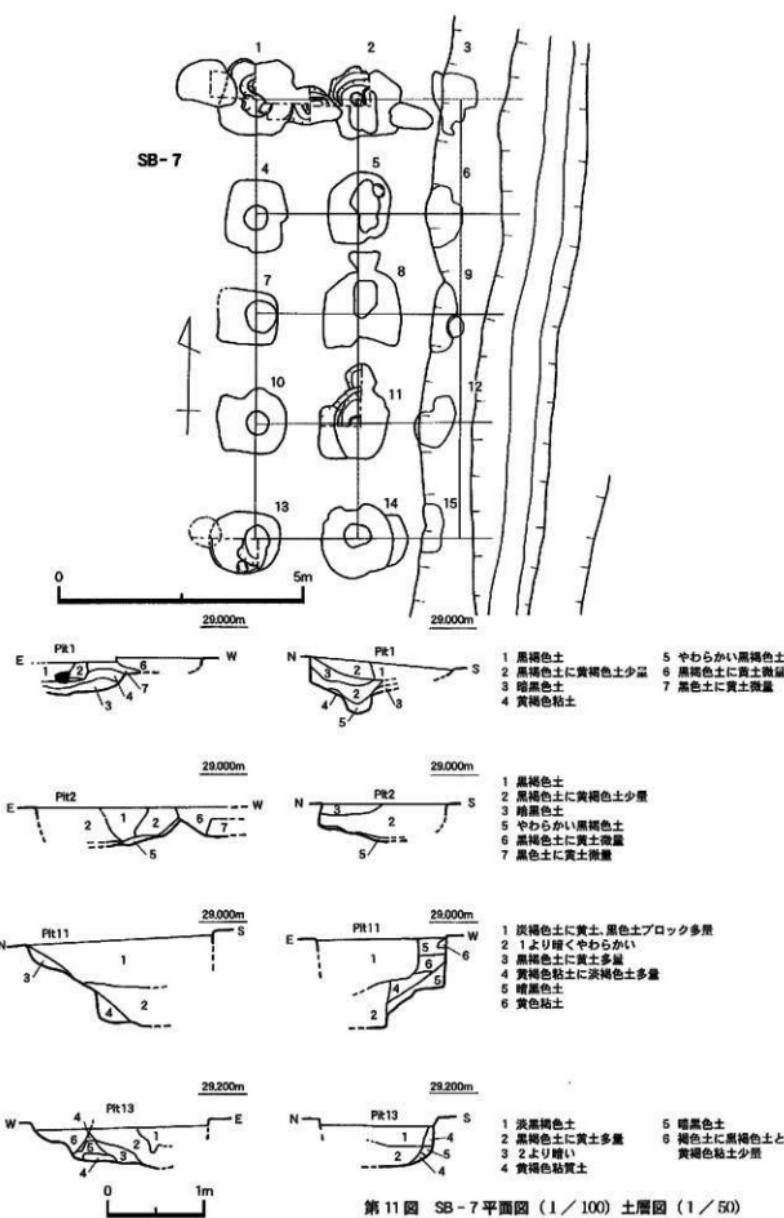
SB-5 総柱建物。北の調査区外にのびるため全形は不明。6個の柱穴を確認した。Pit 3 の西半分は市営住宅の便溝に破壊され、底部のみ観察できる。4は大半がSD-1にきられ、5、6も一部調査区外である。柱間寸法はいずれも2.4m。主軸は2°西にふれる。Pit 1~4までは7.2mである。Pit 1、3の土層観察の結果、柱掘り方は一辺約1.6mで、床面では隅丸方形である。Pit 1の柱痕径は約60cm、柱穴の深さは1.15m。Pit 1では柱掘り方の埋土は黄土と褐色土がまじる堅い層と黄土粒混じりの黒褐色土を交互に積む版築層で、柱痕は炭、炭化米を多量に含む暗褐色土である。床面の柱のある場所は15cmほど窪み、黄色粘土がしかれていた。粘土の上面は柱の重みをうけ窪んでいた。柱掘り方には、Pit 1の柱痕と埋土が共通する径20cm、深さ60cmのピットがほりこまれていた。Pit 3の柱掘り方理土も1と同様であるが、床面には、もう一つ柱痕跡の窪みがある。また、柱掘り方、柱痕ともに炭化米を含んでおり、SB-5aが火災にあい、SB-5bに建て替えられたことがわかる。SB-5bの柱痕には丸い河原石が一つしかれていた。土層をみると、柱痕は本来の柱痕跡より南北に長く、柱を抜き取った跡と思われる。同様にPit 5の柱痕も南に長く、SB-5bの柱は南にたおしてぬかれている。第七章第7表掘立柱建物計測表では、確認できる1間×3間の面積 $17.28m^2 + \alpha$ とだけ記しているが、他の総柱建物から見ても3間×3間 = $51.84m^2$ または3間×4間 = $69.12m^2$ はあったと見てよいだろう。

SB-6 総柱建物。建物の東側をSD-1によりカットされる。SD-1の西壁にはPit 4、8の痕跡がある。15はSX-17にカットされた後、SD-1に切られる。また西側には防空壕がほりこまれ、Pit 5、6、9、13はかなりの部分カットされる。東棟が確認できないがおそらく3間×3間であろう。主軸は2°西にふれる。梁行、桁行とも6.45m、柱間寸法は2.15m、身舎面積は41.6m²。柱穴は一辺約1.5m隅丸方形、柱痕は直径約55cm、柱穴の深さは75~100cmである。Pit 1、3、5、13の土層断面を観察したところ、埋土は黒色土と黄色粘質土を交互につきかためた版築層が認められた。1、3、5、13の床面には、検出面で確認できる柱痕とは別に窪みがあり、黄色粘土がしかれていた。最低一回の建て替えが認められ、SB-6bの柱掘り方、柱痕ともに炭化米を含んでおり、SB-6aは火災による焼失と思われる。また、SB-6bの柱穴は全てに柱痕が認められ、乱れた形跡がない。さらにSB-6bのPit 6、15柱穴上面には、柱が焼けた炭の痕跡が丸く現位置で残っており、完全焼失したと思われる。

SB-7 総柱建物。SB-6と同様、東側をSD-1によりカットされる。梁行2間+ α 、桁行4間。Pit 1~3の梁行は4.2m、柱間寸法2.1m。桁行き9.0m、Pit 1~13の柱間寸法は2.35m、2.05m、2.25m、2.35mである。主軸は2°西にふれる。柱掘り方は一辺約1.3m方形、柱痕径約50cm、柱穴の深さ約50~100cm。Pit 3、6、9、12、15はSD-1の西壁に痕跡がある。Pit 1、2はSX-12にカットされる。Pit 1では柱痕に2個の平たい河原石が柱を支えるようにさし込まれており、床面には径30cm程のSB-7aの柱痕跡があった。同様にPit 2、11、13でも建て替えが確認できた。Pit 2、5、8、11では、SB-7bの柱痕が南北方向に抜き取られた様子が観察できた。SB-7aと7bの柱掘り方理土は、SB-5、6と共に共通する。SB-7bの柱掘り方、柱痕ともに炭化米が出土した。SB-7はSB-5、6と西の棟筋が通り、SD-1の東壁に柱穴が確認できることから、梁行きは3間と推察される。第7表の掘立柱建物計測表では、確認出来る梁行2間で計算し、身舎面積を $37.8m^2 + \alpha$ と記したが、2間とは考えにくく、3間では $56.7m^2$ となる。



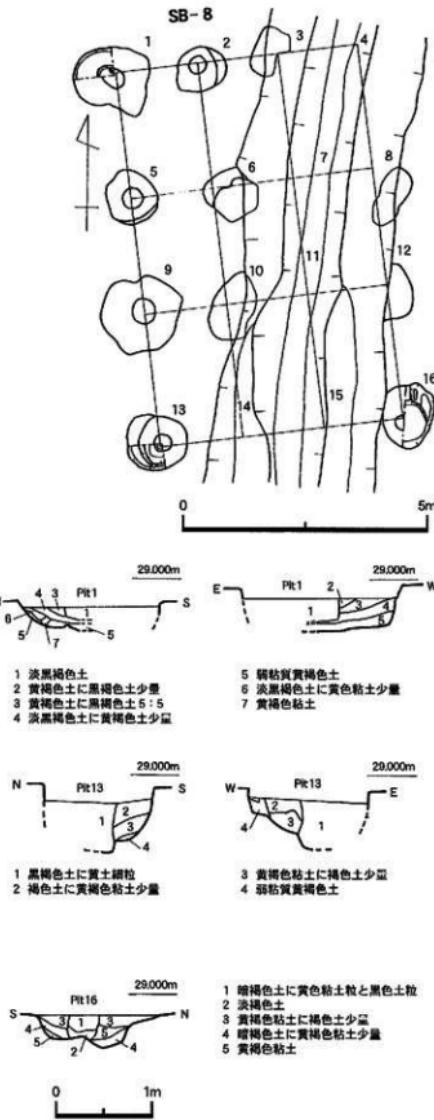
第10図 SB-6平面図(1/100) 土層図(1/50)



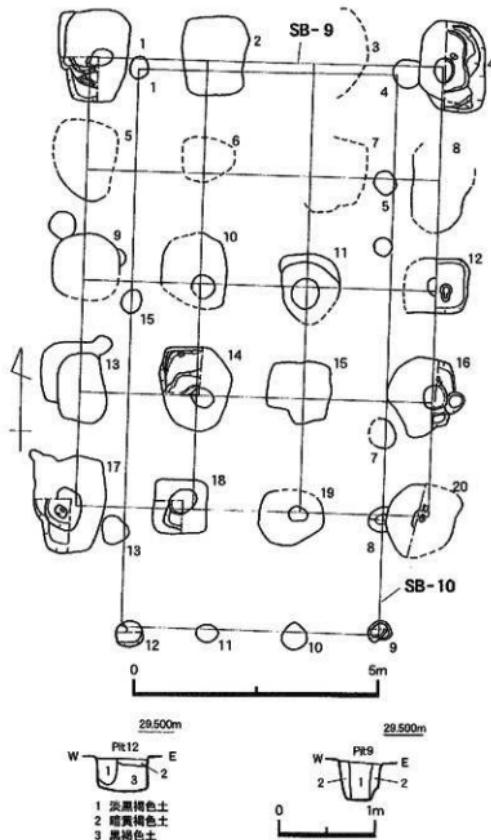
第11図 SB-7平面図(1/100) 土層図(1/50)

SB-8 総柱建物。東側をSD-1でカットされるが、SD-1 東壁に柱穴が確認できたため、建物規模は3間×3間である。梁行5.0m 柱間寸法1.66m、桁行7.7m Pit 1～13の柱間寸法は2.6m、2.4m、2.7m、である。身舎面積約38.5m²。SB-5、6、7と棟をそろえるが、SB-8の主軸は西に8°傾く。SB-5、6、7に比べ柱穴が深い。柱穴の平面形は一辺約130cmの方形になると思われるが、不揃いである。Pit16の床面に別の柱痕があり、2、5、6、13の平面観察でも切り合ひが確認できることから、SB-8でも、一度の建て替えがなされたと判断した。炭化米は柱痕、柱掘り方とも出土した。

SB-9 総柱建物。調査区の西南隅に位置する。3間×4間、建物規模は7.25m×9.2m、身舎面積約66.7m²。主軸は1°東にふれる。柱間寸法は梁行が2.4m、2.2m、2.65m、桁行が2.3mである。柱掘り方はPit18は直徑約1.1m方形、Pit 1の1.3m×1.9mの長方形などがある。柱痕径はPit 4が約50cm、深さ約85cmである。平面でみて、柱穴は二つの穴が切りあっており、建て替えが明確である。神戸製鋼の建物基礎でPit 3、5、6、7、8、20は半分以上破壊され、9、10、11、12、16、19は一部搅乱を受けている。土層観察の結果、Pit 1、4、14、17では柱穴が掘り直されている様子が確認でき、12、16、14で、柱穴底面に当初の柱痕が確認できた。他の総柱建物同様、SB-9 aの掘り方埋土には黄色粘土をしき、柔らかい黒色土を用い、SB-9 bでは、黒色土と黄色粘土を混ぜた版築層で、柱掘り方、柱痕とともに炭化米が認められた。Pit 4、14等では、SB-9 bでも、柱の下に黄色粘土をしいてするのがわかる。柱の沈下をふせぐためであろうか。またPit16では二度目の柱痕の下に、直徑約55cmの扁平な河原石を据えており、石の下にも粘土が確認できた。このような石の用い方はこの場所だけで、柱の長さ調整に用いられたものであろうか。この建物は總



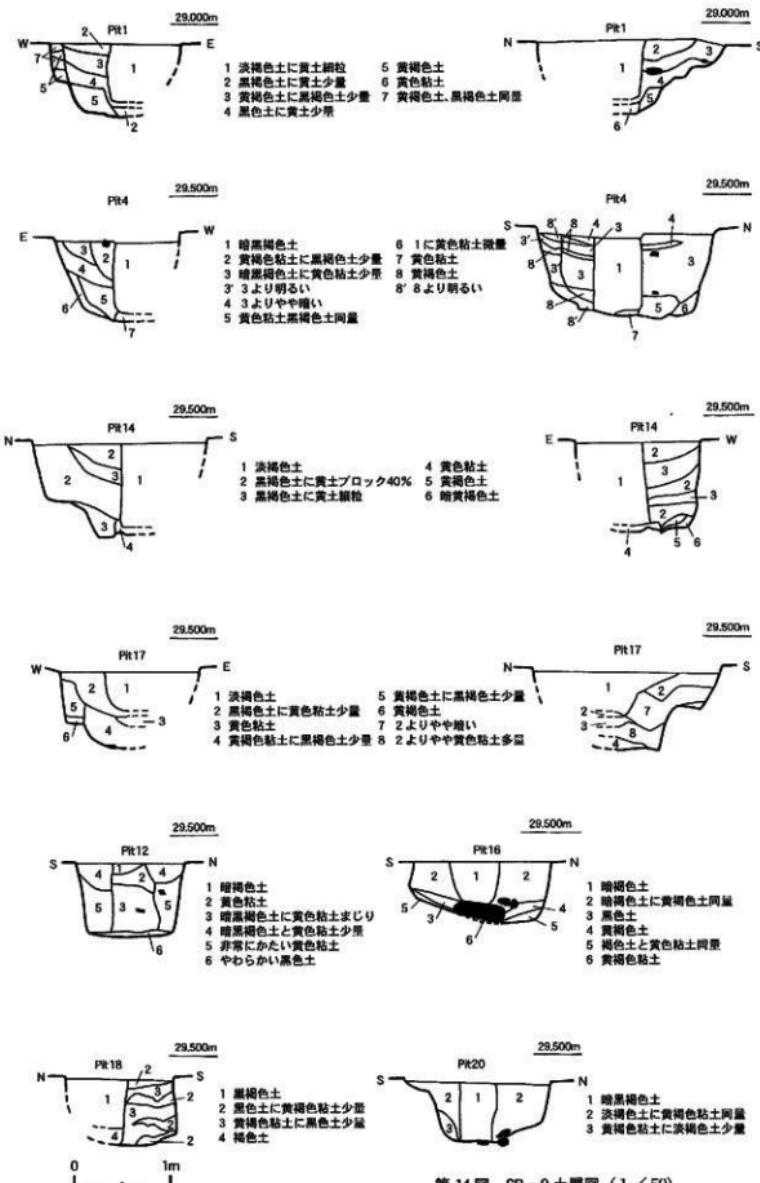
第12図 SB-8平面図(1/100) 土層図(1/50)



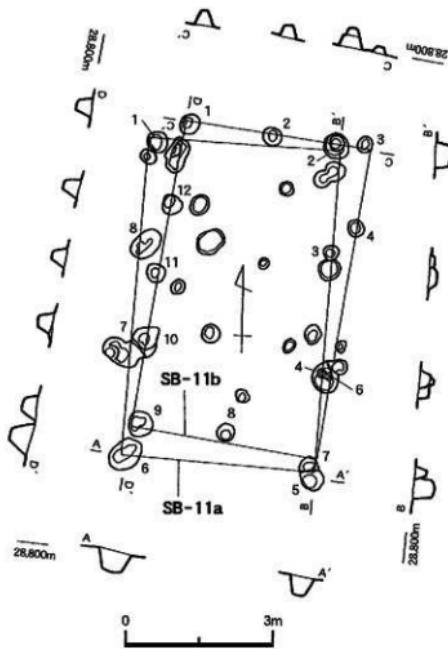
第13図 SB-9・10平面図 (1/100) SB-10土層図 (1/50)

柱建物の中でも最大規模である。他の総柱建物とは離れた位置にあり、主軸も若干東に傾く。切り合いまより、SB-10に後出し、同一位置、同一主軸で建て替えられたものである。

SB-10 橋柱建物。 SB-9に切られる。3間×5間、建物規模は5.3m×11.4mで、身舎面積は約60.42m²。主軸は1°東にふれる。柱間寸法は梁行約1.77m、桁行は北から順に約2.2m、2.55m、2.55m、1.75m、2.35m。柱穴は直径約50cmの円形、Pit 9の深さは40cm、柱痕径は20cmである。これまでの建物に比べ、柱穴、建物規模が小さい。埋土は柱掘り方がかたい暗黄褐色土、黒褐色土、柱穴が暗褐色土である。建て替えはないが、柱痕には炭化米を含む。



第14図 SB-9 土層図 (1/5)



第15図 SB-11平面図(1/100)断面図(1/100)

SB-11 側柱建物。SB-1の東側に隣接している。一度東に軸を変え、建て替えられている。SB-11aは1間×3間、建物規模は4.0m×6.5m、身舎面積は26.0m²。柱間寸法は桁行が北から順に2.3m、2.15m、2.05m。柱穴の直径は約50cm、深さ約45cmである。SB-11bは2間×4間、建物規模は3.9m×6.4mで、身舎面積は24.96m²。柱間寸法は梁行が1.9m、2.0m、桁行が北から1.65m、1.55m、1.35m、1.85m。柱穴の直径は約40cm、深さ35cmである。埋土は柔らかい暗褐色土、柱掘り方に炭化米を含む。主軸方位はSB-11aが東に3°、SB-11bが東に8°ふれる。

(2) 柵列

SA-1~5の5条を検出した。

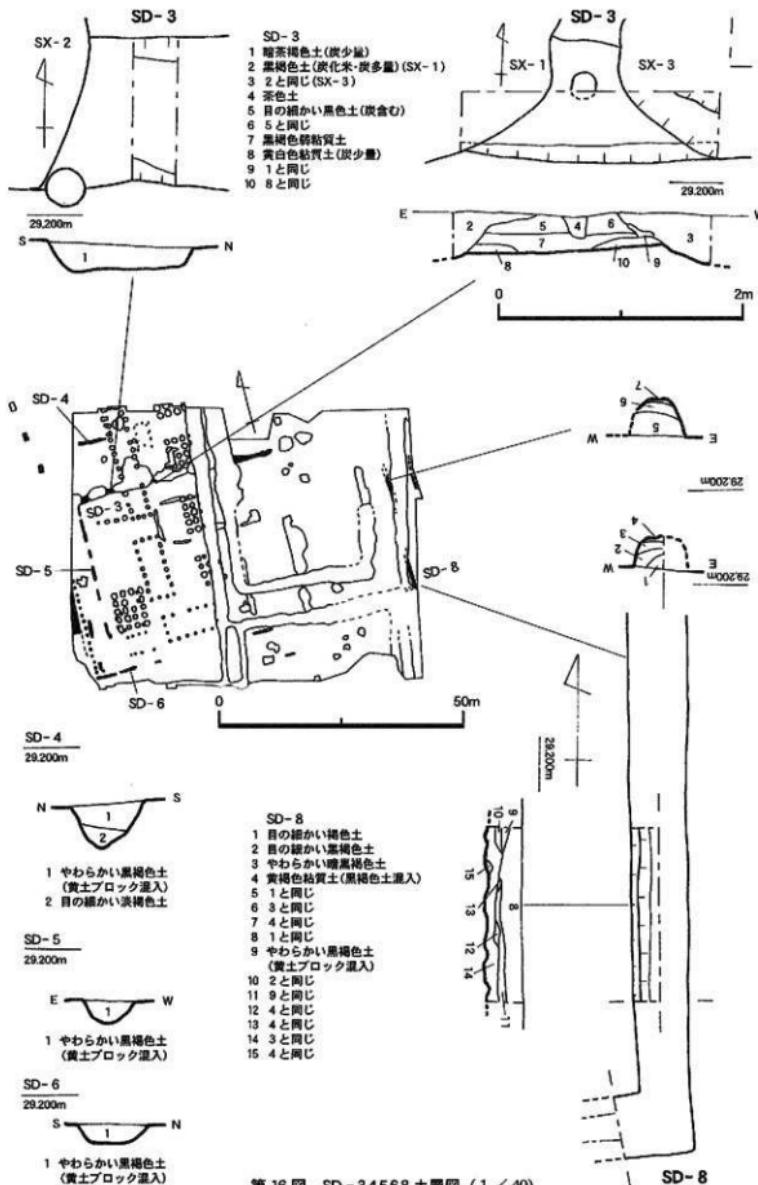
SA-1 調査区の西端を南北にのびる。方位はN 1°W。直徑約50cmの円形で、柱痕は約10cm、深さ約15cmである。柱間寸法は2mである。16個の柱穴を確認している。埋土はSB-1、2、3に共通する黒色土で、柱痕は黒灰色を呈す。北は調査区外に続くと思われるが、南はSD-6をこえない。

SA-2 SA-2はSA-1の東に隣接している。方位はN 4°W。柱穴の直徑は30cmと小さく、8~10個の柱穴が南北にのびる。柱間寸法は1.1~1.5m、軸も若干左右にぶれるなど、SA-1にくらべ、やや不揃いである。SA-1と切り合いかないため、先後関係は不明。SA-4と類似する。

SA-3 SA-3は4つの柱穴からなる。柱穴規模は約0.6m×1.0mの長方形である。柱間寸法は2.4m。方位はN 2°E。埋土は柔らかい単純な黒色土。便宜上柵列としたが、一つ一つの穴の大きさは他の堀立柱建物の柱穴のみで、SA-1、2、4の柱穴のように簡易なものではなく、強固な施設が想定できる。その性格には一考を要する。

SA-4 SA-4は調査区東端で南北にのびる。柱穴は直徑40cmで、6個を確認している。柱間寸法は1.5m、方位はN 3°W。SA-2、4は形状、埋土とも類似しており、同時期のものと思われる。

SA-5 SB-10とSD-6の間にある。方位は北。東西方向に4つたどれるが、間隔は不規則である。SB-10の梁行と、またSD-6と平行である。



(3)溝

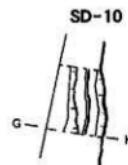
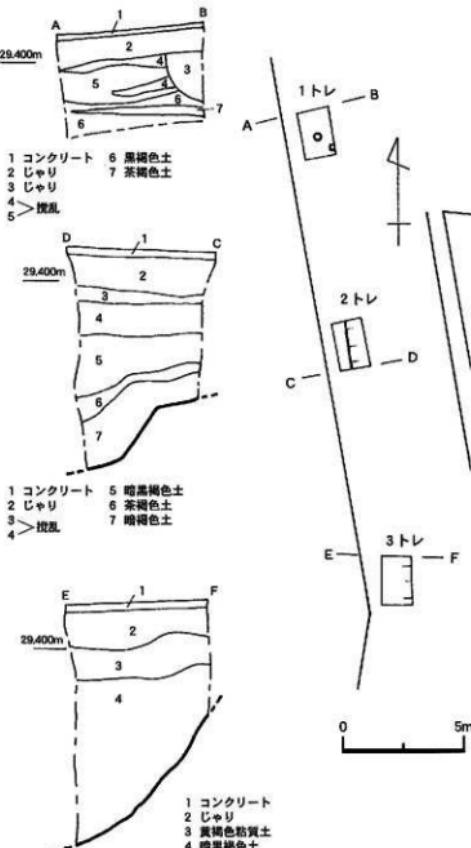
古代と思われる溝はSD-3~11である。
(SD-6,7はSD-8と同一の溝とした。)

SD-3 幅約1.32m、深さ約0.28mで、東西方向の溝。埋土は黒褐色～暗茶褐色土で若干炭化米を含む。床面は平坦。SX-1、2、3は、SD-3よりも深く、土層観察よりSXがSD-3をほりこんでいることがわかる。

SD-4 幅約0.5m、深さ約0.36m。7年度調査区西北隅の東西溝。西端は丸くおさまるが、東はコンクリートの基礎に破壊され、全長不明。埋土は黒褐色土。底面は起伏がある。残念ながら、SB-1との前後関係は破壊のため不明。

SD-5 幅0.44m、全長不明、深さ0.2m。7年度調査区の西端を南北にはしる。北はSD-3に接するが、切り合いは不明。SD-4同様きれいな直線ではない。ところどころとぎれのもの、床面の起伏が原因であろう。埋土もSD-4に共通し、同時期と思われる。

SD-6, 8 SD-6は7年度調査区の南を東西にはしる。西は中世の城跡の堀にきられる。SD-8は調査区東隅で直角にまがり北上する。SD-6、8は一直線上に並ぶことから同一の溝とし、以後、SD-8と総称することとする。溝の幅は約0.45mで、深さは約0.25m。SD-4、5にくらべ、きれいな直線をなす。東西方向ではとぎれとぎれにしか確認できない上、東ではSD-1にも大幅にカットされているが、主要建物群を方形に囲む様が観察できる。7年度調査区内において、SD-8の外側には建物、樹列とも確認できていないため、建物群の範囲を何らかの形で区画する施設と考えられる。SD-10か



第17図 SD-10平面図(1/200) 土層図(1/40)

ら東の直角のコーナーまで、東西長は約90mである。調査区北東部は削平されたのであろうか、地山が低く、SD-8は途切れてしまう。東西方向では溝の底の標高はかわらないが、南北方向では北へ行くほど低くなっている。また、第16図にはSD-8を縦に切った土層図を掲載した。床面が細かく波打っているのがわかる。

SD-7 7年度調査区南端の、東西溝。幅約25cm、確認できる全長は約2.8m。SD-5～9と同じタイプの溝である。SD-8の南側にあり、SD-8とは7.6mの間隔をあけて平行する。

SD-9 7年度調査区南西端の南北溝。短くとぎれているが、確認できる全長は約12.8m、幅約0.5mである。この部分の地山はさがりぎみで、非常に残りが悪い。SD-5と約4mの間隔を開けて平行する。

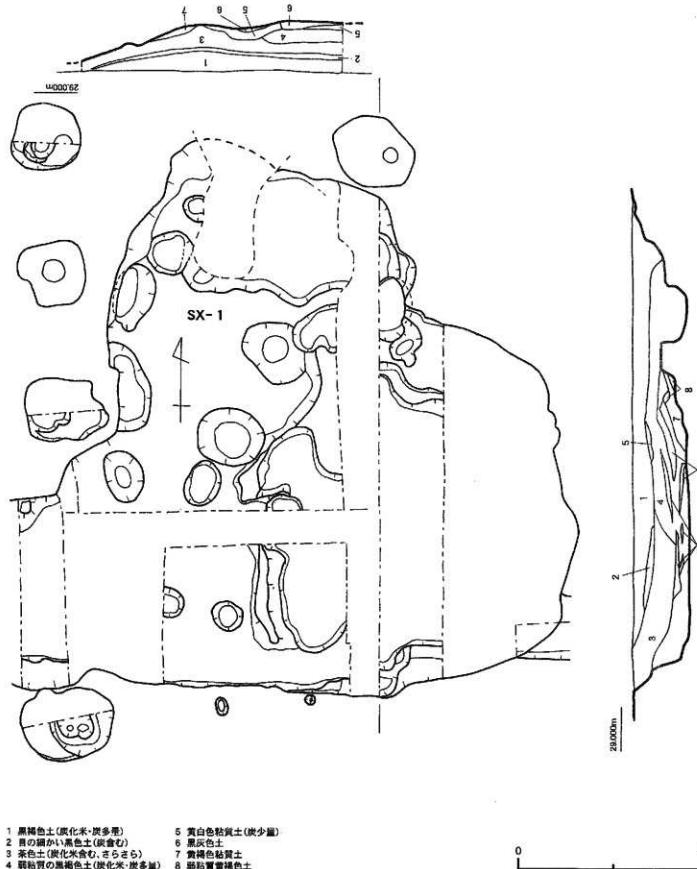
SD-10 7年度調査区の西端に南北に伸びる落ちを検出した。断面はやや二段掘り状の逆台形で、深さは約1.3mをはかる。調査途中、調査区西脇の道路で、水道工事が計画されたため、トレーニングを三ヵ所設定して掘り下げたところ、第3トレーニングでは東から西へ地山の傾斜を確認、第2トレーニングでは西から東へ、溝状の落ちを確認した。第1トレーニングでは溝ではなく、ピットを2個検出した。第2トレーニングの溝状の落ちのラインはSD-10の東の落ちとほぼ平行しており、両者の埋土も似ていることから、同一の溝の可能性が高く、それぞれを溝の両端と考えた場合、溝幅は約4mとなった。建物群の西を限る施設であろうか。SD-10の底の標高は約27.220mで、第2トレーニングの底はそれより約26cm程高いが、第2トレーニングではまだ下へ傾斜している様子がうかがえる。

SD-11 7年度調査区東端の南北溝。確認できる全長は8m、幅0.3m、方位はN3°W。埋土は暗褐色土である。東にSA-4が沿うように並ぶ。SD-8とは約6.6mの間隔を開けて平行する。

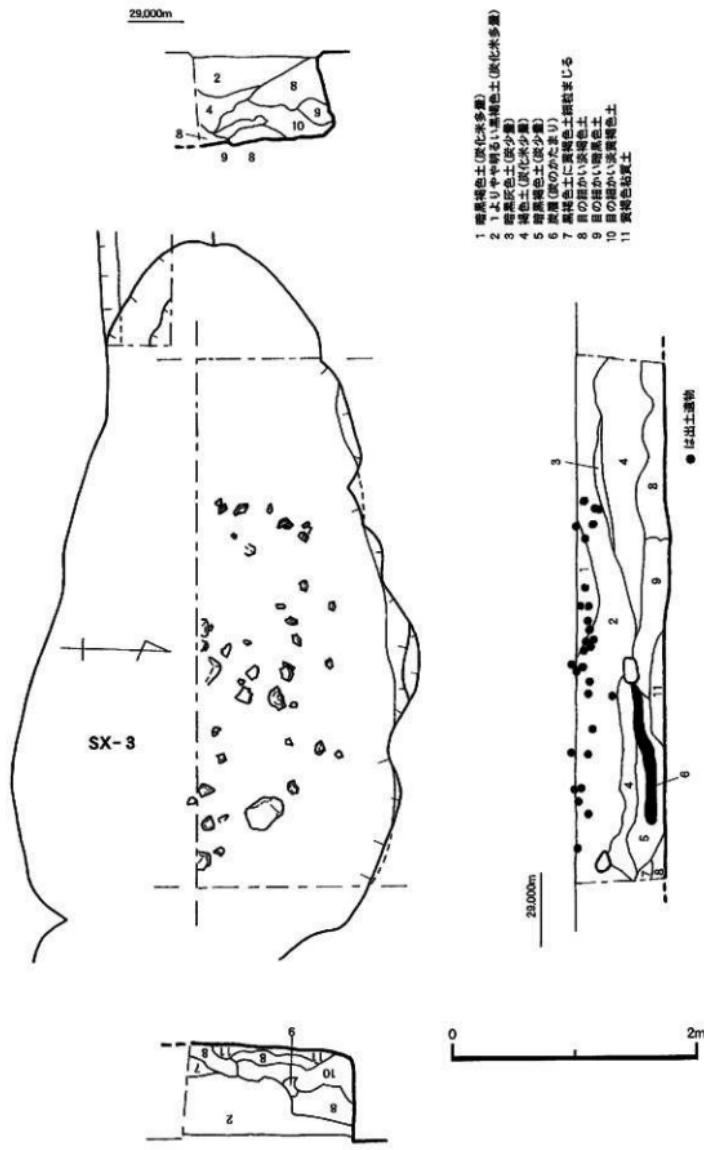
(4) 不定形土壤

SX-1～17。形状が不定形、埋土は真っ黒の柔らかな土で、炭化米、炭化材を多く含むものや、土器を含むものがある。SX-1、2、3などはSD-3をほりこんで造った形跡があり、これらを不定形連續土壤と命名した。また当遺跡の主な出土品は、その多くがSX-1と3、11からである。炭化米もほとんどこのタイプの土壤から出土した。土嚢袋に入れ持ち帰り、洗浄したところ、一部しかほりあげていなければわらず、パンケース21箱分になった。

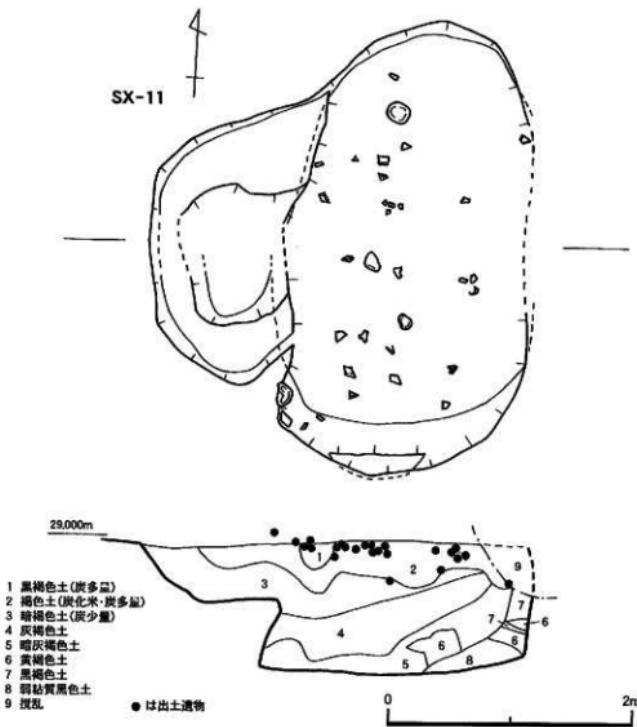
SX-1 調査区中最大の土壤で、SB-1と2、SD-3を切る。形状は乱れており、規模は東西約8m、南北約8.7mを測る。深さは深いところで約90cmある。埋土は二、三度掘り直された痕跡がある。上層（第1、2層）は黒褐色の土で、炭と炭化米を大量に含む層である。少量の黒色土器、土師器を含む。当遺跡中、古代では最も新規を呈す遺物を含む層である。中層（第3層）はさらっとした茶色上で、炭、炭化米が多い。土師器、須恵器を多く含む。下層（第4層以下）はやや粘質の黒褐色土で、炭、炭化米とも大量。土師器、須恵器を含む。そして最下層にわずかに、きめの細かい黒灰色土や黄白色粘質土などのSB-1、2、3など古い建物の柱穴に共通する層が残存する。SX-1がほられたのは、SB-1aの後であり、その後、周辺の建物が火災にあうたび掘り返された火災の片づけ穴であろう。第34図から37図はSX-1出土の遺物である。出土遺物は須恵器、土師器の壺や蓋が中心だが、円面鏡、瓦の小片な



第18図 SX-1平面図・土層図 (1/60)



第 19 図 SX-3 平面図・土層図 (1 / 40)

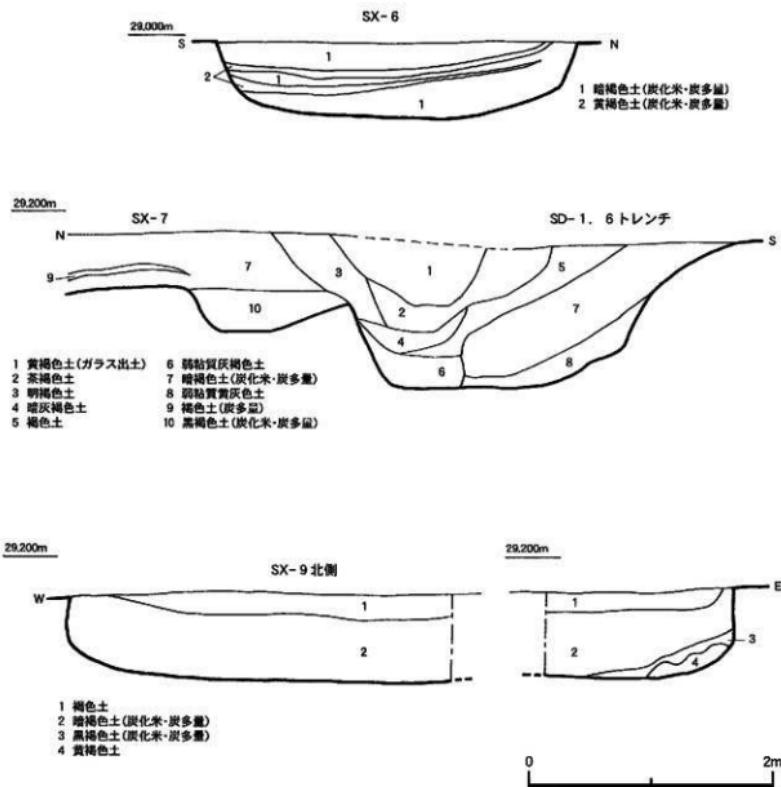


第20図 SX-11平面図・土層図(1/40)

ども出土した。掘り返しのため、古い遺物と新しい遺物が混じりあっている。

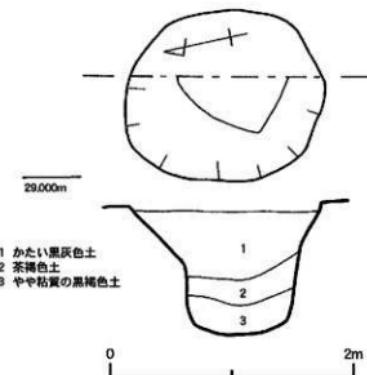
SX-3 SX-1の東にある椭円形の土壙である。南北に約3.2m東西に約5.8m、深さ約76cm。やはり土器片と大量の炭化米を含む。第6層は炭のみの層で、SX-3も火災の片づけ穴である。SX-1と同じく、最下層にはきめの細かい黒灰色土や黄白色粘質土などのSB-1、2、3など古い建物の柱穴に共通する層が認められた。上器は第19図第2層からまとめて出土した。

SX-11 SB-1を切る土壙。南北約3.7m、東西約3m、深さ約1.1m。西が浅く、東が深い。ほりなおされているようで、二つの穴が切りあった形をなす。東の断面は焼面がえぐれている。東側を一部神戸製鋼の建物基礎に削られる。やはり、大量の炭化米を含み、上層に土器がまとめて出土している。第40図の112～117である。図示できなかったが、須恵器壺小片の割合が多い。



第21図 SX-6, SX-7, SD-1, SX-9 土層図 (1 / 40)

SX-1、3、11とも炭化材の層の上に土器片と多量の炭化米を含む層があり、自然堆積でなく、故意にうめられたものである。その他の土壙は建物から連いせいか、炭化米は含むが土器の量は極めて少ない。不定形土壙群は不規則に分布するのでなく、そのほとんどが東西方向、南北方向に直線的に連なっており、ただ単に連続して掘っただけなのか、なにかを区画する意味をもって掘られたのかは不明である。またSX-6、8、9、20などでは土壙に沿うように、小さなビットを観察することができた。いずれにせよ最終的には火災の片づけ穴として利用されている。



第22図 SK-1平面図・土層図(1/40)

(5) 土壙

SK-1 調査区北西隅、SB-1の西に位置する。直径約1.6m、深さ約1.8mの円形土壙。堅い粘質の黒灰色土がつまっており、出土遺物はなし。他の遺構とは埋土が異なり、性格は不明である。

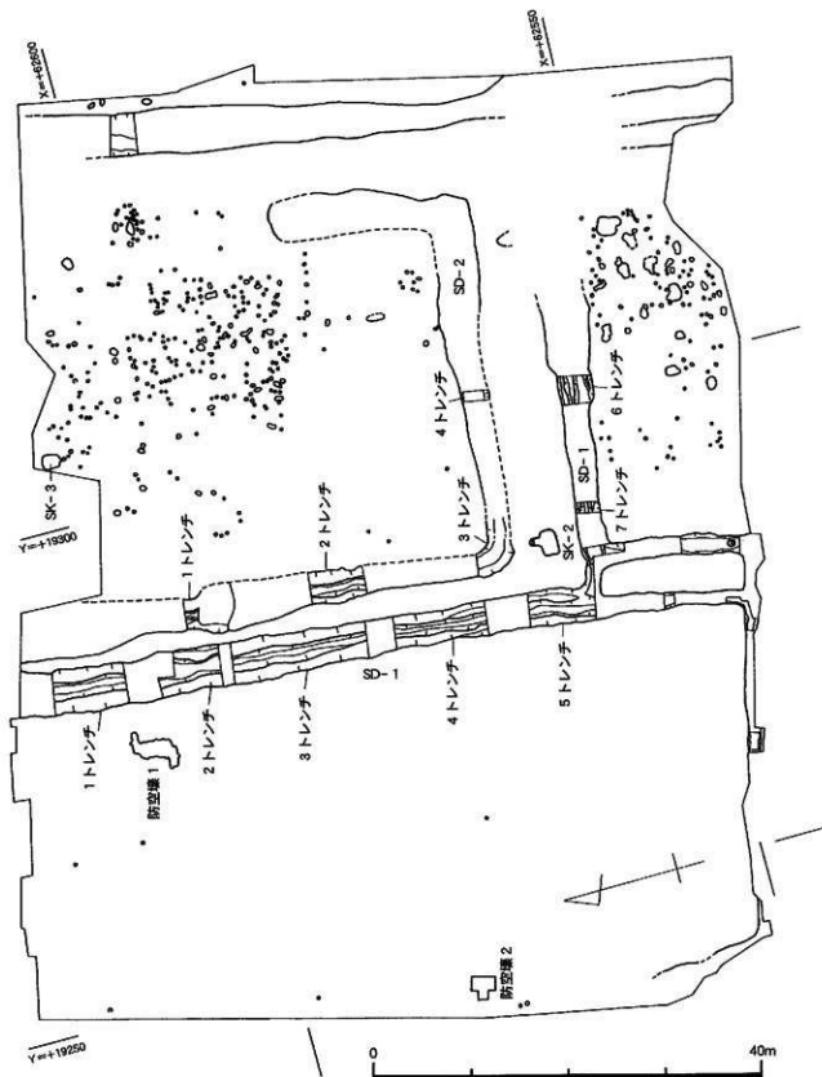
3. 中世の遺構

(1) 溝

調査区ほぼ中央を南北にSD-1、SD-2の二条の溝が平行してはしり、東におれまがって方形の空間をつくる。

SD-1は3トレンチで幅約3.24m深さ約1.3m。古代の掘立柱建物を横切っているため、掘立柱建物の柱穴断面が溝の壁面に露出する。調査区東側にSD-2と共に二重の堀を形成する。西南隅で幅約1.5m、深さ約0.5mの細い二またの溝に別れる。軍需工場の施設に削られているが、東南隅でも西南隅と同じように南に二条に別れる様子が伺える。また西南隅で二またに別れた溝はますます浅くなり西にまがる。調査区東端では擾乱が著しく北端、南端とも途切れている。内側のSD-2は幅約2.5m、深さ約1.14mであるが、溝の縁は多くをコンクリートの基礎などで削られている。東側は途中でとぎれているが、調査区北東隅にむかって地山がさがっていることから、溝が終了しているのか、削られてみえなくなったのかは不明。

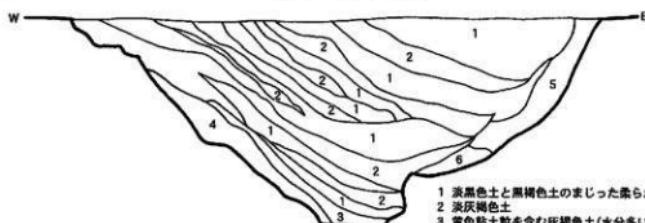
SD-1の3トレンチ北側土層図をみると淡黒色土と黒褐色土のまじった柔らかい土(1層)と淡灰褐色土(2層)が薄い層をなし、交互に埋められている。断面東端の炭まじりの淡茶褐色土(5層)は1層、2層が埋められる以前から存在していた層の可能性があり、比較的早い段階の埋上かもしれない。SD-1とSD-2の間にはビットがなく、土壙が築かれていたと想定できる。SD-1の西南隅と東南隅にある浅めの二条の溝の間にも土壙があったと考えられる。



第23図 平成7年度調査区造構配置図（中世・近世）（1／500）

29.000m

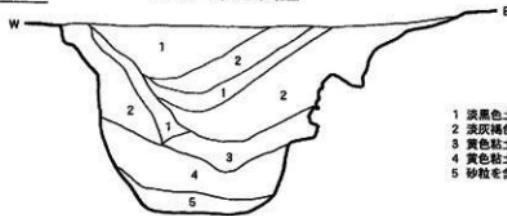
SD-1, 3 トレンチ北壁



- 1 淡黒色土と黒褐色土のまじった柔らかい土
- 2 淡灰褐色土
- 3 黄色粘土粒を含む灰褐色土(水分多い)
- 4 細灰褐色土
- 5 淡まじりの淡茶褐色
- 6 小石多数

29.000m

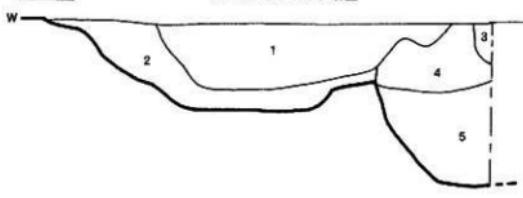
SD-2, 2 トレンチ北壁



- 1 淡黒色土と黒褐色土のまじった柔らかい土
- 2 淡灰褐色土
- 3 黄色粘土粒を含む灰褐色土(水分多い)
- 4 黄色粘土粒を含む暗褐色土
- 5 砂粒を含む黄色粘土

29.000m

SD-2, 3 トレンチ北壁

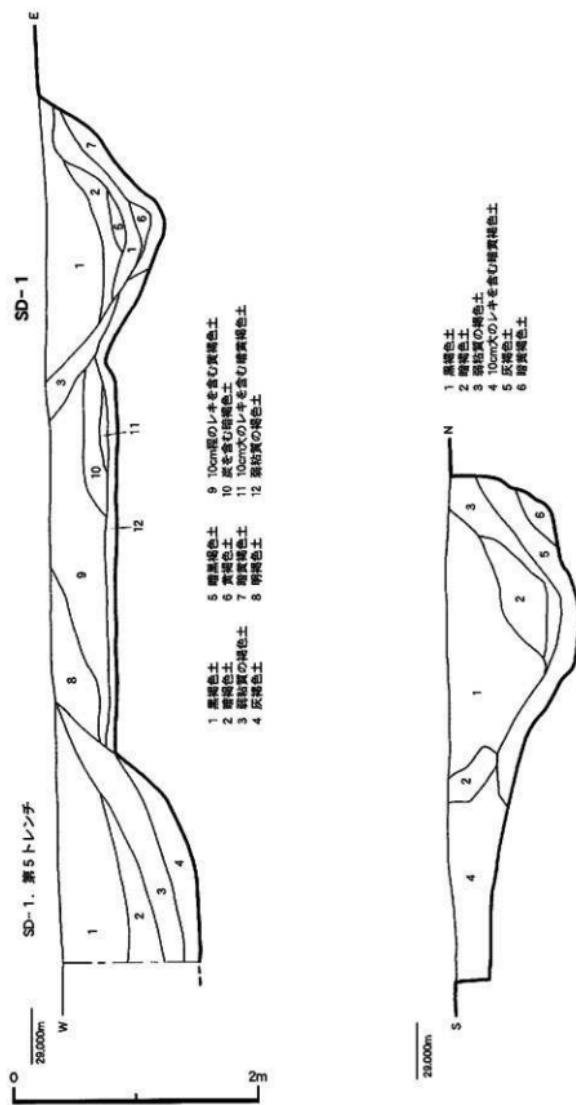


- 1 レキ少量含む黄褐色土
- 2 棕色土
- 3 黑褐色土(基穀うめ土)
- 4 暗褐色土(施肥米・木質化)
- 5 黑褐色土(施肥米・未含む)

0

2m

第24図 SD-1, 2 土層図 (1/40)



第25図 SD-1 5トレーンチ土層図 (1 / 40)

(2) 土壙

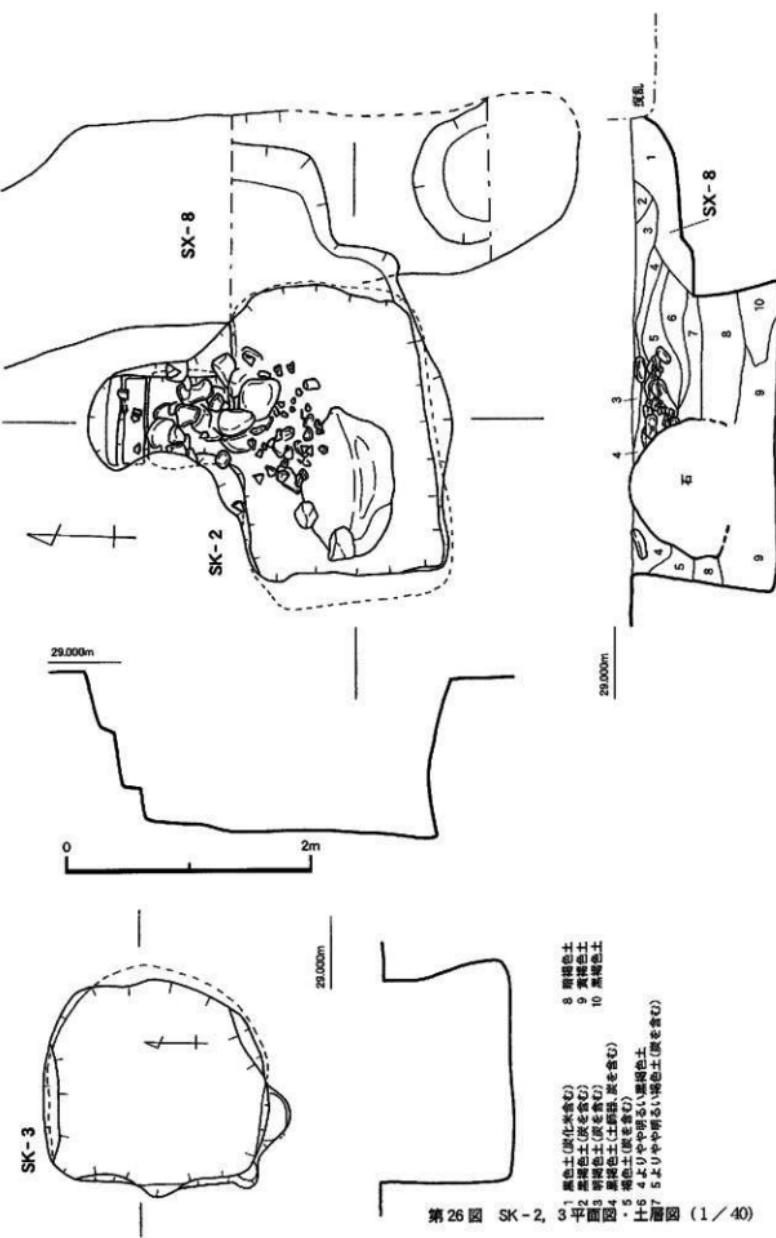
SK-2 SD-1とSD-2の南西コーナーに、二つの溝に挟まれる位置にある。約1.7m×2.4mの東西に長い形で、深さ約1.15m。北辺に幅約0.72mの階段を持つ。現状で階段は二段確認されている。床面は平坦で、やや逆台形ぎみに広がる。東辺はSX-8を切り込んでいる。土壙内には直径約1.14mの巨大な石が床面から40cmほど浮いた状態で出土した。石が大きすぎること、遺構が破壊される心配がないことから、あえて石の下は発掘していない。また、階段付近の上層には20~30cm大の河原石が集中し、土器片が出土した。土器は瓦器碗、瓦質土器などで、15~16世紀のものである。中層より下からは遺物、石とも出土しない。これら遺物の時期と穴の形状から、SK-2は中世の地下式土壙であると判断した。地下式土壙の用途は不明であるが、石、土器とも床面から浮いた状態であることから、土壙内は一定期間空洞の状態であったと考えられる。土壙は二条の堀の間に収まること、堀と輪を同じくすることから、同時期の遺構と判断した。

SK-3 調査区北辺やや東よりにある。約1.4m×1.23mの丸みを帯びた方形の平面形で深さは約0.8m。床面は平坦でやや逆台形形状に広がる。他の中世遺構と同じく褐色土がつまっており、瓦器碗、瓦質土器などの遺物が穴の上層部より集中して出土した。穴の平面、断面形態からゴミ捨て穴などではなく、SK-2同様地下式土壙と考えた方がよいのではないか。

(3) ピットその他

保存を前提としたこと、古代遺構を優先したことから、ピットは未掘のものが多い。調査区西半分はいくらか掘ったが、東半分はほとんど未掘で、土の色が黒色あるいは黒褐色のものを古代、淡褐色、茶色のものを中世以降とした。西半分は近代のものもあるかと思うが大半が古代で、薄い色のピットは東半分に集中していた。特にSD-1、SD-2で囲まれた方形の区画の中におさまっており、二つの溝の間にはない。方形区画内のピットは小さく、建物の形をなぞることはできなかったが、横列かと思われる直線的な並びをいくらか確認できた。

地元の方にうかがったところ、本来この地は現在よりも1~2mほど土地が高く、畑として利用されていた。戦前神戸製鋼の軍需工場建設に伴い、地下げを行い、削った土で工場への引き込み線を建設した。堀は3mほどの深さで、二重に巡っており、「深い溝があるから気をつけるよう」に言っていたという。掘りあげてみると、溝の底まで近代の遺物が出土する。方形区画内に建物跡をたどることができるのは中世の遺構面が削平されているためであろう。SK-2、3は現在よりかなり深かったことになり、深さ約2mは想定できる。

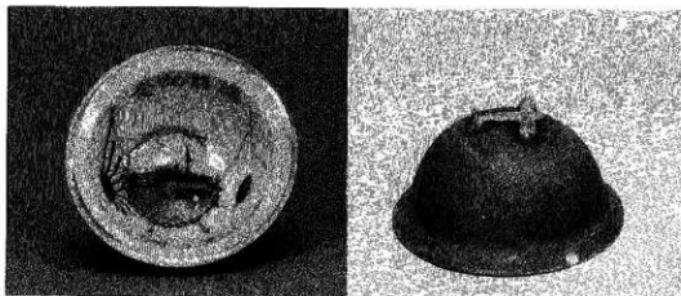


4. 近代の遺構

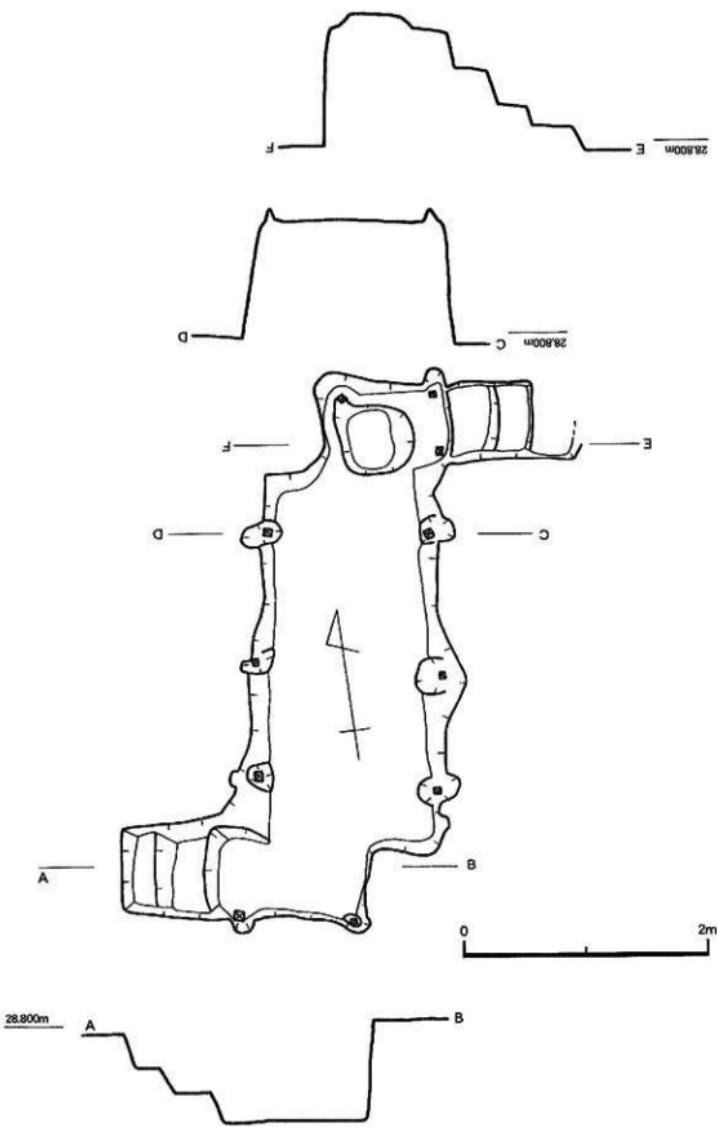
(1) 防空壕

防空壕1 SB-6の中央を破壊し、素掘りの防空壕が掘り込まれている。南北に長い長方形で、約1.1m × 4.4m、0.8m幅の階段が北東コーナー、南西コーナーにそれぞれ付属する。現状で北東コーナーは三段、南西コーナーは二段を数える。壁沿いには先端を尖らせた四角形の杭の跡がならび、素掘りの穴に杭を柱にして天井を支えた防空壕の構造がわかる。階段は南北に長い室内に対し、どちらも直行して作られている。お年寄りから聞いたところによると、防空壕を作る時は、爆風で内部が一気にやられないので入り口は部屋に直行して作るものだと教えられた。調査時、ここには、木切れやゴミなどがうめられていた。

防空壕2 調査区の西端にある。1.5m × 2.4mの方形のコンクリート製。西側に階段が張り出して付属し、地下へ続く。床もコンクリート張り。天井は蒲鉾型。発掘時、内部は空洞で、若干土が落ち込んでいるだけだった。床面から、戦時中の「たんぐつ」が出土した。「たんぐつ」とは底だけでなく、全面一枚のゴムからなるズックのこと、戦時中当時の子供達がはいていたという。また、この辺りから戦時中の盃が一点出土している。口径5.5cm、器高2.7cm。盃は茶色で、ふせると兵隊のヘルメットの形をしており、てっはに飛行機がかたどられている。内面には中央に戦艦、両端に日章旗と軍艦旗を描き、日本海軍を表す。船の上に「満期記念」、下に「戸田」とかかれている。外面上には「意匠有権」と記されている。海軍の除隊記念に「戸田」さんという人が近しい人に配ったものであろう。



防空壕2出土の盃



第27図 防空壕1 (1/40)

第四章 平成8年度の調査

1. 調査の概要

7年度調査区の南側には道路をはさんで寺が建っている。平成8年度、さらにその南側の空き地に寺院の建設計画があがったため、工事に先立ち確認調査を実施した。7年度調査区の南端から約90m南で、南北約75m、東西約90mの四角い土地である。ここは7年度調査区と同じく戦時中神戸製鋼の軍需工場の一部となっていた場所である。現地は背の高さほどの雑草が生い茂り、雑木が生え荒廃していた。荒れ地に分け入ると、あちこちに穴が開いており、ゴミなどが捨てられていた。調査は重機で掘削をしたのだが、見通しがきかずトレンチの設定が思うようにいかなかった。深く掘り込まれた穴をさけつつ20本のトレンチを設定した。7年度調査区と似た形状の土地だったので、区画溝の存在を想定し周辺部にトレンチがかかるよう調査した。

その結果、第1トレントから東西方向の溝二条、南北方向の溝一条が見つかり、可能な限り溝を追い掛けトレントを拡張した。溝の周辺からピットが多数検出された。しかし、遺構はまさにこのトレントのみに集中していた。調査区全域では攪乱が著しかったが、これより南からは、遺構らしきものは検出できなかった。ピットすらなく、遺物も一点も拾えなかった。ゆえに、第1トレント以南では遺構は存在しないと判断した。当初の調査予定地よりも若干北にはずれるが、溝の延長を求めて第2トレントを設定した。しかしここにも遺構は確認できなかった。

寺院建築の設計図をみると、唯一遺構が確認された第1トレントは、ちょうど通路に予定されていた。地表面に簡単な舗装工事をするのみで、遺構は傷つけられないことから、埋め戻して計画通り工事を行う事に同意した。

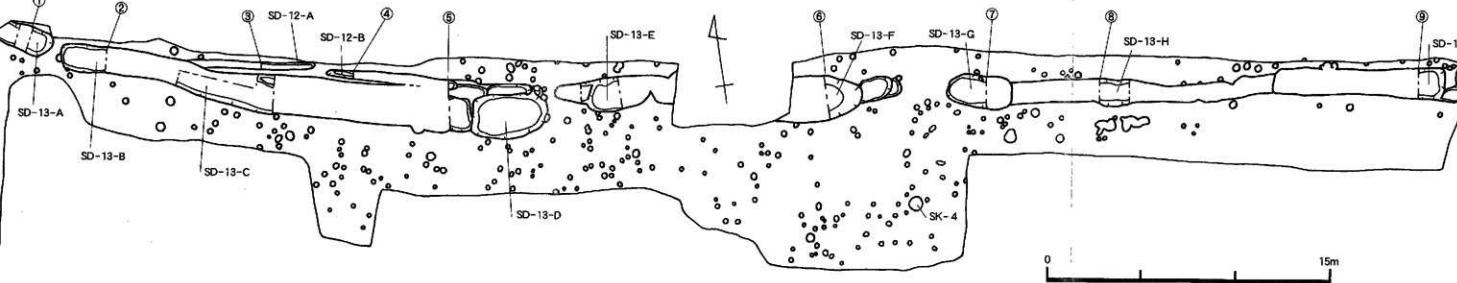
2. 遺構

(1) 溝

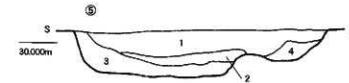
SD-12 8年度調査区内の東西方向の溝である。SD-13にカットされるため全長は不明。確認出来る範囲では、全長約6.6mのA(西側)と、全長約11mのB(東側)に分かれ。幅約40cm、深さ約20cmと浅い。形状は7年度調査区のSD-4、5、6、7、8、9、11、12に類似する。埋土はさめの細かい暗褐色土の單一層。SD-12-Aからは裏面に墨書きを有す須恵器の皿が出土している。第28図断面③、④と⑥の第4層がSD-12にあたる。

SD-13 8年度調査区内の東西方向の溝で、SD-12を切る。確認できる東西の全長は約78mである。四本の溝が途切れ途切れに連続する。西側の断面①では幅約1.3m、深さ約45cm、断面②では幅約1.6m、深さ約60cmの断面逆台形の溝である。D、E、F、Gの各地点で溝に沿って土壌が掘り広げられている。D地点の出土遺物は上層と下層に別れる。床面からは8世紀代の須恵器が出土した。最上層の遺物は溝の上から掘り込まれた層から出土しており、10世紀代の上飾器、黒色土器が一括して廃棄されていた。溝の西端では北へカーブする形状を示すため、調査予定地外であるが第2トレントを設定した。ここは寺域の通路になっており、左右に樹木に囲まれているため規制された範囲での掘削となつたが、溝は確認できなかった。このまま溝が北へのびるとすれば、西のコーナー部が途切れていることも考えられる。

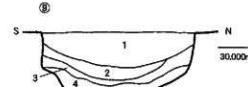
第1トレンチ



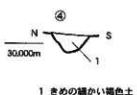
1 黒褐色土 1:黄褐色土 1
2 黒褐色土(黄土ブロック含む)
3 かたい黒褐色土
4 黄褐色土
5 黑褐色土に2よりやや多く
黄土ブロック入る



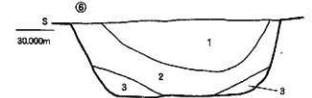
1 きめの細かい黒褐色土
2 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロック入る
3 きめの細かい黒褐色土
4 きめの細かい淡褐色土(SD-12)



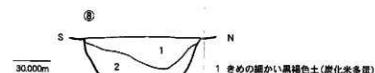
1 棕色土
2 やわらかい淡褐色土
3 かたい黒褐色土
4 ややかたい黒褐色土
(黄土ブロック多量)



1 きめの細かい黒褐色土



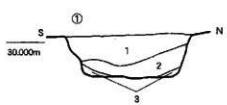
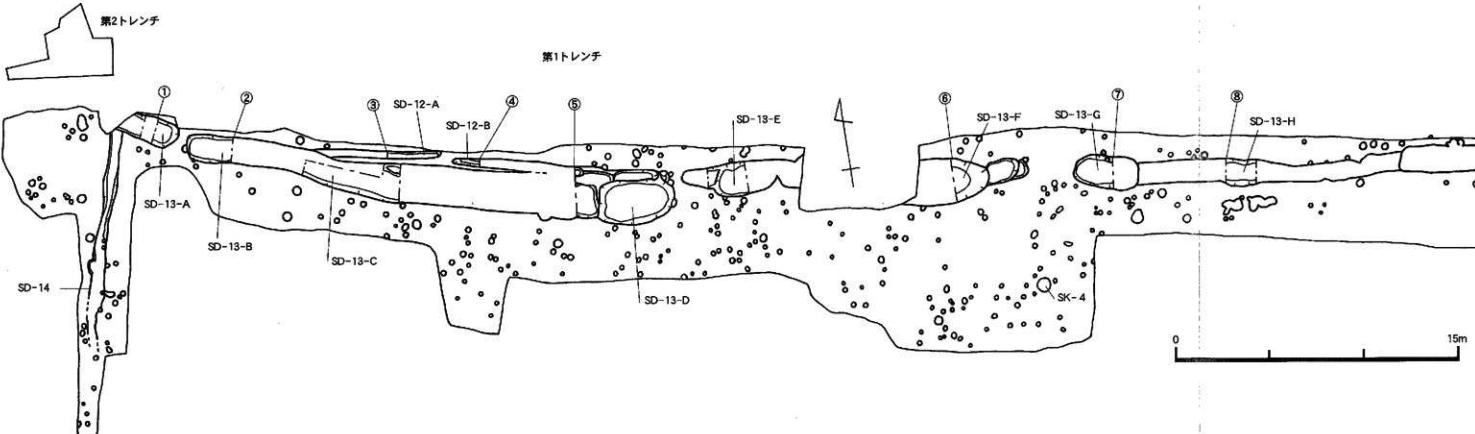
1 棕色土
2 きめの細かい黒褐色土
3 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロック入る



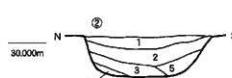
1 きめの細かい黒褐色土(炭化米多量)
2 やわらかい黒褐色土に細かい淡褐色
ブロック入る



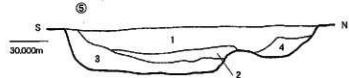
第28図 平成8年度調査区遺構配置図 (1/200) 土層図 (1/40)



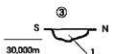
1 きめの細かい黒褐色土
2 やわらかい黒褐色土
3 黄褐色粘土



1 黒褐色土: 1:黄褐色土 1
2 黑褐色土(黄土ブロック含む)
3 かたい黒褐色土
4 黄褐色粘土
5 黑褐色土に2よりやや多く
黄土ブロック入る



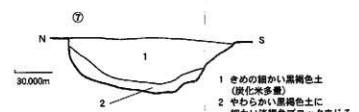
1 きめの細かい黒褐色土
2 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロック入る
3 かたい黒褐色土
4 黄褐色粘土
5 黑褐色土に2よりやや多く
黄土ブロック入る



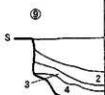
1 きめの細かい黒褐色土



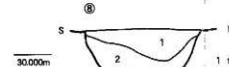
1 きめの細かい黒褐色土



1 きめの細かい黒褐色土(炭化米多量)
2 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロックまじる



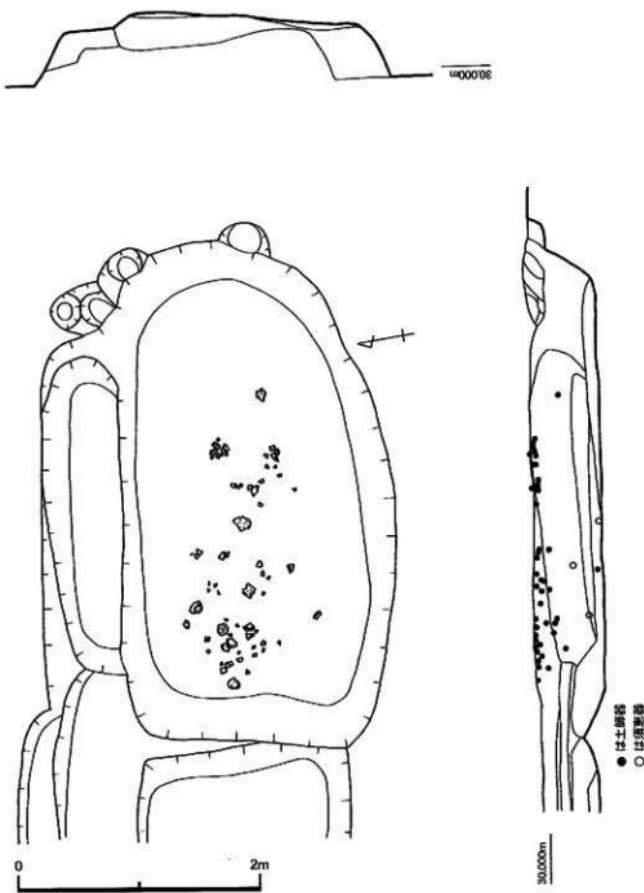
1 きめの細かい黒褐色土(炭化米多量)
2 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロックまじる
3 黄褐色粘土



1 きめの細かい黒褐色土(炭化米多量)
2 やわらかい黒褐色土に淡褐色ブロックまじる
3 黄褐色粘土

0 2m

第28図 平成8年度調査区造構配図(1/20)



第29図 SD-13-D地点 平面図・土層図 (1/40)

A、B 地点では、埋土に黄色の地山粘土ブロックが多量に含まれている。溝に土壘状のものが附隨し、埋められたとも考えられる。炭化米も出土しており、特に G、II 地点から多量に出土している。

SD-14 第1トレーナー西側にある南北方向の溝。幅約60cm、深さ約15cmで、堅い明褐色の埋土。南側で浅くなり、消える。北側は SD-13 を切り、調査区外へのびる。ほとんど遺物はないが、近世磁器の小片が出土したため、江戸時代以降の溝と判断した。

(2)柱穴

第1トレーナー内で、図面上多数のピットが検出されているが、いずれも掘りあげてはいない。SD-13 より南のものは薄茶色のものが多く、木の根も多数ふくまれていると思われる。古代と推定できる黒色のピットは SD-13 沿いにはほとんど集中する。特に E 地点、I 地点付近で、調査区北壁沿いに東西方向に直線的にならんいる。横列となるのだろうか。

(3)土壤

SK-4 は浅い皿状の土壤で、遺物が表面にもりあがるように露出していた。土壤の上面はカットされ、わずかに底部が残る状態であったようである。出土した遺物は中世の瓦質土器で、八並城関連の遺構であろう。



SD-13跡は、現在寺の通路になっている

第五章 平成 12 年度の調査

1. 調査の概要

平成 7 年度調査区の東側に広い空き地がある。面積 5,000m²ほどの四角い土地で、台地の東端にあたる。7 年度調査で遺跡の西端は台地の西の落ちに共通することがわかった。同一台地上の東端まで遺跡が連続することが予想され、確認調査を行うこととした。

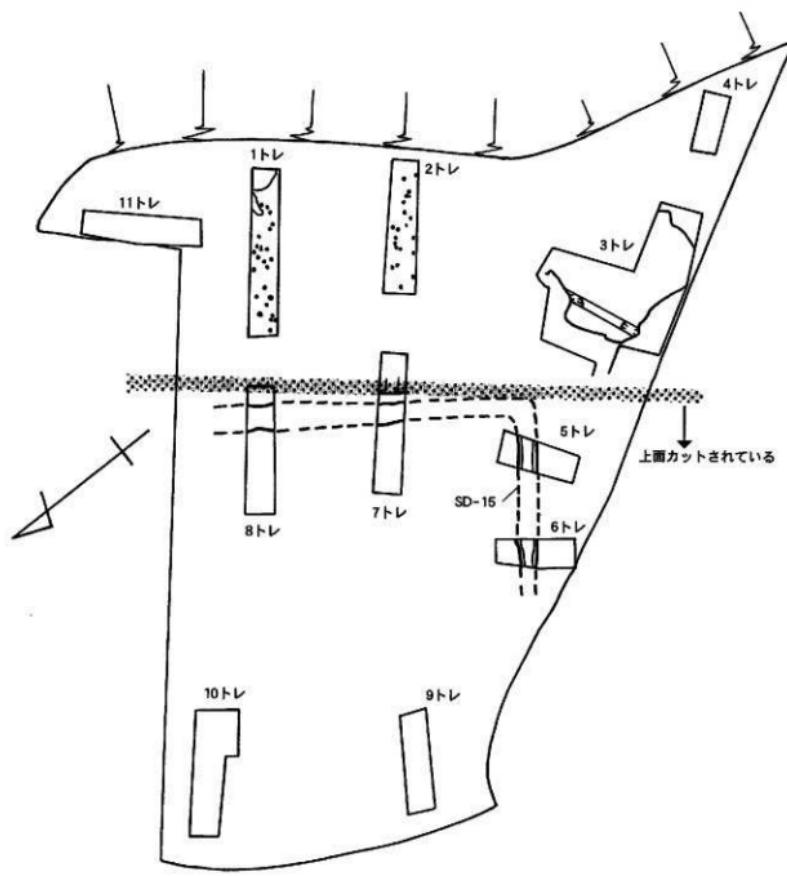
平成 12 年 6 月、土地の所有者の了解を得て、国庫補助事業で調査を行った。現地は標高約 30 ~ 30.5m の平坦な土地である。東の谷の水田とは 1.5 ~ 2 m ほどの明確な段差を持つが、これは戦後造られた地形であった。本来、調査区の中程から東へ向かって傾斜していた土地を、畑にするために西側を削り、東側へ土を移動させて平滑にし、谷との段差が明確になったものである。近年別の人物に買い取られ、将来宅地にするため、さらに土地全体がならされ、表面はまざで整地されていた。

調査区西側が削平されたと聞き、遺構の検出は東側に期待することとなった。調査は重機によるトレンチ掘りで行った。全部で 11 本の調査区を設定した。聞き取りを裏付けるように、調査区の西 2 / 3 は旧地表面が削られ、深さ約 80cm ほどで山肌があらわれた。ピット一つなく、遺物も検出できなかった。ここでも神戸製鋼時代と思われる、コンクリートの建物基礎や、深くえぐられたゴミ捨て穴が出土した。ただ、中世以降の溝 SD - 15 を検出することができた。古代の遺構はやはり東側で確認できた。第 1 レンチ、第 2 レンチでは、北側では地表面より約 1 m で遺構面に到達したが、そのまま傾斜し、南端では深さ約 1.5m まで達した。レンチ内全体に古代と思われる黒色のピットが点在していた。第 3 レンチでは古代の大きな土壙 SX - 21 を検出した。1、2、4 レンチで古代の溝の存在を期待したが、確認にはいたらなかった。

2. 遺構

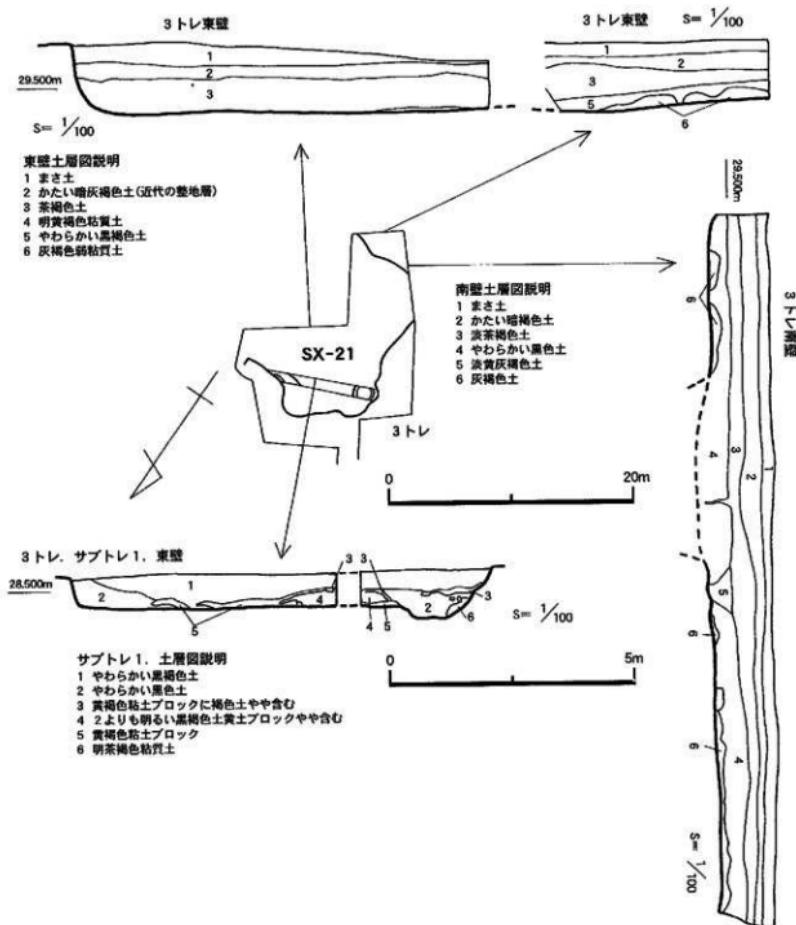
(1) 土壙

SX - 21 第 3 レンチでは深さ約 1 m ほどで大きな遺構 SX - 21 を検出し、レンチを拡張した。レンチの両端では地表面から遺構面までの深さは約 1.5m に達した。掘りあげた土の量も多く、梅雨時期で壁の崩落のおそれもあったため、遺構の全形は未確認であるが、これ以上の拡張は断念した。遺構の埋土は黒色で、周囲にやはり黒色のピットが数個確認できた。遺構内に東西方向に幅 80cm、長さ 2.1m のレンチをいた。少し掘り下げただけで、水がわきだし、常時水中ポンプで水揚げが必要な状態であった。SX - 21 のレンチ内の床面は平坦で、両端に窪みがあった。土層をみると、上層が黒色土、下層に地山の黄褐色粘土ブロックが多数混入していた。SX - 21 の土層、平面形は、7 年度調査区の SX - 1 を思いおこさせた。SX - 1 の床面には、上をとったあとのような凹凸があり、SX - 21 の床面の窪みもそれに共通するものかもしれない。遺構の上層からは 8 世紀代の土器が出土した。

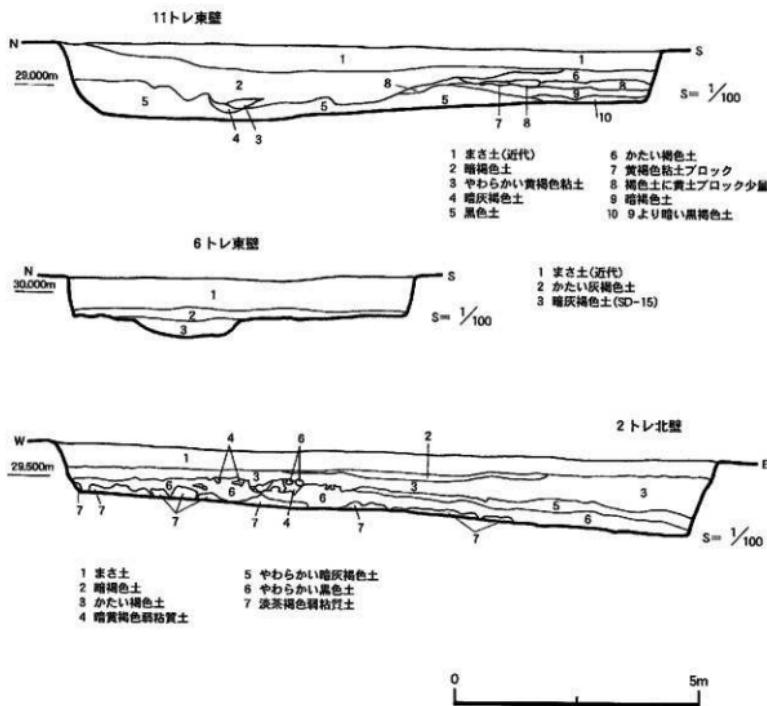


0 25m

第30図 平成12年度調査区平面図 (1/500)



第31図 第3トレーンチ平面図 ($1/400$) 土層図 ($1/100$)



第32図 2. 6. 11トレンチ土層図 (1/100)

(2)溝

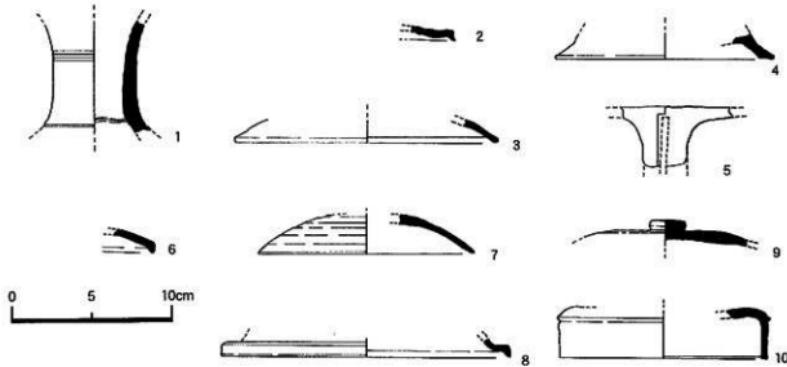
SD-15 第5、6、7、8トレンチから地表面より約0.8mで幅約2mの溝が検出された。7、8トレンチでは遺構の検出にとどめ、5、6トレンチでは発掘した。しかし、溝は非常に浅く、深さ約25cmであった。埋土は堅い暗灰褐色土で、床面は平坦だった。第5トレンチの南で曲がり7トレンチへつながる同一の溝と考えられる。地山は赤い山肌をみせており、後世に削平をうけている。溝ももっと深さがあったものが、上部が削られ、床面が残ったものであろう。

溝からは近世の振り鉢のほかに、ガラスのインク瓶も出土した。溝が中世の八幡城の遺構の可能性があるが、長年開いた状態で利用されていれば、古い遺構でも新しい遺物は混入するものであり、溝の成立年代は不明である。

第六章 出土遺物について

1. 平成7年度調査区出土遺物

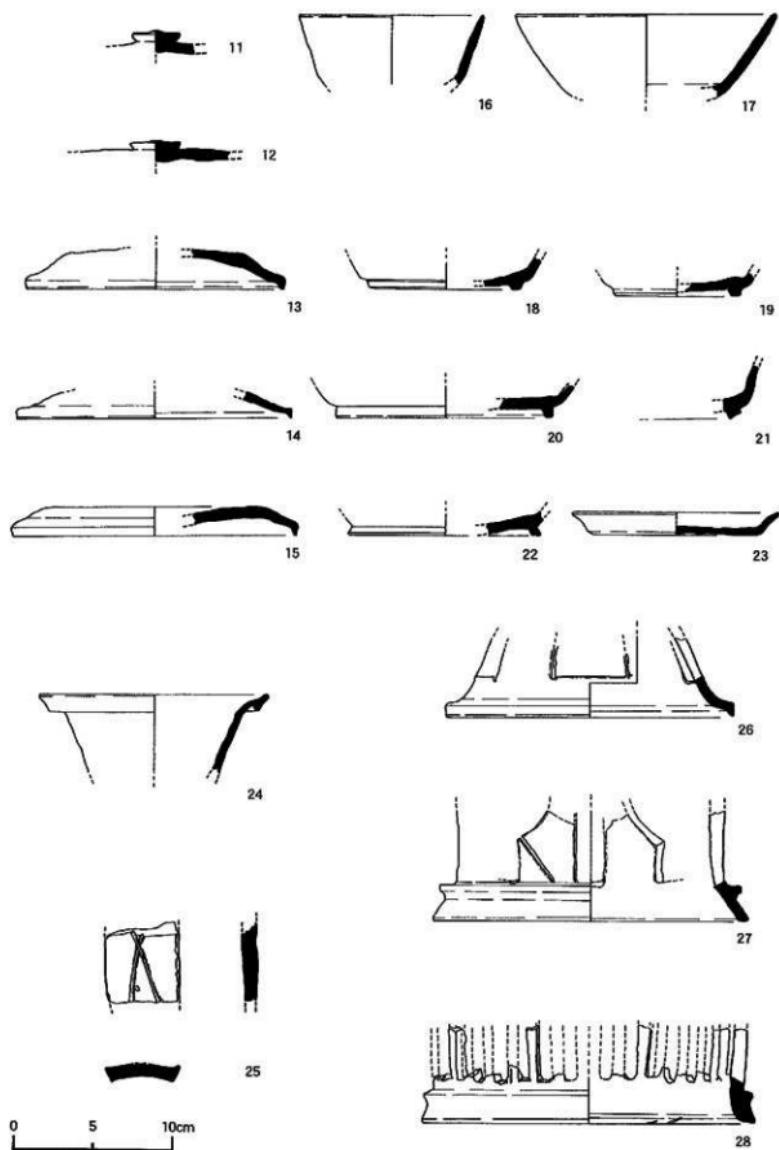
SB-3、5、6、7、9 1は須恵器長頸壺。頸部に三条、頸部付け根に一状の沈線がめぐる。SB-3のPit17から出土した。2、3は須恵器坏蓋口縁部。2はSB-5 Pit 2最上面出土。天井部は低く扁平で、口縁端部のみ短く屈曲し、とがった先端が接地する。8世紀後半。3はSB-5 Pit 5最上面出土。口縁端部は丸く、屈曲せずのびる。4はSB-5 Pit 1出土。須恵器壺の脚か。5は3と同じくSB-5 Pit 5最上面出土の土師器高杯。外面にヘラミガキを施すようであるが、器面があれており、わかりにくい。8世紀後半か。6はSB-6 Pit 3の柱掘り方より出土した須恵器坏蓋で、断面三角形の端部は直角に垂下する。小片のため決めがたいが8世紀前半～中と思われる。7はSB-6 Pit 6最上面出土の須恵器坏蓋。外面には水引痕が明瞭で、先端は丸く、屈曲せずまっすぐのびる。8はSB-7 Pit10出土。須恵器円面碗又は高杯の脚部であろうか。9はSB-9 Pit14二度目の柱掘り方出土。天井部外面回転窓削り後未調整。10はSB-9 Pit 5二度目の柱掘り方出土。焼成時のひずみがあり、口径は多少前後すると思われる。古墳時代坏蓋か。



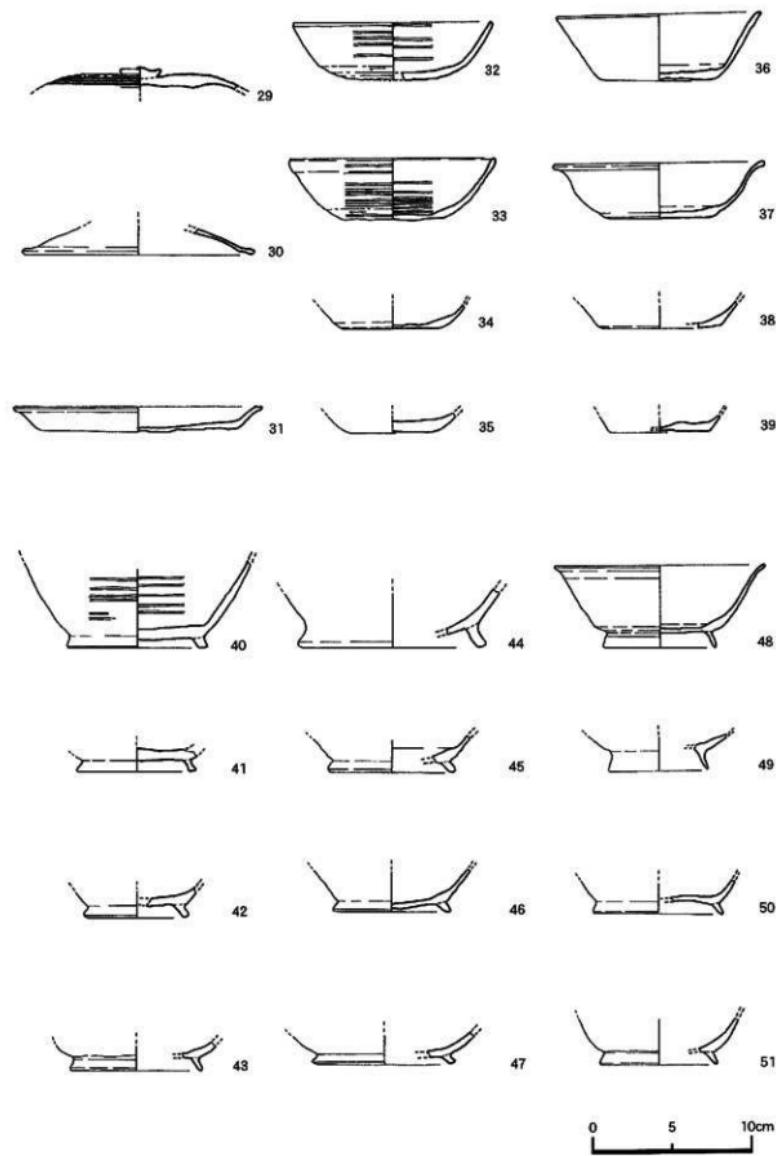
第33図 SB-3, 5, 6, 7, 9出土遺物実測図 (1/3)

No.	出土遺物	性 種	器 様	法 量 (cm)	色 質	調 査	備 考
1	SB-3 pit17	須恵器	長頸壺	頸部幅 5.2cm	暗灰色	回転コナデ、頸部に三条、頸部との接合部に一の沈線	
2	SB-5 pit 2	+	坏蓋		暗灰色	回転コナデ	
3	+	pit 5	+	16.7	灰色	回転コナデ	内部に沈線、底部掘削しない
4	+	pit 1	?	13.7	暗墨灰色	回転コナデ	外面自然釉
5	+	pit 5	土師器 高 壺	脚部幅 2.8cm	橙褐色	外面部コナデ後横方向へヘラミガキか?	剥離著しい
6	SB-6 pit 3	須恵器	坏 蓋	20.1	淡灰色	回転コナデ	
7	+	pit 6	+	13.4	内: 淡褐色 外: 淡青灰色	回転コナデ	底部掘削しない
8	SB-7 pit10	+	?	18.2	灰色	回転コナデ	
9	SB-9 pit14	+	坏 蓋		淡青灰色	外面回転ヘラケズリ後未調整	
10	+	pit 5	?	13.0	青灰色	回転コナデ	

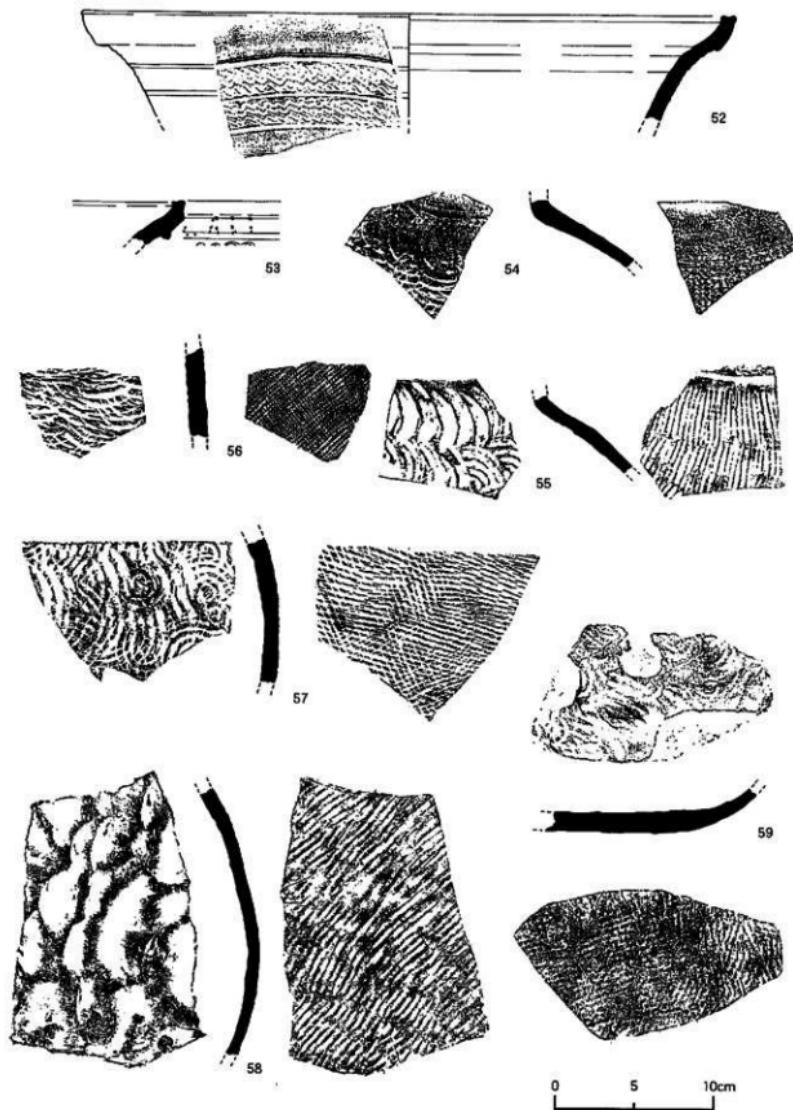
第1表 出土遺物観察表 (1)



第34図 SX-1出土遺物実測図(1) (1/3)



第35図 SX-1出土遺物実測図(2)(1/3)

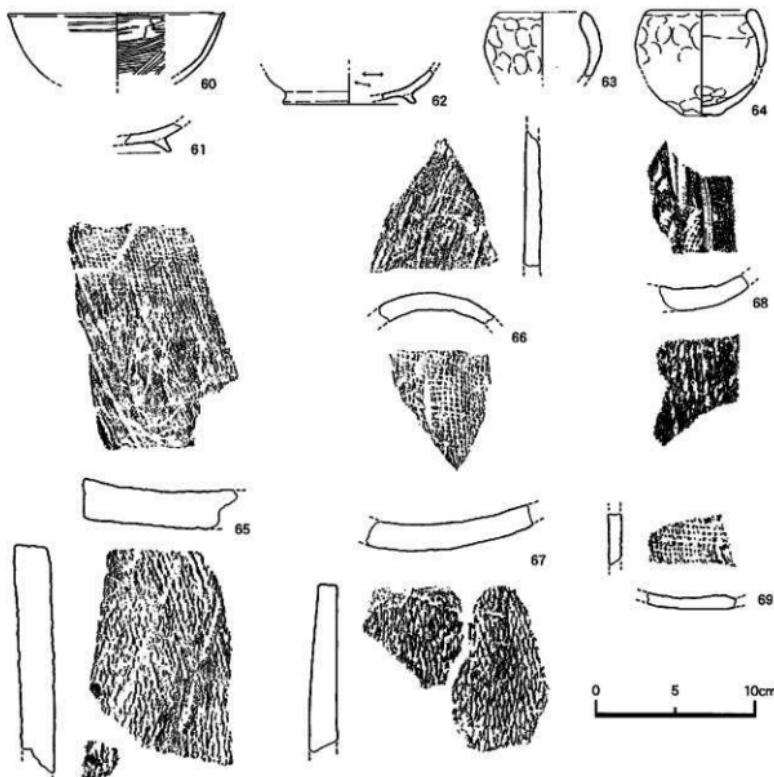


第36図 SX-1出土遺物実測図(3)(1/3)

SX-1 11～15は須恵器壺蓋である。12の内面には墨痕が認められる。13は天井部を扁平に削り、雜ななでを加える。口縁部で屈曲し垂下する。15の天井部は口縁部との境に段を持ち中心部は低く下がる。天井部外面はヘラ切り後、多方向に指なで。天井部内面はつるつるしており、転用硯として利用されたようである。いずれも8世紀後半におさまる。16、17は須恵器椀体部。16は器尚が4.3cm以上あり、深い椀型をなす。17の体部は真っ直ぐに外へ開く。9世紀前葉か。18～22は高台付き壺の底部である。18、19、20の高台は断面方形で、底部外縁よりやや内側につく。21の高台は底部外縁よりやや内側につき、高台の内面で接地する。体部と底部との境は丸みを持ち、体部は厚く、直立する。22の高台は方形で、底部外縁に付き斜め外へ張り出す。接地面は平ら。22は8世紀末、他は8世紀後半。23は須恵器皿。底部扁平、体部は外へ反りながら開く。底部は回転ヘラ切り後、雜ななでを加える。8世紀後半から9世紀前葉。24は須恵器長径壺の口縁部。器壁は薄く、外へ開いた口縁部は端部で屈曲し、下方へとがって肥厚する。外面自然釉。収入品と思われ、類例をさがしたところ、9世紀中～10世紀の京都の篠窯の壺Abが最も近似していた¹⁰⁾。篠窯製品は太宰府市太宰府跡や北九州市寺田遺跡で鉢が確認されている。また、大分県では国東半島の香々地町信重遺跡で9世紀の土器とともに壺Aが出土している¹¹⁾。26～28は須恵器円面硯の脚部である。25は円面硯脚部の一部と思われる。両端はへら状工具で成形されており、外面には×状にへら描きが施されている。26はへら状工具で四角い透かし孔を穿つ。脚は内傾し、脚状に屈曲して着地する。27は下位に一条の突帯がめぐり、脚は直立する。へら状工具で外から透かし孔を穿つ。孔は長方形と鍵穴状のものが確認できる。また、一条の斜めの線がへら描きされている。25と同一個体か。28は約7mm幅の長方形の透かし孔が開けられ、孔の下には一条の突帯がめぐる。孔は推定36個である。脚の傾きはなく、ほぼ直立する。このほかにも、円面硯の一部と思われる小片が数点出土している。

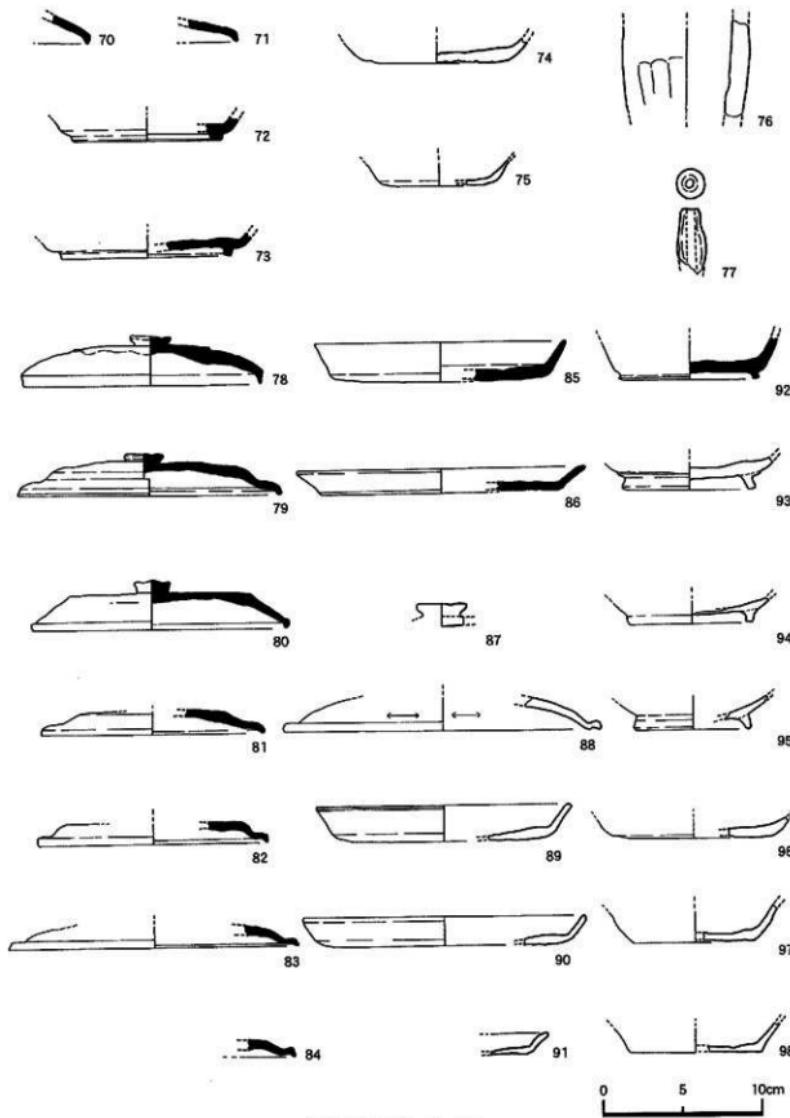
29は土師器壺蓋。天井部外面は回転へら削りの後、回転へら磨きを施す。8世紀後半。30の土師器壺蓋は器壁は薄く、口縁部はやや外へ屈曲する。9世紀初頭。31は土師器皿。体部は外方に開き、口縁部扁平。8世紀後半～末。32～39は土師器壺。32、33の胎土は橙褐色を呈し、体部下位から底部にかけて回転へら削りを施す。底部外面を除いて、内外面にやや粗雑な回転へら磨きを行う。8世紀後半～末。36は底部を含め内外面とも大変丁寧ななで仕上げで、9世紀前半におさまる。37は底部はへら切り後なで。体部は丸く膨らんでたちあがり、口縁部は丸く肥厚し外反する。9世紀後半。40～51は土師器碗である。40の高台は四角く、外へ開き、体部は高台の付け根から斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる。外面にまばらな回転へら磨きを施す。9世紀初。44の高台は長方形で、やや外へ反りながら開き高台内面で接地する。底部は丸く下がる。39～52も高台は斜めに開き、体部と底部内面の境はほとんどない。48は器壁が薄く、細い高台は底部外縁よりやや内側につき先端は丸い。9世紀後半。体部は開きながら立ち上がり、口縁部は外反する。49は先端のとがった細い高台がつく。体部は底部径に比して大きく開く。50、51とも高台は短く細い三角形で、外に開く。50は底部扁平で、体部との境明瞭。51は底部と体部の境は丸い。

52、53は須恵器壺の口縁部である。52の口縁部は肥厚し段をなす。端部はM字状に溝を有す。外面には二条の溝に区画され、横目波状文がめぐる。53の口縁部は52よりきつく段をもち肥厚する。肥厚面には刺突文が山形に連続し、その下には横目波状文が見える。54～59は須恵器壺。54、55は壺の肩部。59は底部である。外面の調整は56が格子目叩き、他は平行叩きである。内面は同心円文や青海波文が主体であるが、58のように無文の宛具痕がのこるものもある。

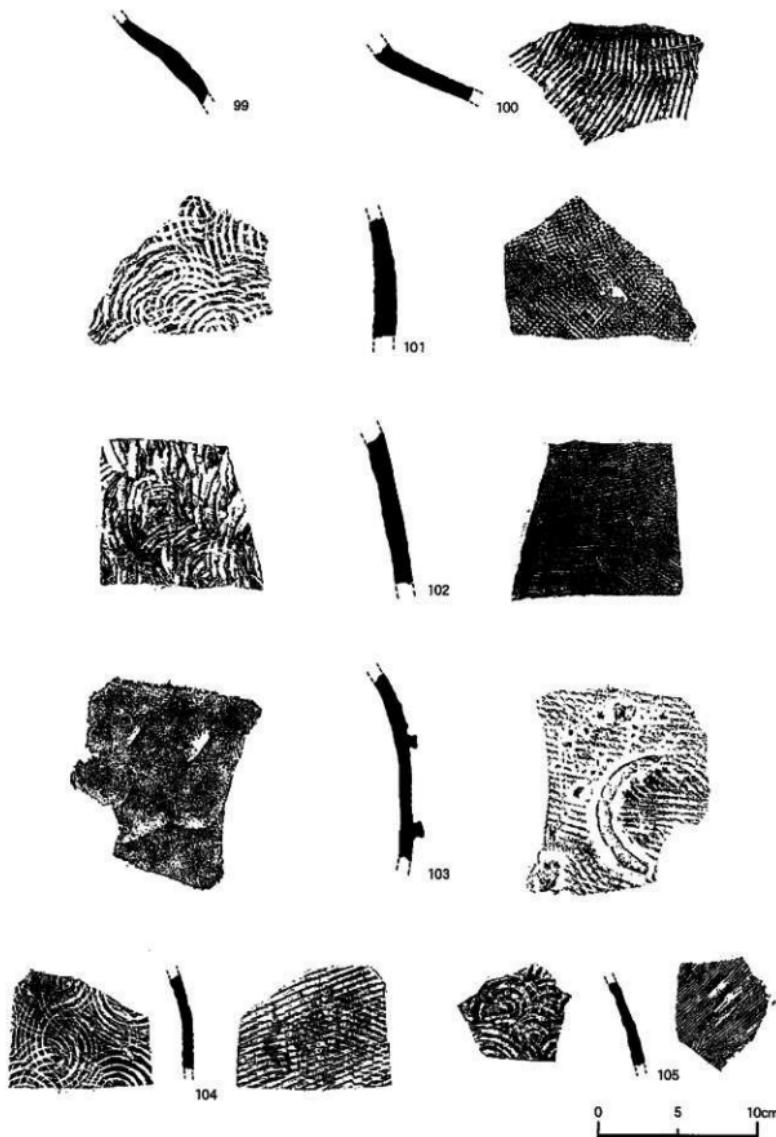


第37図 SX-1出土遺物実測図(4)(1/3)

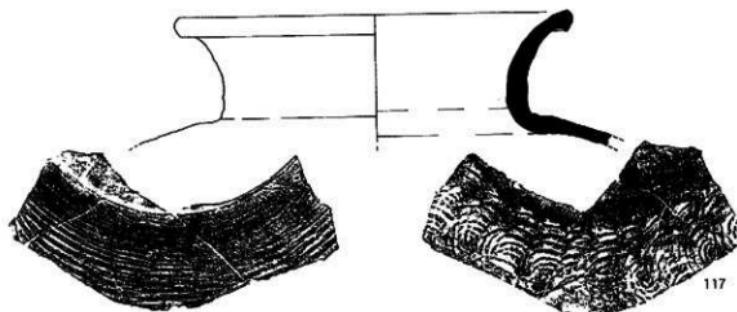
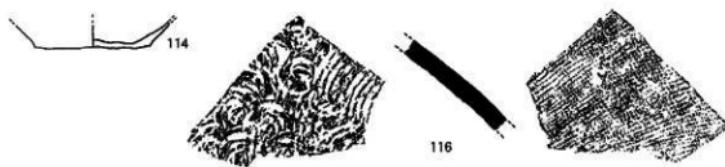
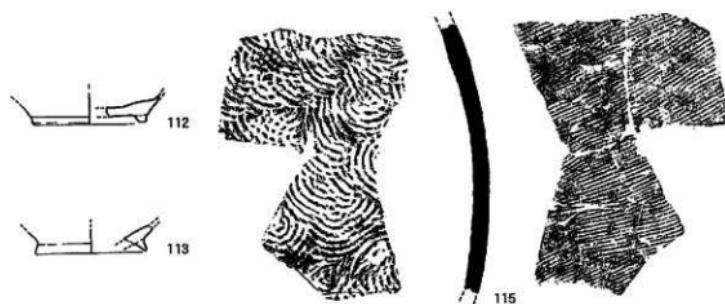
60、61、62は黒色土器A類椀。60は丸い体部をもち、口縁部はわずかに外に屈曲する。内面は密に細い磨きが施されるが、外面は口縁部近くにわずかに荒く磨かれるのみである。61は椀底部で、断面三角形の高台が、短く外にはりだす。内面は丁寧に磨かれている。60と同一個体の可能性あり。62は丸底で、内面は横方向に手持ちへら磨き。外面は磨滅し調整不明瞭であるが、削りの痕跡が認められる。これらは10世紀前葉。63、64は手尽くねの素焼きの小壺。64は口縁部は丸く肥厚し、内傾する。体部は丸く球状で、底部は小さく外へ突き出る。体部外面全体に指頭痕がある。内部は指で横なでをし、底部は指で押し出している。66は瓦豆、65、67～69は平瓦である。いずれも柔らかい土師質で、粗雑なつくり。凹面布目、凸面は繩目叩きである。69は最大厚約9mmと薄い。



第38図 SX-2, 3出土遺物実測図 (1/3)



第39図 SX-3出土遺物実測図 (1/3)



0 5 10cm

第40図 SX-6, 8, 9, 11出土遺物実測図 (1/3)

SX-2 70、71は須恵器坏蓋の口縁部である。どちらも口縁部は断面三角形。8世紀前～中葉。72、73は須恵器高台付き坏底部。72の高台は短く丸みをおび、まっすぐ着地する。73の高台は四角く、底部外縁よりやや内側につき、外側のみ接地する。いずれも8世紀中頃。74、75は土師器坏底部。74は器壁が薄く、体部は外反しながら開く。75は底部厚く、体部との境は丸みを帯びる。76は壺蓋。器壁は厚く、外面には縱方向に指撫での跡が残る。内面には布目があり、上方は指撫でされる。

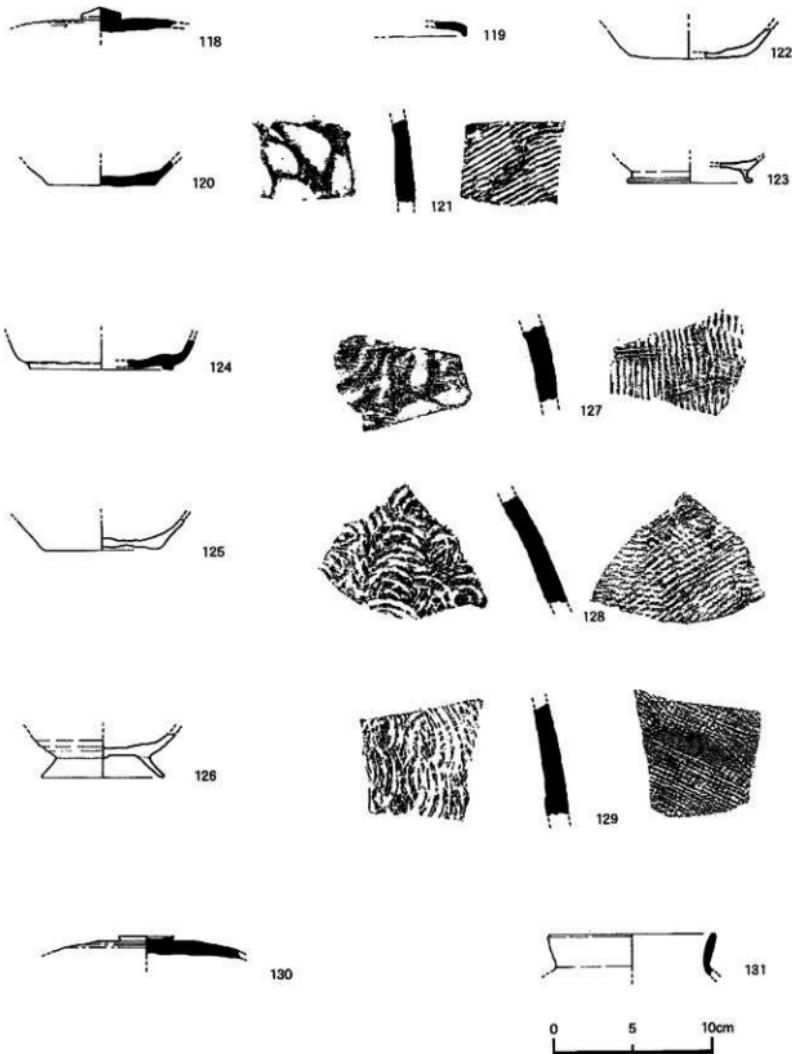
SX-3 遺物は土層第1、2層からまとまって出土した。77は十種。胴部最大径1.8cm。表面剥離著しい。78～81は須恵器坏蓋。78は天井部へら切り後、雑ななでを施したのみで、へら切り痕は明瞭。粘土がかたより段をなす。口縁部は三角形にとがり、垂下する。つまみ扁平。8世紀前半～中。79は天井部外面へら切り後未調整で、へら切り痕明瞭。80は天井部外面はへら切り後、削り、一方になでて平らに調整する。天井部から明瞭な境をつけて口縁部へ広がり、口縁端部は丸く肥厚する。8世紀後半。81は天井部へら切り後なる。口縁部は屈曲するが、端部は丸い。8世紀後半。82～84も8世紀後半。85、86は須恵器皿。85は底部厚く、へら切り後、雑ななでを加える。体部は直線的に開き、口縁部は細く伸びる。8世紀中～後半。86は底部へら切り後、雑な撫で。体部はやや外反する。8世紀末。87、88は土師器坏蓋。88の天井部は丸く膨らみを持ち、内外面ともへら焼きが施される。口縁部は嘴状に屈曲する。8世紀後半。89～91は土師器皿。いずれも体部と底部の境はやや丸みをおびる。89の口縁部は水平。89、91の体部はやや外反する。8世紀後半～末。92は須恵器高台付き坏の底部。方形の高台は底部外縁近くに付き、内面で接地する。8世紀後半。93～95は土師器坏、椀の底部。95は短く外に聞く高台を持つ。底部と体部の境は不明瞭で、底から上へ、丸く開きながら立ち上がる。96～98は土師器坏底部。96は厚く、回転へら切り後撫である。8世紀後半ごろか。97は体部は丸く膨らみをもち立ち上がり、外反する。98は体部と底部の境は明瞭で、体部は外反しながら立ち上がる。97、98は9世紀。99～105は須恵器甕。99は100は肩部である。101は格子目叩き、他は平行叩き。103には焼成時に8世紀代の断面方形の坏高台が、付着している。

SX-6 106は須恵器高台付き坏底部。高台は外底部よりやや内側につく。短く斜めに張り出し、内側のみ着地する。8世紀後半。

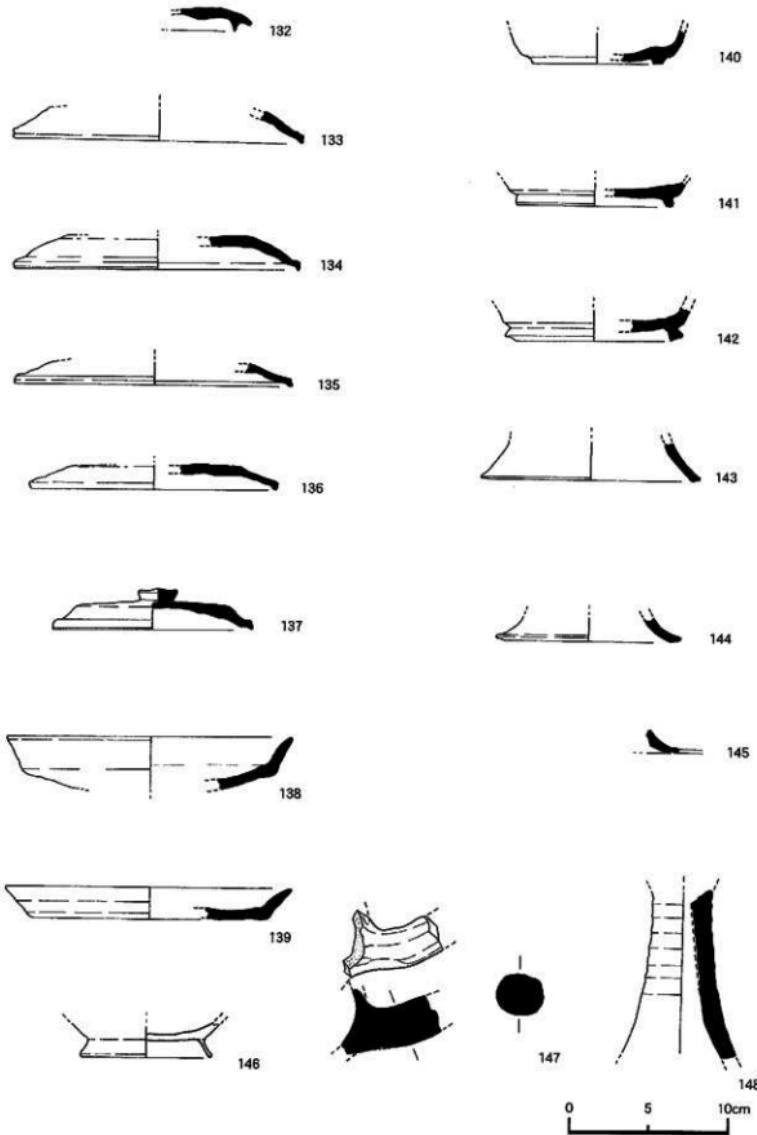
SX-8 107は須恵器坏蓋口縁部。器高が高くなりそうで、8世紀前半か。108は土師器椀底部。器壁厚く、高台は外に聞く。接地面は平たい。109は土師器鍋の脚。最大径2.2cm。外面縱方向に指なです。

SX-9 110は須恵器坏蓋。水平の天井部から斜めに聞く。口縁部は短く屈曲。8世紀後半。111は須恵器椀。体部は丸みをもち大きく聞く。口縁部は短く外反する。

SX-11 112、113は土師器椀底部。112の高台は底部外縁に付き、断面四角く、真っ直ぐ着地する。底部は厚い。113の高台は底部外縁に付き、断面三角形で外に聞く。114は土師器坏底部。体部と底部の境は明瞭で、体部は直線的に聞く。9世紀代。115～117は須恵器甕。117は甕の口縁部。頸部は短く直立し、口縁部へむけ外へ聞く。口縁端部は肥厚する。肩は頸部付けねから大きく膨らむ。外面には口縁部から肩部にかけて自然軸がかかる。



第41図 SX-11西、SD-1, 6, 9出土遺物実測図（1／3）



第42図 一括遺物実測図 (1/3)

SX - 11 西 SB - 1 及び SX - 11 の西側周辺には土器が散布していた。118、119は須恵器坏蓋。118は宝珠型つまみ。天井部は回転へら削りを施す。120は須恵器坏底部。底部は扁平、体部は底部と明瞭な境を持ち、外へ大きく開く。内底は多方向になどる。121は須恵器壺の小片。122は土師器坏底部。体部はやや膨らみを持ち立ち上がる。123は土師器碗底部。細い高台は先端が丸く、接地面で外へ屈曲する。

SD - 1 124は須恵器高台付き坏。高台は断面方形、底部外縁よりやや内側につく。8世紀中～後半。125は土師器坏底部。底部はやや上げ底で、体部との境は明瞭。体部はやや丸木を持ちながら外へ開く。9世紀。126は土師器碗底部。体部は丸く開き、高台は細くハ字状に開く。10世紀。127～129は須恵器壺。

SD - 6 130は須恵器坏蓋。扁平なつまみを持ち、天井部は回転へら削り後未調整。8世紀前半。

SD - 9 131は須恵器短頸壺。頸部はやや上へ開き、端部は丸い。

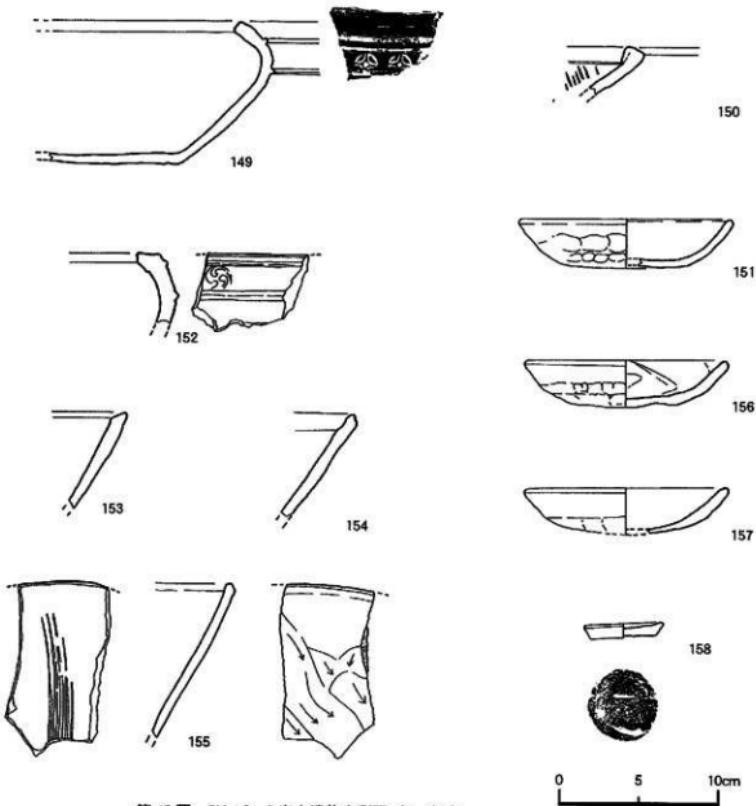
一括 132～137は須恵器坏蓋。132は返りのある蓋で、この種は一点のみである。7世紀後半。133は天井部が高く、8世紀前半。134は天井部は平らで、回転へら削りを施す。口縁部は軽く屈曲する。136は天井部平らで、回転へら削りをした後、雑ななでを加える。口縁部まではばまっすぐに開く。内面全面に多方向なので。137は天井部平らで、回転へら削り後、撫でを施す。内面は多方向になど。口縁部は嘴状に屈曲する。つまみは中心よりやや端による。134～137は8世紀後半。138、139は須恵器皿。138は口縁部外傾し、底部は膨らむ。内外面を多方向に撫でる。8世紀後半。140～142は須恵器高台付き坏底部。140の高台は底部外縁より内側に入る。8世紀前～中。141の高台は底部外縁より。8世紀後半。142はばち型の高台が底部外縁につき、高台内縁で接地する。外面には自然釉がかかる。143～145は高坏の脚部か。いずれも大きく外へ広がる。145は端部が屈曲する。146は土師器碗底部。細い高台が外へ開く。先端は丸い。底部はへら切り後、未調整。体部は直線的に開く。147は須恵器鍋取っ手。外面は削り後などで。内面は刷毛目状に横方向になど。148は須恵器高坏の脚。外面多数の水引痕あり。内面は横方向に削られている。

No.	出土遺物	種類	器種	寸法 径高 底面 旋渦 高さ	底面 形状	旋渦 形状	高さ	色 調	四 並	備 考		
11	SX - 1	土師器	环甌					淡灰褐色	輪形コロナ			
12	*	*	*					淡青灰褐色	輪形コロナ	内面淡灰褐色		
13	*	*	*	16.2				青灰褐色	天井部外側ケズリ浅盤なナ、内面コロナ後平行・斜ナメ			
14	*	*	*	17.3				暗灰褐色	輪形コロナ			
15	*	*	*	17.8				青灰褐色	輪形コロナ、天井部外側ハラ切很多方向ナメ	輪形繊か		
16	*	*	环身	11.5				内:淡青褐色 外:淡灰褐色	輪形コロナ	外面自然陶		
17	*	*	*	16.4				灰色	輪形コロナ			
18	*	*	*				9.5	黄色	輪形コロナ			
19	*	*	*				8.0	暗青灰色	輪形コロナ、内側一向方向ナメ			
20	*	*	*				13.6	淡青褐色	輪形コロナ			
21	*	*	*				12.0	暗灰褐色	輪形コロナ			
22	*	*	*					灰白色	輪形コロナ			
23	*	*	目	13.0	1.4	11.0		灰色	輪形コロナ、外側底面物ハラ切深盤なナメ			
24	*	*	長縫甌	14.4				淡灰褐色	輪形コロナ	外面自然釉、深窓か		
25	*	*	内面鏡					暗灰褐色	輪形コロナ、外曲下斜面ハラカミ、周面ハラ切	内面窓の跡基、No.27と同じ側面か		
26	*	*	*				18.0	淡灰褐色	輪形コロナ、ヘドロ孔ある	四角の孔4つ		
27	*	*	*				19.6	淡青褐色	輪形コロナ、ヘラ盛、ヘラで孔をぬる	かび穴状の孔		
28	*	*	頭部器				21.0	青灰褐色	輪形コロナ、ヘドロ穴ある	孔は35.0か		
29	*	*	土師器	环甌				赤褐色	輪形コロナ、外面底面ハラカミ底面ヘラカミ			
30	*	*	*				14.5	深褐色	輪形コロナ	門形窓部外にやや櫛目		
31	*	*	黑				15.6	1.53	12.4	淡褐色	輪形コロナ、底面ハラカミ深ナメ	
32	*	*	环身				12.6	3.6	6.5	褐色	輪形コロナ、外曲下斜面ハラカミ、内外面同物ハラカミ	
33	*	*	*				13.0	3.8	6.6	橙褐色	輪形コロナ、底部下斜面ハラカミ、内外面同物ハラカミ	
34	*	*	*				6.6	淡灰褐色	輪形コロナ			
35	*	*	*				5.2	黄褐色	輪形コロナ	板口あり		
36	*	*	*				12.9	4.1	7.0	褐色	輪形コロナ、外側多方向ナメ、内底面内側の筋ナメ	
37	*	*	*				13.3	3.5	6.8	淡灰褐色	輪形コロナ、底面ハラカミ深ナメ	内外面摩滅
38	*	*	*					7.6	淡灰褐色	輪形コロナ、底面ハラカミ深ナメ		
39	*	*	*				6.4	黄褐色	輪形コロナ、底面ハラカミ深ナメ			
40	*	*	瘤				5.8	棕褐色	輪形コロナ、作成外表面凹凸ハラカミ、内底面ナメ、外底面内側ハラカミナメ			
41	*	*	*					赤褐色	輪形コロナ			
42	*	*	*				6.6	淡赤褐色	輪形コロナ			
43	*	*	*				8.3	淡褐色	輪形コロナ			
44	*	*	*				11.8	褐色	輪形コロナ、不明			
45	*	*	*				9.0	深褐色	輪形コロナ			
46	*	*	*				7.4	褐色	輪形コロナ、外表面ハラ切内底ナメ			
47	*	*	*				9.0	褐色	輪形コロナ			
48	*	*	*				13.2	5.1	7.1	淡青褐色	輪形コロナ、体部下斜面ハラカミ、外表面ハラ切ナメ	
49	*	*	*					6.2	淡褐色	輪形コロナ		
50	*	*	*				8.2	淡褐色	輪形コロナ、外底面ハラ切内底ナメ			
51	*	*	*				7.4	淡褐色	輪形コロナ、内底面ナメ			
52	*	*	頭部器	瘤	41.2			暗褐色	輪形コロナ、内底面底面深窓	内外面自然釉		
53	*	*	*					灰色	輪形コロナ、外側底面突起状			
54	*	*	*					深褐色	輪形コロナ、外表面平行ナメ			
55	*	*	*					*	外底面平行ナメ、内面同心円溝			
56	*	*	*					*	外底面かき痕ナメ、内面同心円溝			
57	*	*	*					淡青褐色	外表面平行ナメ、内面同心円溝			
58	*	*	*					淡灰褐色	外表面平行ナメ、内面同心円溝			
59	*	*	*					*	外表面平行ナメ、内面同心円溝	底の底部		
60	*	*	黒土器	瘤	13.6			淡黄褐色	輪形コロナ、内底面金型ナメ、外面上唇ハラカミ	内底		
61	*	*	*					*	輪形コロナ、内底面ナメ	内底		
62	*	*	*				8.3	淡青白色	輪形コロナ、内底面ナメ	内底		
63	*	*	土師器	小瘤	6.2			淡青褐色	外底面お皿、内底面ナメ	手づけね		
64	*	*	*				6.9	6.6	2.8	棕褐色	外底面お皿、底部外側折れ込み、上縁側内底コロナ	手づけね
65	*	*	瓦	平瓦				褐色	内面横裂、外面縫合ナメ			
66	*	*	瓦	丸瓦				淡灰褐色	内面横裂、外面縫合ナメ			
67	*	*	瓦	平瓦				赤褐色	内面横裂、外面縫合ナメ			
68	*	*	*					棕褐色	内面横裂、外面縫合ナメ			
69	*	*	*					淡赤褐色	内面横裂、外面縫合ナメ			
70	SX - 2	頭部器	环甌					暗灰褐色	輪形コロナ			
71	*	*	*					*	輪形コロナ			
72	*	*	环身				9.4	暗青灰色	輪形コロナ			
73	*	*	*				10.6	*	輪形コロナ			
74	*	*	土師器	*			7.4	内: 暗褐色 外: 淡青褐色	輪形コロナ、底部ハラ切内底ナメ			
75	*	*	*				9.0	淡青褐色	輪形コロナ、底部ハラ切内底ナメ、底部小切縫			
76	*	*	椎					内: 暗褐色 外: 淡青褐色	内面柱、外側タマ方向指ナメ	長脚		
77	SX - 3	土師器	土壺	側部幅大径 1.8cm				暗褐色	輪形コロナ	側面直い		
78	*	頭部器	环身	15.0	3.0			岩灰褐色	輪形コロナ、内底面金型ナメ、外底ハラ切底膨脹、壁ナメ	天井部膨脹の段ができる		
79	*	*	*				16.6	2.55	淡青灰色	輪形コロナ、内底面金型ナメ、外底ハラ切底膨脹		

第2表 出上遺物観察表（2）

No.	出土遺物	種類	器種	法算(cm)	色調	調査	備考	
80	SX-3	須恵器	环	16.2 3.1	青灰色	青灰色コナメ、内面沿円方向ナメ、外縁部外側へ少切削 一部均等なく、直線にて成形	天井部半埋	
81	*	*	*	14.0	灰白色	無鉛コナメ、直線ヘ少切削ナメ		
82	*	*	*	14.5	青灰色	同上コナメ、外縁ヘ少切削ナメ		
83	*	*	*	18.2	黒灰色	同上コナメ	内面全部灰かぬ	
84	*	*	*		青灰色	同上コナメ		
85	*	*	皿	15.8 2.4 14.0	青灰色	同上コナメ、内面沿多方向ナメ、外縁部へ少切削無ナメ		
86	*	*	皿	18.2 1.45 15.4	青灰色	同上コナメ、内面沿多方向ナメ、外縁部へ少切削無ナメ		
87	*	土器器	环	20.0	青灰色	内外面で「字」字ナメ		
88	*	*	*	20.0	*	同上コナメ、内面外側ヘ少切削ナメ		
89	*	*	皿	16.0 2.2 14.0	*	同上コナメ、直線ヘ少切削ナメ		
90	*	*	*	17.7 1.8 16.2	*	同上コナメ		
91	*	*	*		内: 深褐色 外: 黄白色	青褐色コナメ		
92	*	須恵器	环		8.8	淡灰色	無鉛コナメ、直線ヘ少切削ナメ	
93	*	土器器	碗		8.4	淡灰褐色	無鉛コナメ、直線ヘ少切削ナメ	
94	*	*	*		7.8	淡褐色	同上コナメ、内面沿円方向ナメ、外縁部へ少切削無ナメ	
95	*	*	*		7.4	*	同上コナメ	外側灰かぬ
96	*	*	环	10.2	内: 安藤色 外: 棕色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ		
97	*	*	*		7.6	淡灰色	同上コナメ、内面沿多方向ナメ、外縁部へ少切削ナメ	
98	*	*	*		8.2	淡褐褐色	同上コナメ、直線ヘ少切削ナメ	
99	*	須恵器	束		淡灰色	同上コナメ	外側灰かぬ	
100	*	*	*		*	内: 安藤色 外: 棕色	内面平行タキ	
101	*	*	*		*	内面沿心円外: 外縁斜子目タキ		
102	*	*	*		*	内面沿心円外: 外縁平行タキ		
103	*	*	*		*	内面沿心円外: 外縁平行タキ	外周の高台有り、無跡付有	
104	*	*	*		*	内面沿心円外: 外縁平行タキ		
105	*	*	*		*	内面沿心円外: 外縁平行タキ		
106	SX-6	*	环		9.4	暗青灰色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ	
107	SX-8	*	环		6.8	淡灰黑色	同上コナメ	外側自然軸
108	*	土器器	碗		6.8	淡灰褐色	同上コナメ	
109	*	*	なべの脚		*	淡褐色	クサガラ模様とし、數ナメ	
110	SX-9	須恵器	环		*	淡灰黑色	同上コナメ	
111	*	*	角	15.0	*	淡灰黑色	同上コナメ	
112	SX-11	土器器	角		7.0	淡役白色	同上コナメ	
113	*	*	*		7.0	*	同上コナメ	
114	*	*	环		7.2	淡黄褐色	同上コナメ、直線斜面へ少切削ナメ	
115	*	病定器	束		6.6	淡茶褐色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ	
116	*	*	*		6.6	淡灰黑色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ	
117	*	*	*	25.0	内: 淡灰褐色 外: 淡灰黑色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ		
118	SX-114	*	环		5.8	暗灰褐色	外周斜面へ少切削、底面斜子目ナメ	
119	*	*	*		*	灰色	同上コナメ	
120	*	*	环		6.6	淡灰褐色	同上コナメ、外周斜子目タキ、外底斜面へ少切削無ナメ	
121	*	*	束		*	*	内面外周平行タキ	
122	*	土器器	环		7.2	淡灰褐色	同上コナメ、調整不明確	
123	*	*	角		7.8	淡灰褐色	同上コナメ	
124	SD-1	須恵器	环		9.0	淡灰褐色	同上コナメ、内面沿多方向ナメ、外縁部へ少切削ナメ	
125	*	土器器	角		7.0	淡黄褐色	同上コナメ、调整不明確	
126	*	*	角		7.7	淡褐色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ	
127	*	須恵器	束		6.6	淡茶褐色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ	
128	*	*	*		6.6	淡灰黑色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ	
129	*	*	*		6.6	淡茶褐色	内面斜心円外: 外縁斜子目タキ	
130	SD-6	*	环		内: 深褐色 外: 淡灰黑色	内面多方向ナメ、外縁斜子目タキ		
131	SD-9	*	短筒瓶	10.6	暗灰褐色	同上コナメ		
132	--	活	环		*	暗灰褐色	同上コナメ、调整不明確	
133	*	*	*	18.2	淡灰褐色	同上コナメ、外周斜子目タキ		
134	*	*	*	18.0	淡灰褐色	同上コナメ		
135	*	*	*	17.4	淡灰褐色	内面斜心円ナメ、外周斜子目タキ		
136	*	*	*	15.7	灰色	大井郡例転へナメタリ強被無ナメ、内面多方向ナメ		
137	*	*	*	12.6 2.6	暗灰褐色	同上コナメ、内面多方向ナメ、外縁部へ少切削ナメ		
138	*	*	皿	18.0 2.0 14.7	灰色	同上コナメ、底面外周多方向ナメ		
139	*	*	*		8.2	淡灰褐色	同上コナメ、底面内斜面ナメ	
140	*	*	环		9.8	淡灰褐色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ	
141	*	*	*		11.2	灰黑色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ	
142	*	*	*		13.8	暗灰褐色	同上コナメ、底面へ少切削ナメ	
143	*	*	野		11.6	暗灰褐色	同上コナメ	内面自然軸
144	*	*	*		4	同上コナメ		
145	*	*	*		灰黑色	同上コナメ		
146	*	土器器	堆		8.4	淡黄褐色	同上コナメ、底面へ少切削調査	
147	*	須恵器	取っ手		灰黑色	同上ナメナメ		
148	*	*	高环形		暗灰褐色	同上コナメ、内面多方向タキ	外側自然軸、水力か底明瞭	

第3表 出土遺物観察表(3)

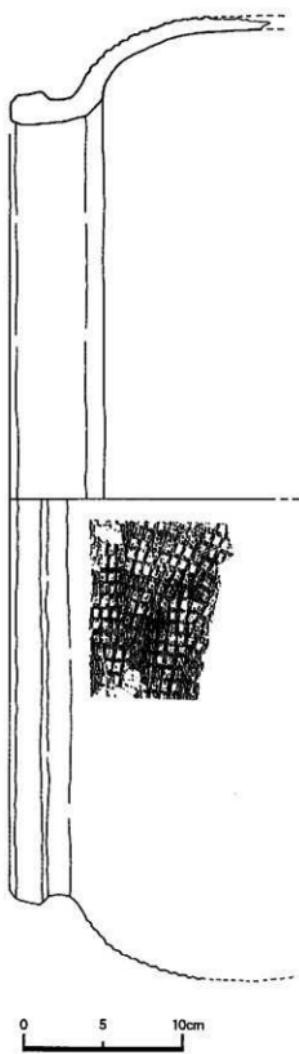


第43図 SK-2, 3出土遺物実測図 (1/3)

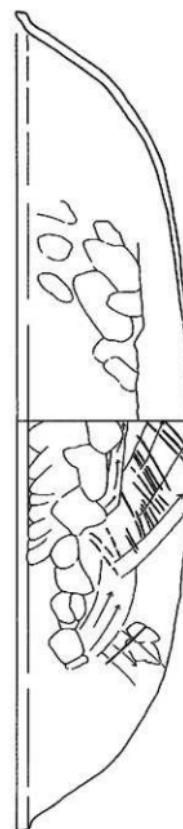
No.	出土遺物	種類	形様	寸法 口径 器高 底径 基台径	材質	色調	特徴	備考
149	SK-2 瓦質土器	鉢		9.0		暗灰褐色	コロナデ、底部外側ケズリ	外曲丸い花のスタンプ
150	+	すり鉢				灰褐色	開口不明瞭	すり目 6本、灰化物付着
151	+	瓦 器	壺	13.2 2.9 6.8		黄白色～ 黒灰色	直板ヨコナデ、内面丁寧なナデ、外側下方 指おさえ	
152	SK-3 瓦質土器	鉢				黒褐色	直板ヨコナデ	外面に右三つ巴のスタンプ
153	+	+						
154	+	+						
155	+	すり鉢			内:灰白色 外:黒褐色	内面横ナデ、外側ケズリ	5本のすり目	
156	+	瓦 器	壺	12.4 3.0 6.45	灰色	直板ヨコナデ、内面ヘラの横ナデ、外側ド 半指おさえ		
157	+	+	+	12.6 3.0		灰褐色	同板ヨコナデ、外側ド半指おさえ	
158	+	土器器	小 壺	5.0 0.6 4.4		黄褐色	直板ヨコナデ、底部粗粒、糸切り	板目あり
159	+	瓦質土器	壺	32.2		灰色	内面丁寧な横ナデ、外側格子目タキ	器面剥離著しい
160	+	土器質	なべ	50.8 (11.0)		暗褐色～ 黒褐色	外側下平行タキ後ケズリ、上部内外面 指おさえ	外面炭化物付着

第4表 出土遺物観察表 (4)

159



160



第44図 SK-3出土遺物実測図（1／3）

SK-2 149は浅鉢。口縁部は内湾し、底部平坦。外面に二条の突帯を巡らし、突帯間に花文のスタンプを配す。底部外面は削り。150は彫り鉢。口縁部は内側に肥厚する。粗いすり目を刻む。151は無高台の瓦器椀。口径 13.2cm、器高 2.9cm、体部外面下半に指頭痕がめぐる。

SK-3 152は浅鉢。口縁部は内挽し、端部は肥厚し水平面を持つ。外面に二条の突帯をめぐらせ、突帯の間には右三つ巴のスタンプを配す。155は彫り鉢。外面へら削り。内面には5本のすり目を刻む。

156、157は無高台の瓦器椀。156は外面向下半指押さえ、内面はへら状工具でなでる。157は体部下半指押さえ。内面は丁寧なで。158は土師器小皿。底部糸切り、板目あり。159は瓦質土器窯である。口縁部は外に肥厚する。胴部外面には前面に格子目の叩きを施す。器面荒れており、点々と剥離する。160は土師質の鍋である。内外面とも指頭痕が多く、外面向下半は平行叩きを施しへら削りしている。口縁部は軽く屈曲する。外面は黒色で、炭化物が付着する。

151、156、157は底部を糸切り後、押し出し技法で丸く成形したものである。同様の無高台瓦器椀は宇佐市大楽寺遺跡³⁰や宇佐宮弥勒寺跡³¹から出土している。大楽寺出土のものは口径 14.6cm、器高 3.6cm で、15世紀前葉。弥勒寺 SE-3 出土のものは口径 12.3cm、器高 2.4 ~ 3.1cm、SD-9 出土のものは口径 13.5cm、器高 2.8cm で、これらは 16世紀に比定される。瓦器椀は時代が下がるにつれ小型化の傾向にあり、151、156、157 の法量は弥勒寺跡のものに近似する。ゆえに SK-2、3 出土遺物の年代は 16世紀と判断した。この時代の資料は手薄の感があり、瓦器椀、鉢、碗、鍋とセット関係が把握できる良好な一括資料を得ることができた。

(1)石井清司『蘇我須恵器』「概説中世の上器・陶磁器」真陽社 1995

(2)後藤一重『信濃遺跡』「吾々地の遺跡」香々地町教育委員会 1994

(3)小倉正五『宇佐地方の瓦器椀について』「古文化談叢」第 14 集 1984

(4)宮内克己『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1989

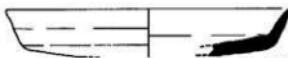
2. 平成 8 年度調査区出土遺物

SD-12 161は須恵器皿。体部は底部と明瞭な境をもち直線的にやや外方に開く。内底部は多方向になで。底部外面には墨書きがある。「野大」と読める。「野」は「野仲郷」を意味するのであろうか。8世紀中頃か。

SD-13 162は須恵器皿。B 地点出土。厚めの底部はやや膨らむ。体部は斜め上に開き、端部は細まる。8世紀中~後半。163 ~ 165はD 地点の床面から出土した。163は須恵器蓋。口径 37.4cm 以上と大型。天井部は扁平である。164の坏蓋は天井部は平坦で、口縁部は軽く屈曲する。8世紀後半。165は土師器高台付き壺。方形の高台は底部外縁につく。体部は直線的に開き、口縁部は細くのびる。内外面とも荒れていて調整不明瞭。8世紀後半。166 ~ 172は SD-13 を掘り広げた D 地点の最上層に集中して出土した資料で、本遺跡の古代遺構出土遺物中、最も新しい様相を呈す。いずれも小片に破損しているが、接合すれば残存率は高く、一括廃棄の資料と判断した。166の高台は細く、まっすぐ開き、先端は丸い。167は土師器椀。丸みを帯びた体部に軽く開く高台がつく。大分市下郡遺跡 47 次 SE-1³²から類似のものが出土している。168は黒色上器 A 類椀。体部は半球状に丸く、外面へら削りの後、内外面にへら磨きを施す。底部にはへら切り後未調整。口径のわりに高台径が小さい。端部が丸く、接合部から外反す



161



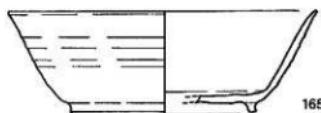
162



163



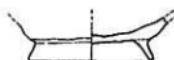
164



165



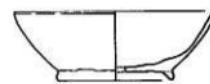
166



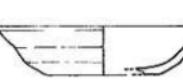
167



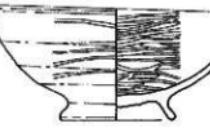
168



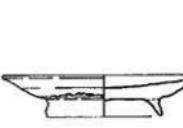
169



170



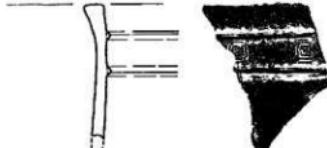
171



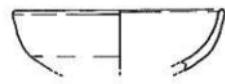
172



173



174



第45図 SD-12, 13出土遺物実測図 (1/3)

No.	出土遺物	種類	器種	寸法(cm)			色調	調査	備考
				口径	器高	底径			
161	S D - 12	A	須恵器	直	12.8	2.1	11.0	青灰色	圓筒コナデ、内部多方向ナメ、外底部繊維ナメ
162	S D - 13	B上層	・	・	17.8	-	16.0	淡灰褐色	圓筒コナデ、内底部一方向ナメ、外底部繊維ナメ
163	*	D下層	・	环蓋	-	-	-	灰色	圓筒コナデ、内底部多方向ナメ
164	*	D下層	・	环	14.2	-	-	・	圓筒コナデ
165	*	D下層	上部器	环身	19.5	6.4	12.7	淡褐色	淡黄不明瞭
166	*	D上層	・	塊	-	-	7.8	淡黄白色	圓筒コナデ、底部へラ刃切と調整
167	*	D上層	・	・	12.7	4.2	6.6	淡褐色	圓筒コナデ、底部へラ刃切と調整
168	*	D上層	黒色土器	・	16.2	6.5	5.2	内: 黑色 外: 黄褐色	圓筒コナデ、内底部丁寧へラ刃切、外底部回転ヘラ刃切後未調整
169	*	D上層	土師器	环身	11.3	2.7	8.1	淡黄白色	圓筒コナデ、底部内外回転なナメ
170	*	D上層	・	・	12.0	2.2	8.6	淡褐色	圓筒コナデ、内底部丁寧へラ刃切と調整
171	*	D上層	・	・	13.3	3.0	7.0	淡褐色	圓筒コナデ
172	*	D下層	・	托	13.0	2.6	7.2	淡黄白色	圓筒コナデ、底部内外回転ナメ
173	2次一括	瓦質土器	すり鉢	-	-	-	-	灰褐色	淡黄不明瞭
174	*	天井器	塊	13.3	-	-	-	淡黄褐色	淡黄不明瞭
175	2次 SK 4	瓦質土器	鉢	-	-	-	-	灰褐色	内: 外: 圆筒コナデ
									外面に西角いスタンプ

第5表 出土遺物観察表(5)

る。このタイプは県内でも類例を知らない。169～171は土師器坏。底部は厚い。体部は底部から膨らみを持ち立ち上がり、やや外反して先端の丸い口縁部へと続く。170の体部は外に開き、口縁部はわずかに外反する。体部下半には水引痕が明瞭に残る。底部外面に板目がある。171は口径に比して底径が小さい。体部は下半から膨らみを持ち、大きめ開きや外反する。これらは9世紀後半の弥勒寺SK-2^①より低平で、10世紀中頃の中津市三口遺跡SK-3^②の坏より一回り大きいことから、10世紀前半代に比定できよう。172は土師器托。9世紀後半の弥勒寺SK-2出土のものより低平で、時代が下がるにつれ、坏部が低平なものへと変化する傾向があり、当資料は10世紀前半において差し支えない。中津地方ではこれまで10世紀前葉の遺物が欠如しており、貴重な一括資料となった。

一括 173、175は一括資料。173は瓦質土器擂り鉢。6本のすり日をもつが、器面荒れており、調整は不明瞭である。175は土師器の碗である。内外面調整不明瞭。174はSK-4出土の瓦質土器深鉢。口縁部は水平で、体部直立する。外面に二条の突帯をめぐらし、突帯の間に雷文のスタンプを配す。16世紀。

(1)坪根伸也「下都遺跡群」「大分市埋蔵文化財調査年報5」大分市教育委員会 1994

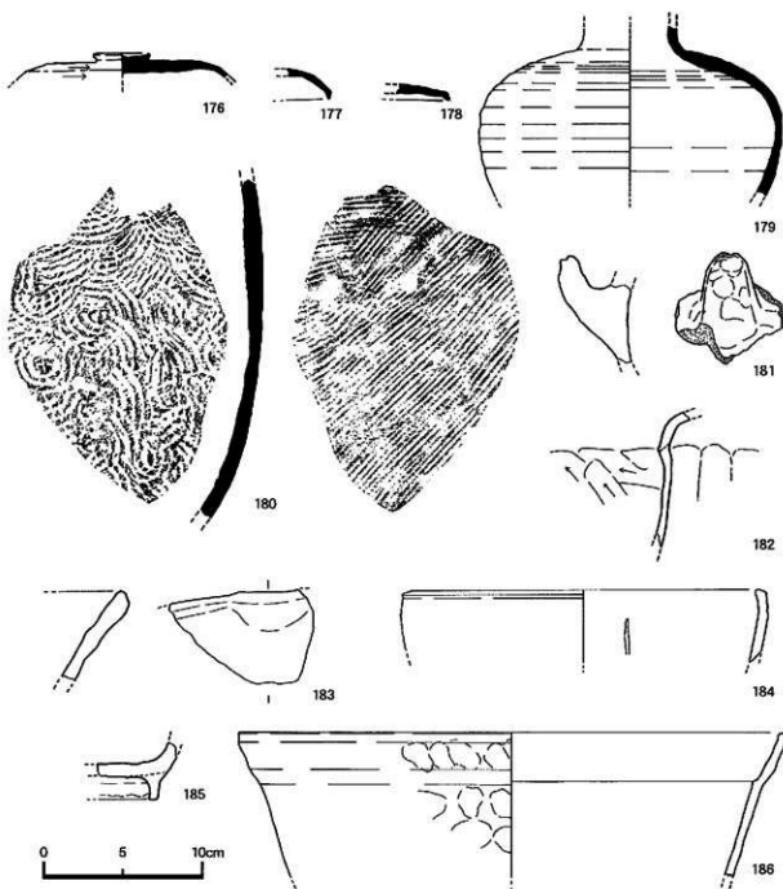
(2)齊内克巳「出土土器の概観」「弥勒寺」大分縣立宇佐風上記の丘歴史民俗資料館 1989

(3)高峰章子「九州土器研究会発表資料」1998

3. 平成12年度調査区出土遺物

SX-21 176～182はSX-21のトレチニ出土遺物である。176～178は須恵器坏蓋。176は凹型にへこむ扁平なつまみを持ち、天井部は回転へら削り後未調整。内面は丁寧になでられている。8世紀前半か。177は天井部が高く口縁部は三角にとがる。8世紀でも前半におさまるのではないか。178は扁平であることから8世紀後半～9世紀初頭とした。179の須恵器蓋は最大径が上部にくる。181は土師器取っ手。182は土師器蓋で、外面は縦方向、内面は横方向に撫である。遺物より、SX-21を8世紀後半～9世紀初頭の遺構と判断した。

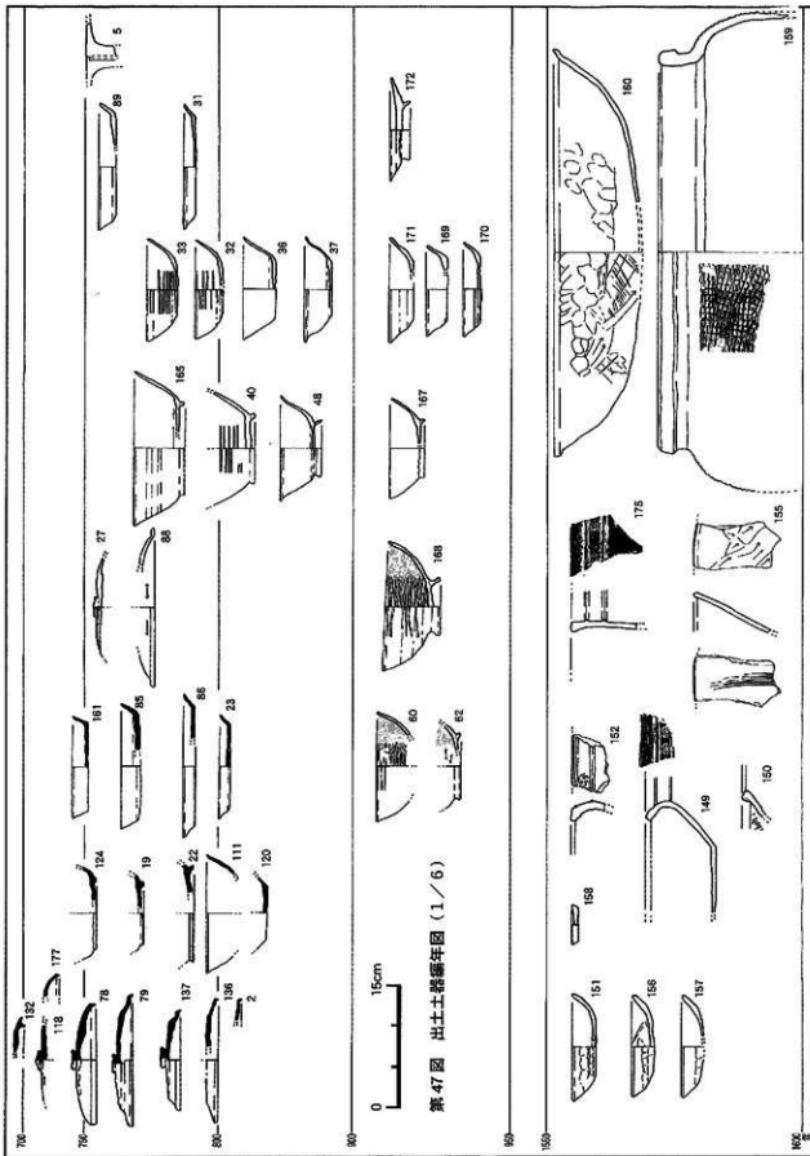
SD-15 いずれも瓦質土器。183は片口の鉢、184は体部が丸く内挽する鉢である。内面に縦に一条の条痕がある。185は鉢の底部。186はなべで、口縁部外面に炭化物が付着する。外面には指痕痕がめぐる。いずれも小片で時期判断はむずかしいが、16世紀以降のものと思われる。



第46図 SX-21, SD-15出土遺物実測図 (1/3)

No.	出土遺物	種類	器種	法 番 (cm)				色 調	測 定	備 考
				口径	器高	底径	高台径			
176	SX-21	鉢形器	坪蓋					淡褐色	天井部斜板ハラカズリ後半剥落、内面凹凸有ナメ	
177	*	*	*					灰色	同上コロナデ	
178	*	*	*					淡灰色	同上コロナデ	
179	*	*	盞					淡青褐色	青味不明顯	
180	*	*	甌					淡灰色	内面同心円、外縁平行タキシ	燒成不良
181	*	土陶器	取手					橙褐色	外縁粗粒質多段	
182	*	*	甌					淡褐色	内面コロナデ、外縁タナナデ	周辺はんあり
183	SD-15	瓦質土器	鉢					褐褐色	内面粗粒質ハケ目	器底あれている
184	*	*	*	22.8				黒灰色	内面コロナデ、内面ニホの化粧	外縁はざに削離
185	*	*						内:淡褐色 外:淡灰色	コロナデ、高台約4.2cmに指おき	
186	*	*	甌	34.3				暗青褐色	外縁粗粒質	外縁炭化物付着

第6表 出土遺物観察表 (6)



第47図 出土器類年図(1/6)

第七章　まとめ

1. 古代遺構について

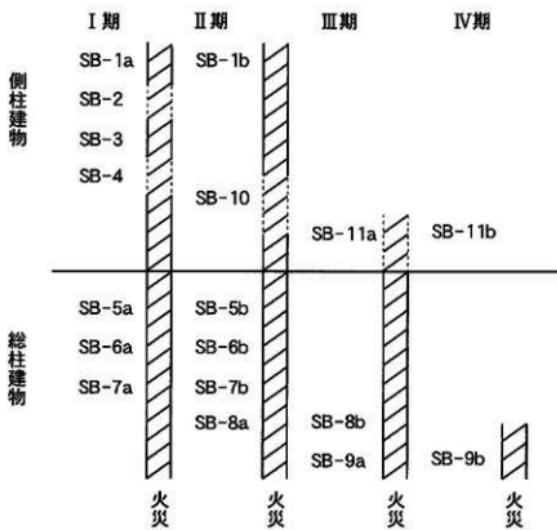
長者屋敷遺跡は平成7年に掘立柱建物群を発見、その後8年、12年に周辺の確認調査を行った。当初より保存を念頭においていたため、全掘することはせず、十分なデータを得ることはできなかった。以下これまでの調査でわかった点、不明な点を記すことで、現段階までのまとめとしたい。

(1)建物の変遷

7年度調査区内で検出した掘立柱建物群について、主軸方位、火災の状況をもとに検討を加えた。第7表「掘立柱建物計測表」で、建て替えを確認したものは、最初の建物をa、後出の建物をbとして表記した。また表中「焼失」の項目では建物が火災にあったと認められるものに○を、煙土・炭・炭化米を含むものの火災にあったと断言出来ないものに△をつけた。個別の建物の消長と火災の関係を表してみたのが、第48図「掘立柱建物変遷表」である。存続の時間幅には不明な点も多いが、建物群は大きく四時期にわけることができた。「火災」の欄では、焼失が確実なものは実線、不明なものは波線で表した。

I期 建物の主軸方位が2度西にふれるグループ、SB-1a、SB-2、SB-3、SB-4、SB-5a、SB-6a、SB-7a。SB-5、6、7は一度建て替えられており、現在確認できるのは建て替え後のbである。bはaとほぼ同一場所で建て替えられており、ここではaとbはほぼ同規模の建物として扱った。南北棟のSB-1a、SB-2、SB-3は建物の東棟の柱筋が通り、東西棟のSB-4はこれら三棟に直行する。また総柱建物SB-5a、6a、7aも先の三棟と方位を同じくする。ゆえにまずSB-1～7の計7棟が計画的に建設されたものと判断した。SX-1に切られ判別できないが、SB-1aと2はほぼ同一線上に並ぶため、一つの建物とも考えられる。その場合、3間×15間、面積約156m²の長大なものになる。SB-1aの建て直しのSB-1bはSB-2までのびていず、aもbと同一規模の可能性もあるため、ここではあってSB-1aと2を別に表記した。SB-3の柱穴には炭化米が認められなかったため、第7表中では×印を記しているが、西北隅の柱穴は上面が全て炭化物でおおわれており、火災による被害をうけている。SB-5a、6a、7aはそれぞれ同一場所で建て替えられる。いずれも建て替え後の柱振り方、柱痕とも炭化米が含まれ、最初の建物は火事の被害をうけている。I期の建物群はその全てが火災によって焼失したと考えられる。

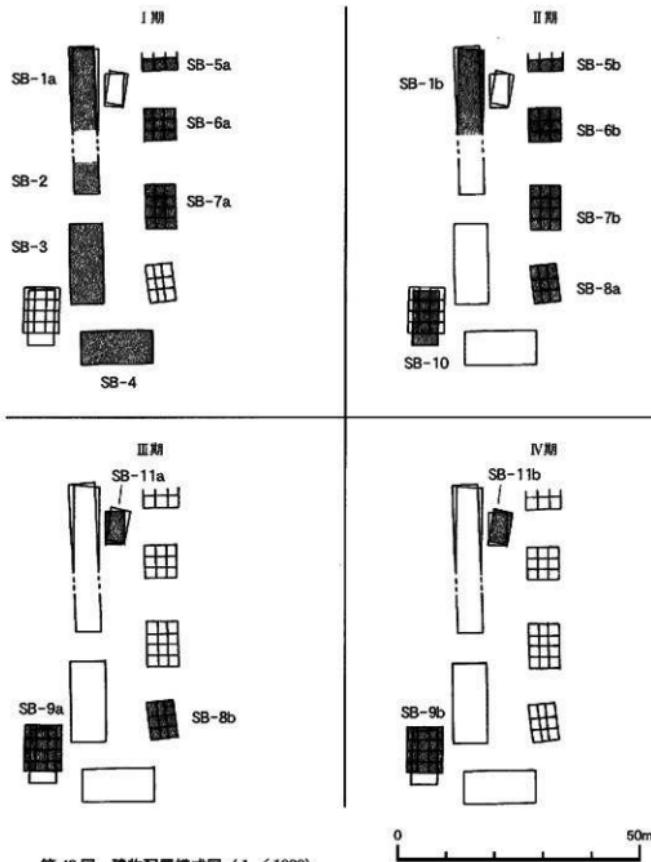
II期 SB-1b、SB-5b、6b、7b、8a、10。側柱建物SB-2、3、4は建て替えられることなく、I期で消滅する。SB-1aのあとには、同じ規模のSB-1bが主軸をやや東に振り建て替えられる。SB-1bと方位を同じくするSB-10がSB-3の西南に建てられる。SB-1の周辺は遺跡内でも最も遺物が散在する場所である。SB-1bを切るSX-1にも多くの上器片が大量の炭化米とともに片づけられている。また、SB-1bの柱穴には柱を引き抜いた痕跡があり、柱痕部分から炭、炭化米が出土する。SB-1bも火災の被害をうけたと思われる。総柱建物SB-5a、6a、7aの後にはSB-5b、6b、7bが同一場所で建て替えられる。SB-8aは最も小型の総柱建物で、SB-7bの南に位置する。SB-8aの主軸は大きく西に傾いており、柱穴は浅く形状は乱れる。他の建物の中で異質であるが、先行する北の総柱建物三棟とは等しく間隔をあけ、一列に三棟を意識した配列をとるため、先の三棟と併存する時期があったものと考えた。II期になって建設されるSB-1a、SB-10とは軸が違い出現時期は前後する



第48図 摂立柱建物の存続関係

建物	建物規模(間)	梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)	主軸方位	炭化米		焼失
						柱振り方	柱直	
SB-1a	3×9 (+α)	5.1	18.5 (+α)	94.35 (+α)	N-2°-W	×	不明	○
SB-1b	3×9 (+α)	5.2	18.5 (+α)	96.2 (+α)	N	○	○	○
SB-2	3×4 (+α)	5.1	8.0 (+α)	40.8	N-2°-W	×	×	△
SB-3	3×7	6.5	16.5	107.25	N-2°-W	×	×	○
SB-4	3×6	6.6	14.5	95.7	N-2°-W	×	○	△
SB-5b	3 (+α) × 1 (+α)	7.2 (+α)	2.4 (+α)	17.28 (+α)	N-2°-W	○	○	○
SB-6b	3 (+α) × 3	6.45 (+α)	6.45	41.6 (+α)	N-2°-W	○	○	○
SB-7b	2 (+α) × 4	4.2 (+α)	9.0	37.8 (+α)	N-2°-W	○	○	○
SB-8b	3×3	5.0	7.7	38.5	N-8°-W	○	○	○
SB-9b	3×4	7.25	9.2	66.7	N-1°-E	○	○	○
SB-10	3×5	5.3	11.4	60.42	N-1°-E	×	○	△
SB-11a	1×3	4.0	6.5	26.0	N-3°-E	不明	不明	△
SB-11b	2×4	3.9	6.4	24.96	N-8°-E	○	×	△

第7表 摂立柱建物計測表



第49図 建物配置模式図 (1/1000)

と思われるが、Ⅱ期を「Ⅰ期の整然とした配列が乱れる時期」ととらえ、同じⅡ期の範疇におさめた。SB-8aの時期幅は今後の課題である。またSB-6bの柱穴上面には、柱が焼けた炭の痕跡が丸く現位置で残っており、再び火事におそわれている。SB-5b、SB-7bでも柱穴の上面に多くの炭、炭化木が確認でき、やはり再度消失したものと判断した。

Ⅲ期 SB-11a、SB-8b、SB-9a。SB-11aはSB-1bと同時存在するには近接しすぎる上、主軸もずれることから、SB-1b消滅後にSB-11aが建てられたと判断した。SB-10は側柱建物であったが、真上にSB-9aが建築されたとき、総柱建物に作り替えられている。SB-9の柱穴はSB-3に近接しており、二棟が併存すれば軒が接近することから、SB-9が建設される時にはすでにSB-3は存在していなかったと思われる。

SB-9も同一場所で一度建て替えられており、SB-9bの柱掘り方には炭化米が含まれることから、SB-9aも焼失と判断した。Ⅲ期は大幅に建物の数が減少する。側柱建物は柱穴の小さなSB-11aのみである。すでに一度建て替えられ、二度の火災を経験した総柱建物三棟(SB-5、6、7)は消滅して、場所をかえ最大のSB-9aが出現する。SB-8は同一場所で一度建て替えられる。

Ⅳ期 SB-11b、SB-9b。SB-11aの後、東に軸をふり、SB-11bが建てられる。SB-9aは同一位置でSB-9bに建て替えられる。SB-9bは掘り方、柱痕とともに炭化米が出土し、柱穴の上面に特に炭、炭化米が集中しており、やはり最後は焼失している。

(2)遺物からみた年代

SB-5より出土したNo.2、3の須恵器壺蓋は8世紀末から9世紀初のものである。これらは柱穴の中ではなく、最上面で検出された。同じくSB-6のNo.7も9世紀初ごろのもので、二度目の柱穴最上面より出土しており、これらの遺物をもって、SB-5b、SB-6b焼失時期の下限とした。柱穴出土遺物はいずれも小片であり、時期決定の材料としては力ないが、二度日の柱掘り方から出土している遺物には8世紀の前半代におさまると考えられるSB-6のNo.6、SB-9のNo.9などがある。遺跡内の他の遺構からも8世紀前～中頃までのものが出土しているが、小片、少量であり、8世紀前半と断定できる遺構はない。古い時期の遺物は持ち込みの可能性もあり、建物の初現がいつなのか、決定する材料は乏しい。現時点では、8世紀後半には二度目の掘立柱建物群が建設され、9世紀初頃に焼失、初現はそれ以前、8世紀中頃と考えたい。

掘立柱建物の柱穴出土遺物は非常に少なく、出土遺物のほとんどが、SX出土か、遺跡内一括資料である。SB-1、2、6を切るSX-1、SX-3からある程度まとまった量の遺物を採取することができた。最も大きな土壙SX-1では8世紀中～後半、9世紀前葉、9世紀後半、10世紀前葉の供膳形態須恵器、土師器が大量の炭化米、炭とともに出土した。この穴は二、三度掘り直されており長期にわたる遺物が捨てられていた。SX-17は検出時、SX-3とつながっており、一つの遺構(SX-3)と判断していた。表面を一段下げるときと17の二つの遺構に別れたが、同時期のものといえる。SX-17はSB-6をきつており、SX-3もSB-6に後出しするものである。SX-3からは主に8世紀中～後半の遺物が出土した。9世紀の土師器壺底部小片も若干出土した。これらをもって、SB-6bの下限とした。これはSB-5bの下限とも一致するものである。SX-11及びその西側周辺では8世紀から9世紀にかけての土器が出土した。SX-1、SX-3、SX-11、SX-11西側など7年度調査区内の出土遺物の大半はこの、西北コーナーに集中していた。

遺跡全体の出土遺物の量を時代別に比較すると、8世紀前から中頃が少量、8世紀後半が多く、9世紀代がそれに準ずる。10世紀前半の遺物はごく少量で、7年度調査区SX-1付近と、8年度調査区のSD-13に掘り込まれた土壙出土一括資料のみである。中津地方ではこれまで10世紀前葉の遺物が乏しく、SD-13から土師器壺、碗、托、黒色土器碗の貴重なセットを得ることができた。これらは本遺跡中、古代遺物としては最も新相を呈す。

遺跡の最盛期は多くの土器、炭化米が廃棄された8世紀後半～9世紀前葉である。以下、Ⅲ期、Ⅳ期と建物と遺物が平行して減少し、SD-13の上層に一括廃棄されたNo.166～172の時期をもって終焉を迎える。以上より、Ⅰ期を8世紀中～後半、Ⅱ期を8世紀末～9世紀初頃、Ⅲ期を9世紀前葉から中葉、Ⅳ期を9世紀後葉から10世紀前葉の時期幅でとらえたい。

(3) 建物の機能

平成7年度調査区の建物群には、総柱建物と側柱建物がある。正倉域において総柱建物は高床式建物で、正税帳にみられる「正倉」の「倉」、側柱建物は「屋」ととらえられる。当遺跡の総柱建物の柱穴は・辺1mをこえる大型で、掘り方の埋土は版築されており、重量にたえる強固な高床式倉庫が想定される。側柱建物の構造は、土間ないし床の低い建物と考えられている。「屋」も物資の収納施設であるが、側柱建物の中には、倉庫以外の建物（正倉の管理棟や事務棟）があった可能性もある。当遺跡の側柱建物を見ると、同時期に建てられたと思われるSB-1、2、3、4の内、SB-1、SB-2、SB-3三棟の柱穴は隅丸方形であるが、SB-3の南筋の四つのみ円形となる。SB-4は柱穴も小さく、円形と方形がまじる。SB-4は他の三棟に比して、簡易な施設といえるのではないか。SB-10は全て小型の円形の柱穴を持つ。SB-4、10は強度の面でSB-1、2、3よりも劣る建物であろう。さらにSB-10はその後総柱建物SB-9に建て替えられることから、側柱建物でありながら、倉庫として利用されていたものと考えられる。

一方、SB-1周辺はSX-1、3、11、SB-11の西側など、多くの土器が集中して出土する地点である。出土遺物はその大半を供膳形態の土器が占めるが、貯蔵形態の須恵器破片も一定量出土した。SX-1からは、特殊遺物として、円面鏡、瓦の破片が数点出土している。数点の円面鏡は全てSX-1より山上しており、この周辺は事務作業の場としての機能がうかがえ、須恵器壺の破片はSX-1、3及びSX-11周辺に集中する。また、SB-2、3、4が建て替えられなかつた中で、SB-1は若干方位を変えてSB-1aの上に建て替えられている。さらにSA-6はSB-1bに平行しており、SB-1bの東棟中心部に沿って位置する。SB-1bの目隠し塀のようなものであろうか。SX-1からは瓦も出土しているが、少量であり、屋根全体に葺いていたものではなく、築り程度に軒先などに並べていたと思われる。SX-1、3とも完掘しておらず、まだ多くの遺物が地中にうまつたままである。以上の点は側柱建物の中で、SB-1が倉庫のみの利用ではなく、役人が執務した事務棟、管理棟のような機能も有す中心施設であることを示唆しているのではないか。側柱建物はまるごと一棟もしくは、一部を仕切って、役人たちが業務にたずさわっていたのであろう。Ⅰ期ではその場がSB-1a（もしくはSB-2まで）で、ほとんど遺物の散布がみられないSB-3、4はまさに「屋」であり、倉庫として機能する。SB-5a、6a、7aは「倉」。Ⅱ期では事務、管理棟の機能をSB-1bがひきつぎ、「屋」としてSB-10が建てられる。Ⅲ期は大幅に倉が減少、「倉」はSB-8bと、SB-5b、6b、7bのかわりに建てられたSB-9aである。側柱建物はSB-11aのみとなる。Ⅳ期にはさらに「倉」が減少、SB-9b一棟のみとなり、側柱建物はSB-11bである。7年度調査区は北側部分を開けていないため、まだ幾つかの建物が建つ余地があるが、当遺跡はⅠ期～Ⅳ期へと次第に規模を縮小しつつも、常に側柱建物と総柱建物が併存する特徴を持つ。

(4) 区画施設について

掘立柱建物群は溝、柵列により区画され、台地上に展開する。建物群の周囲には柵列、溝がめぐる。SD-8は幅40cm、深さ20cmの溝で、建物群を方形に囲む。7年度調査区内では全ての建物、柵列がこの方形の区画内に収まる。西側にはSD-10と柵列SA-1が南北にのびる。SD-10からSD-8の東端まで約90mである。SD-10、SA-1、SD-8ともSB-1、2、3、4、5、6、7の建物群とほぼ方位を同じくしており、主要建物群と区画施設は遅くともⅡ期までには存在していたものと推測される。SD-10は建物群の西端にあり、その先は台地が落ちていくことから、西限の溝となろう。

一方SD-8に平行して南にSD-7、東にSD-11がある。SD-8が排水溝なのか、堀のあとか、その構造はわからないが、外側に平行する溝SD-7、SD-11とともに、建物群の外に通路のような空間を形成していたとも考えられる。調査区西側にSD-8と似た溝SD-5、9があるが、これらはⅡ期の建物と方位を同じくしており、建物の変遷とともに、外側の区画施設も若干の手直しがなされている。

SD-8と同じタイプの溝は8年度調査区内でも検出された。SD-12がそうで、SD-8の西端（SD-6）より約100m南に東西方向にのびる。また同じく東西方向の溝SD-13が、SD-12を切って横たわる。SD-13からは多量の炭化米が出土した。この溝より南からは遺構、遺物とも確認できなかったため、南限の溝である可能性が高い。SD-13の西側部分では、埋土から、黄褐色の地山粘土ブロックがまとまって検出された。この溝を掘った上を溝の北側につみ、土壠のようなものをこしらえていたのだろうか。SD-8とSD-12、13までの間には、90m四方の区画をとる余地が十分にある。台地の西半分には、北と南に二つの区画が存在したと考えられる。

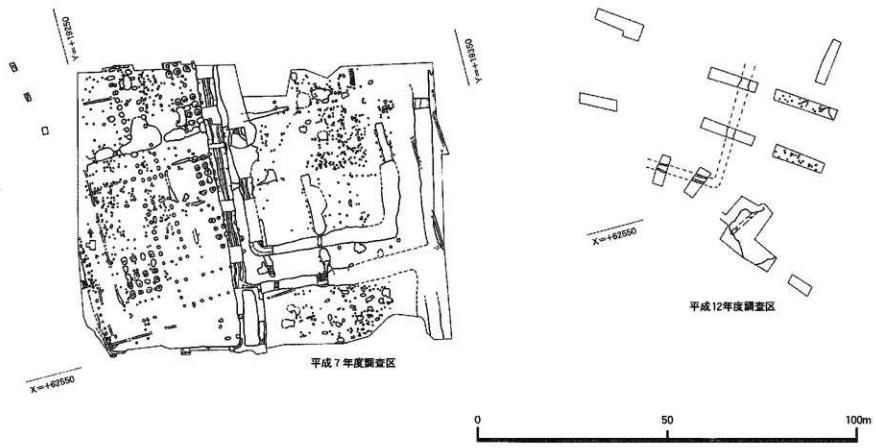
現時点で、平成7年度の区画を90m四方とすると、北からSD-13までとSD-10から90m東まで、 $190m \times 90m = 17,100m^2$ となる。台地は北にいくほどゆるやかに下るので、これ以上北側に展開することはないと判断した。

（5）遺跡の展開

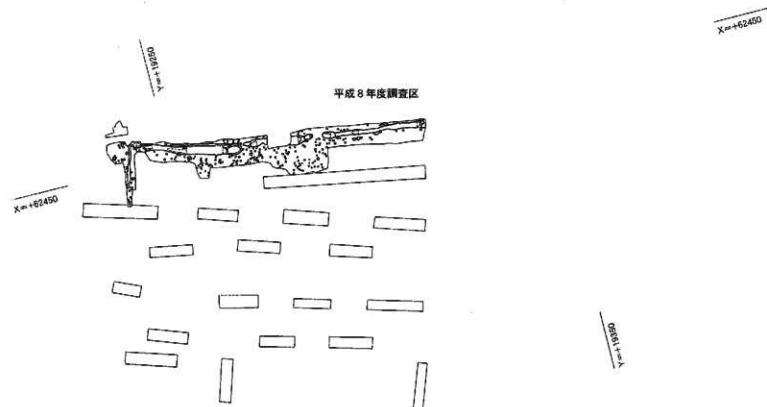
長者屋敷遺跡は平成8年度SD-12,13の検出により、南北長は7年度の2倍にのびた。7年度調査区とSD-13の間にある寺からは、建設時に大量の炭化米が出土したといい、この間にも米倉が存在したことは確実である。SD-12からは8世紀中頃の墨書き土器が出土しており、SD-13の最下層からも8世紀の遺物が出土する。Ⅱ期の終焉までには南の区画が設定されていたようである。10世紀の遺物は7年度調査区ではわずかであるが、SD-13から出土したものは残存率が高い。7年度調査区はⅠ期Ⅱ期が最盛期で、Ⅲ期Ⅳ期へと縮小傾向にある。時代がさがるにつれ、遺跡の中心は南側に移動したのではないだろうか。

台地の東側では過去製材所の倉庫建造中に炭化米が出土したとの聞き取りをえており、7年度のSX土礫のような火災片づけ穴の存在が予想される。12年度調査区では、SX-1に似た形状の8世紀後半～9世紀初頭の大型土礫SX-21が検出された。12年度調査区まで含めて、Ⅱ期までには台地上に広く遺跡が展開していたことがうかがえる。しかし、12年度調査区は聞き取りでは本来現地表面より1mほど上地が高く、東に傾斜して谷に落ちる地形であったという。西半分を削り東をうめた結果、現在のような平坦な空間となっている。古代の地山の高さは知る由もないが、12年度調査区の西半分の土地は深く削られごつごつした山肌を露出し、SD-15もわずかに浅い床面を残すのみである。また、東端までのばした1、2、4トレーンからは溝、柵列らしき遺構は検出できなかったことから、東側に7年度調査区並みの空間を設定するには無理がある。台地西半分にはすでに二つの区画（7年度調査区からSD-13まで）が想定できるが、現段階では台地東側の様相は不明である。東側には郡庁のような中心施設ではなく、正倉院に付属する小規模な建物が設置されていたのではないか。

官道にほど近い台地上に立地すること、大型の掘立柱建物が計画的に配置されること、建物群が広い範囲で展開すること、大量の炭化米が出土すること、円面鏡、墨書き土器のような官衙的遺物が出土すること、などの点より当遺跡は下毛郡衙の正倉域と判断した。「倉庫令」によれば、「倉は皆高く擗ける



第50図 平成7年度・8年度・12年度調査区全図 (1/1,000)



ところに置け。側に池渠開け。」とある。遺跡は南から舌状にのびる台地の尖端に位置する。台地の東西は細長い谷部になる。西側の谷は字を「大池」といい、現在も非常に地下水位の高い場所である。正倉の占地にあたり、谷が自然の堀としての機能をはたすような小高い場所を選定しているといえる。

今後の調査では、SD-13北側および台地東側の遺構をさらに搜索し、遺跡の全体像をつかむ必要がある。なお、7年度調査区北側の市営住宅は老朽化しているが、長者屋敷遺跡保存のため、市は市営住宅の建て直しを断念した。いずれ、7年度調査区の続きである北側部分の調査が行われることは確実で、正倉域のさらなる解明を期待したい。

気になる郡庁であるが、長者屋敷の台地上には存在しないようである。候補地としては、長者屋敷遺跡から官道の間の、八並の集落、および、その周辺の官道沿いがあげられる。標高の低い条里地帯にも官道周辺には微高地が確認できるが、正倉城と離れてすぎるくらいがある。今後、官道周辺でも確認調査を行い、道路、条里、郡衙域の古代景観復元につとめたい。

2. 長者伝説について

長者屋敷遺跡という名称は、遺跡のある小字名からつけたものである。「長者屋敷」という地名は全国各地にあり、しばしば長者伝説を伴う。「長者屋敷」地名の考察は古くから行われてきた。齊藤忠氏の『長者屋敷考』¹⁰によれば、古くは江戸時代の学者も見解を述べていたという。齊藤忠氏は全国の長者屋敷関係地名をあげ、遺構や出土品についても列記している。長者屋敷地名をもつ地域は古代駅長の宅、宮殿跡、国府跡、郡衙跡、山城跡、寺院跡などがある。年代は平安時代頃までの古代遺跡で、礎石、瓦類、上墨、焼米などが確認されることを指摘している。さらに、長者の宅が焼かれ、一朝にして殺され財を失ったという伝説もしばしば伴うという。また、木下良氏は『地名「八並」および「八並長者屋敷」伝説地考—郡家跡の想定に関して—』¹¹で、北部九州にみられる「八並」地名、「八並長者屋敷」伝説地が、古代郡家の位置を示す可能性について述べている。氏はその中で、中津市永添の字「八並西後」と字「長者屋敷」をとりあげ、瓦の出土をみるとから、下毛郡家跡と推定している。さらに「八並」という地名は倉庫群が建ち並ぶ状況から生じた地名と指摘している。

7年度調査区で想定した90m四方の範囲はそのまま字長者屋敷であり、その北側の官道までを八並西後という（第52図）。長者屋敷の北側の集落は字東浦に入るが、地元の人の通称は「八並の部落」であり、字八並西後はまさに「八並の部落」の西側にあたる。字名こそ違え、東浦の集落こそ「八並」なのである。この集落には古くから「八並さん」というお宅があり、「八崎さん」という一族も住む。字長者屋敷の土地は元来八並さんの土地であった。字長者屋敷では以前より焼き米の出土が知られており、「八並長者伝説」が語りつがれていた。今では代もかわり、伝説を知る人も少なくなったが、幸運にも「八並の部落」にお住まいの今永厚さん、奥様の多喜さん、八崎勝代さんにお話を聞くことができた。地元の人々は八並長者について様々に言い伝えており、三者三様のお話を聞けた。以下、今後の記録として、聞き取りに忠実に伝説を記す。

今永厚さん（大正7年生まれ）のお話。

・・・昔、長者屋敷には西に倉が五、六棟並び、二重の堀があった。多分昔の豪族だろう。ある年の正月にそば粉を練って出したら、主人が怒って、蹴散らかした。すると白い鳩が飛び立って、火事になつて焼けてしまった。だから食べ物をそまつにしてはいけないのだ。・・・

この地では、昔から正月には蕎麦切りをつくったり、そば粉を練って食べる習慣があった。

今永多喜さん（大正8年生まれ）のお話。

・・・昔、ものの重さを量る時は、竿秤（さおはかり）で量っていた。ある日、荷物が重すぎたのか、分銅が落ちて、さおが折れてしまった。折った人（主人か使用人）は「はかりかけておらけたのは、おればかりじゃ。」（はかりかけて折ったのは、折れ秤だ=俺だけだ）と（冗談を）いって（反省するどころか）吹聴していたので、罰があたって火事になった。だから秤をそまつにしてはならない。・・・

八崎勝代さん（大正12年生まれ）のお話。

・・・ここには昔、「八並長者」が住んでいた。「八並長者」は多くの米倉を持っており、40～50軒の米倉が建ち並んでいた。「八並長者」には息子ができなくて、養子をとった。この地では、元旦の朝、「そまねり」（蕎麦練り）を食べる習慣がある。養子はよそから来たから、この習慣を知らなかった。元旦の朝、「そまねり」を出された養子は「こんな粗末なものが見えるか！」と腹をたて、「そまねり」の入った鉢を蹴ついていろいろの中に蹴落とした。それがもとで火事になり、炎は米倉にまでひろがった。そして「八並長者」の米倉は全部焼け落ちてしまった。実は米倉に火をつけたのは、怒った福の神のなさったことだった。福の神は火をつけたあと、長者のもとをでて、博多の「そうたん」へ行った。そこには貧しい鍛冶やのおじいさんとおばあさんが住んでいた。福の神は旅人の姿になり、二人に「一晩宿を貸してくれ」とたのんだ。しかし、この二人は貧乏だから、食べるものがないと言った。すると旅人は「このお金で食べ物を買ってくれ」といい、「天保錢」を差しだした。二人はさっそく「かっさい袋」をもって米屋に米を買に行った。米屋は一升ほどの米をくれた。二人が帰ると、旅人の姿はなく、二人は米を焚いて旅人の帰りを待ったが、お客様はもどってこなかつた。二人は神に参って米を食べようとしたところ、神棚の横に、赤い服を着た福の神が座っていたという。・・・

三つの話に共通するのは、ものを粗末にした罰に、火事にあうという点である。8世紀後半頃から、全国で正倉火災が頻繁に発生する。当初、国司や郡司が國神を敬わない罰の神火といわれていた。しかし、中央政府は、火災が現職の郡司を失脚させようとしたり、倉庫管理の役人が不正を隠すために放火したものであることをかぎつける¹⁰。長者屋敷遺跡の建物も何度も火災にあっていた。「神火」の火災により、大量の炭化米が出土することから、「八並長者伝説」が語り次がれてきたのである。今永厚さんのお話には白い鳩が登場する。長者屋敷は宇佐八幡宮の祖宮である薦神社に近接し、当地野仲郷は古くより宇佐宮封¹¹になった土地である。鳩は八幡神の化身とされる鳥で、神火と八幡神は結びつけられていたかもしれない。

しかし、この伝説は古代のみにとどまらない。福の神が向かった博多の「そうたん」とは16世紀末から17世紀初頭に活躍した、博多の豪商「神屋宗満」（1551～1635）に由来するのではないか¹²。「神屋宗満」とは、兵火で焼亡した博多の町の復興に尽力した人物である。秀吉の庇護を受け、肥前名護屋城の黄金の茶会にも列し、名護屋における商売も許されている。種々の事業に手を出し、博多商業の始祖を宗満に擬する伝説は極めて多いといいう¹³。神屋宗満が中津と直接関わりあったかは不明だが、宗満の名は広く知れ渡っていたのである。天正15年（1587）、黒田孝高は九州征伐の軍功で秀吉から豊前の因六郡を与えられた。翌16年、山国川に望んだ地を選び、中津城の造営を始めた。これが中津城の歴史の始まりである。黒田時代の縄張り図には、京町、博多町などの町名がみえる。城がつくられると、商人も集まる。博多をはじめ各地の商人たちが、豪商宗満の噂を運んできたことは想像に堅くない。

正倉火災が神火伝説を生み、大量の焼き米を見た人々は多くの米倉を持った長者とその没落を思い、ものを粗末にしてはならないという教訓を子ども達に伝えた。さらに長者を没落させ去っていった福の神と、富を築いた豪商との関わりを想像した。長者屋敷遺跡は古代の米倉と中世の城館が重なりあった遺跡である。伝説は1200年前からの人々の想いを今に伝えている。

- (1)齊藤忠『日本古代遺跡の研究 論考編』吉川弘文館 1976
- (2)木下良『地名「八並」および「八並長者屋敷」伝説地考』日本地理学会秋季大会発表要旨 1991
- (3)山中敏史・佐藤興治『古代の役所』岩波書店 1985
- (4)櫻井成昭氏(大分県立歴史博物館)の御教示による
- (5)『国史大辞典』吉川弘文館 1983

3. 八並城跡について

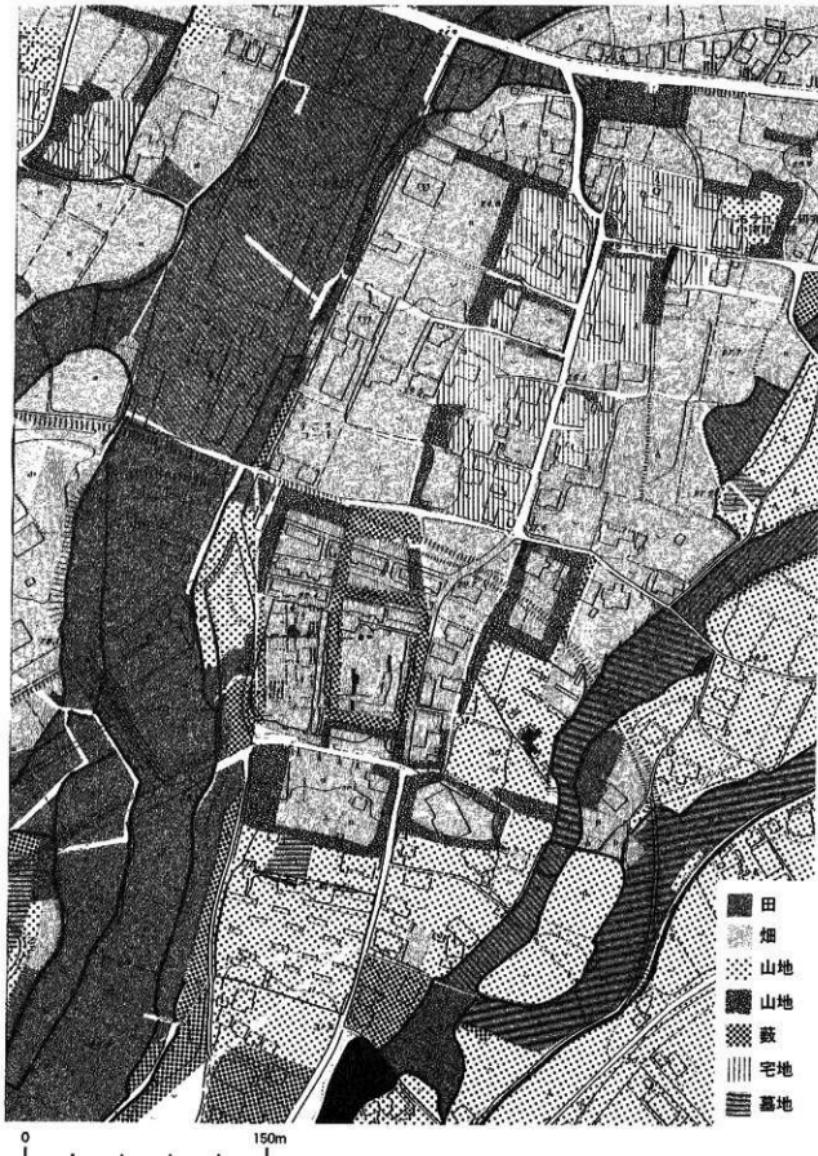
(1)八並城の歴史

長者屋敷遺跡は、発掘当初より古代下毛郡衙正倉推定地として、注目を浴びてきた。しかし、一方中世八並城跡としての顔を持ち、二重の堀は発掘現場を訪れた人々の目をひいた。「下毛郡誌」⁽¹⁾によれば、「八並城は小城藏人宗次（本姓は臼杵）によって築かれた。天文元年（1532）、藏人宗次は大友出陣に従い豊前国水添村小城に住した。このとき小城甲斐守が大内の命を背き、小城を横領した。宗次は甲斐守を擊って八並城を築き、小城を領し小城と称した」という。天正8年（1580）、八並城は豪族野仲銀兼に攻め落とされた。天正15年（1587）、秀吉に豊前を与えられた黒田孝高は翌16年（1588）に中津城を築城した。孝高の息子長政は黒田氏に従わない地元豪族連を次々に撃ち野仲氏も滅ぼされた。

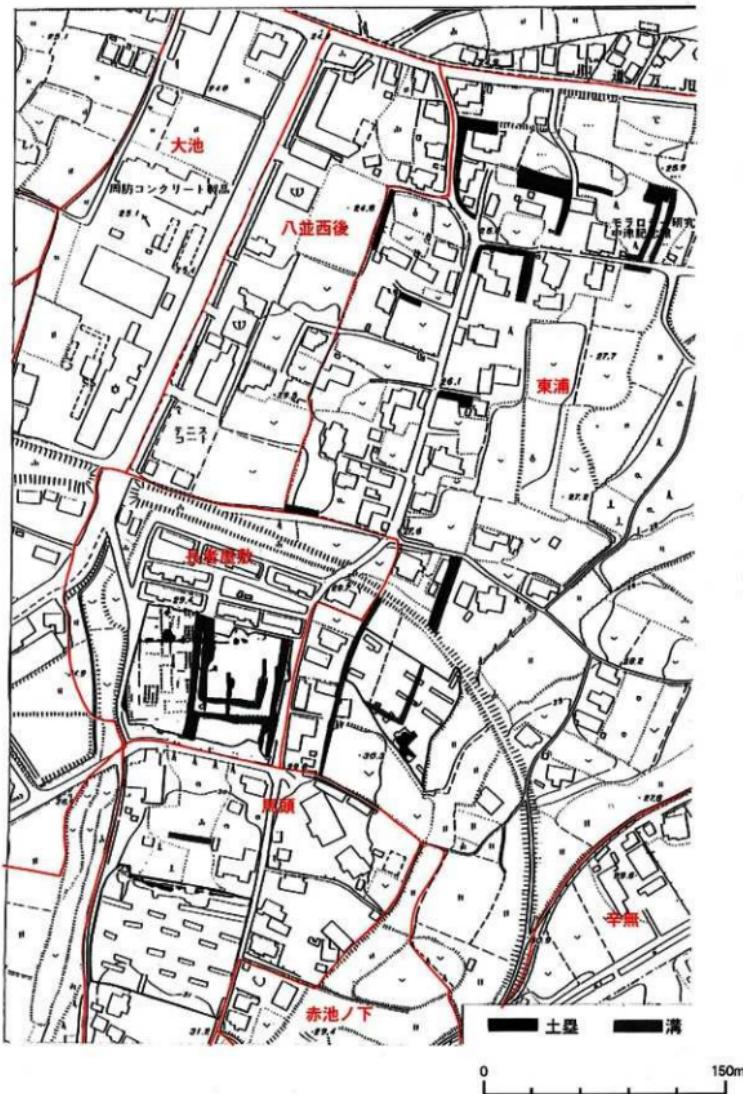
(2)方形居館について

7年度調査で堀が検出されたのをきっかけに、改めて見直すと、長者屋敷周辺は現在でも中世景観を色濃く残す地域であることがわかつた。第51図は、明治21年の字図をもとに、地目を表したものである。土塁や水のない堀はしばしば細長い山林、藪の地目で表記される。地目別に塗り分けたとき、そのままでは広い山林、藪と土塁、堀との区別がつきにくいため、山林の細長い土地については、他より目立つよう濃く表現してみた。すると水田地帯（谷部）にはさまれた低台地上にいくつもの長方形の区画が出現した。長者屋敷周辺には現在も堀の跡や土塁が残る。第52図は現在の地図で、発掘調査で確認した溝と、現地表面でたどれる溝、土塁を記したものである。7年度調査区内の二重の堀は字図の山、藪とほぼ重なる。12年度調査区周辺、8年度調査区北側墓地の堀も一致する。

7年度調査区を中心とした台地の上は、SD-1、2の二重の堀に囲まれている。堀の幅は約3~4m、深さは約1.6mである。堀の内側は東西は発掘調査より、約33m、南北は字図より約66mとなる。小さなピットが多数あり、直線的な並びも見えるが、建物は確認できない。南側の区画にもピットを多数検出している。SD-1、2の間にはピットがなく、土塁が築かれていたと思われる。この土地は今より1~2mほど高かったそうで、堀の深さは3mほどはあったという。堀の西側にもほとんど遺構が無いが、土地が下げられた結果、消滅したとも考えられる。ただ、堀が二重にめぐり、中心の方形区画を形作ることから、SD-1、2で囲まれた空間が主郭であったと考えられる。台地の上では、ちょうど長者屋敷遺跡の範囲と重なるように、主郭を中心としていくつかの方形区画が囲む。主郭を囲む方形区画は家臣団の居住空間であろうか。二重の堀で囲まれた主郭は、要塞のような軍事施設であったとも考えられる。



第51図 八並城跡周辺地目図 (1/3000)



第52図 確認した土壟・溝 (1 / 3000)

7年度調査区だけでなく、8、12年度調査区でも1m以上下げをしたという。8年度調査区ではわざかに、方形の高まつた土地が残る。本来この台地上では、深い堀に区画され、いくつもの小高い方形空間が存在していたのであろう。台地から官道までゆるやかに下る道の両側の集落にも土塁や溝の方形区画があり、屋敷地の方形の高まりが階段状に連続する。集落の西側、字八並西後にも西側に森、山の地目で描かれた細長い痕跡があり、字八並西後は集落の耕作地であったと思われる。官道からこの集落へ道は曲げられ、入り口には土塁が鍵の手状にさえぎり、集落を隠す。八並城は豪族の居館というだけでなく、軍事的色彩が濃いものであったといえるだろう。八並城跡は、台地の上の城館と、北側の集落までを含めてとらえるべきである。

(3)地下式土塙について

唯一、二条の掘にはさまれた西南コーナー部に、階段を持つ長方形の地下式土塙一基が検出された。地下式土塙の解釈は倉庫、改葬墓、即身仏の墓など諸説ある。原田昭一氏⁽¹⁾は九州、山口地方の地下式塙を検討し、「中世後半に関東地方をはじめとした他地域からもたらされたもので、近世の寺檀制成立の播磨期にその使命を終え、消滅した仏教施設」ととらえている。居館に伴う地下式土塙としては、近郊では豊後高田市のカワラガマ遺跡⁽²⁾が類似する。カワラガマ遺跡も、長者屋敷遺跡と同様に地下式土塙を二重環濠の西コーナーに配置する。長者屋敷が地下式の倉庫か、即身仏の墓などの仏教施設か、現段階では判断を控えたい。しかし、カワラガマ遺跡と配置が共通すること、原田氏があげた他の事例でも堀近くに位置することは意図を感じずにはいられない。長者屋敷ではSK-2とは形態が異なり、階段をもたない土塙SK-3がある。SK-2同様平坦な床面を持ち、壁面がオーバーハング気味であることから、地下式土塙の一種かと考えている。SK-2、3とも遺物は全て上層から出土し、中層以下からは一点も出土しない。一定期間、内部が空洞であったと思われ、土塙の解釈にヒントをなげかけるものであろう。また、これらの土塙上層から出土した遺物は16世紀代のものである。先に述べた下毛郡誌の記述によれば、遺跡の成立年代は1532年、終焉は野仲氏に攻め落とされた年とすれば1580年である。遺物が上層より出土していることから、土塙出土遺物の年代は16世紀後半に比定できる。今後中津周辺の16世紀代の遺物として指標になるセットであろう。

現在の集落は中世の集落跡を連續と踏襲しているが、台地上では、古代の正倉の時代、八並城の時代以外の遺構を検出できない。古代にすでに開発されているにもかかわらず、10世紀を最後に、次は16世紀の遺物しかひろえない。そして、八並城廃絶後は、再び明確な遺構はたどれない。長者屋敷の台地は特別な空間であったのだろうか。

中津市には多くの中世城館と呼ばれる遺構がある。字図を観察すると、八並城周辺でも、大規模な城館以外に、堀や土塁で囲まれた小規模な方形区画が点在しており、中世集落の姿を彷彿とさせる。今回の発掘調査で、字図の細長い地割りが土塁、堀の位置を正確に伝えていたことを再確認できた。中津市内にはまだ多くの堀、土塁が残り、字図をもとにいまだ知られていない居館をさがすことでもできる。今後他の居館との比較観察を通して、八並城にさらなる検討を加えたい。

(1)山本利夫「下毛郡史」私立三余女学校 1912

(2)原田昭一「九州山口における中世『地下式塙』の諸様相」「古文化談叢」第45集九州古文化研究会 2000

(3)河野典之氏・岩男真吾氏(豊後高田市教育委員会)の御教示による

第八章 中津市長者屋敷遺跡の性格

～豊前・下毛郡衙正倉群をめぐって～

福岡大学教授 小出 富士雄

1. はじめに

古代社会における国郡制の制定は、大化2年（646）正月条の大化改新令に「初修京師、置畿内國司、郡司（後略）」とある記載に拠っている。以来、奈良・平安時代の律令官人たちの認識になっていた。『職員令』大郡の条には大領の職掌について、

大領一人。掌。撫養所部。檢察郡事。余領准比。

すなわち国司は大国条に職掌の内容を詳しくあげているのに対して、郡司の場合はきわめて抽象的にしか記されていない。また郡には大・上・中・下・小郡の5ランクがあり、郡司職員（大領・少領・主政・主帳）の定員がそれに応じて異同があることを定めている。

したがって以上のような簡略な記載からは郡衙の構成の実像はうかがうことはできない。

むしろ近年までの考古学的調査による郡衙関係遺跡の増加や、木簡をはじめとする出土遺物によって、「郡」制が実際に発足したのは大宝令が制定された8世紀初頭からであり、それ以前の7世紀後半代は「詳」制時代であったことが明らかにされてきた。「官衙配置」といわれる定型化した郡衙建物の配列（コ字型あるいは品字型）が完成したのは8世紀代になってからであることも今日ほぼ定説化している。

平成7年（1995）度に発見された大分県中津市水添・長者屋敷遺跡が豊前国下毛郡の郡衙跡、とくに正倉関係遺跡に比定され、保存整備されることが早々に決定されたことは中津市の英断であった。しかし現在発掘されている範囲での建物群をもって、郡衙遺構のすべてが明らかになったわけではない。現在我々の目にとまっている遺構群が郡衙の全体像でどの部分に比定されるのであろうか。さらには今後どのような調査が想定されるであろうかなどの問題について、現段階で許される範囲での推察を重ねて今後の調査や将来の保存整備策に資したい。

2. 史料にみる古代郡衙の構造

郡衙遺跡の構造について先駆的業績をあげられたのは、高井悌三郎氏による茨城県（常陸国）真壁郡協和町（旧新治村）大字古郡に在る新治郡衙の調査であった。古来畠地に礎石と思われる石材がみられるところから新治郡家跡が想定されていた。高井氏は昭和16・18（1941・43）両年、この地に発掘やボーリング調査を行って多くの建物群の存在を確認した。報告書¹⁾によれば東部建築群跡13・西部建築群跡9・北部建築群跡25・南部建築群跡4の4群計51遺構が確認された。『日本紀略』弘仁8年（817）10月癸亥の条に、「常陸國新治郡災。焼不動倉十三宇。穀九千九百九十斛。」とあって、東部建築群跡が13を数え、焼跡が発見されるところから、焼失した不動倉13棟にこれをあてた。さらに南部群を勤用倉（穀倉）にあてた。また『類聚三代格』巻12「正倉官舍廈」条、延暦10年（791）太政官符に「諸國倉庫大牙相接。縱一倉失火者。百庫共破焚焼。」とあり、また同14年（795）太政官符にも「諸國建郡倉。元置一處。」とあるところから、一般に諸国の倉庫は同一所に集めて置かれていたと思われる所以、北部群も倉として稻栗麦塙などを貯えたのであろうと推察した。西部群については以上の三群とは配列状況もやや異なり、発見される土器も完形ちかいものが多いことなどから居宅跡を推測し、郡家に比定した。さらにこのような倉庫群の方位ごとにまとまった規律ある配列について天平9年（737）和泉監正税帳の日帳

郡正倉の記載を参考にあげられたのは違見であった。すなわち「不動南第壹甲倉」・「南第貳丸木倉」・「西第壹丸木倉」・「北第參板倉」などのように東西南北四方位ごとに番号・構造と倉ごとの法量（長・廣・高）・収納穀の種類（穀・穀）・収納量（束・斛斗）が記されている。

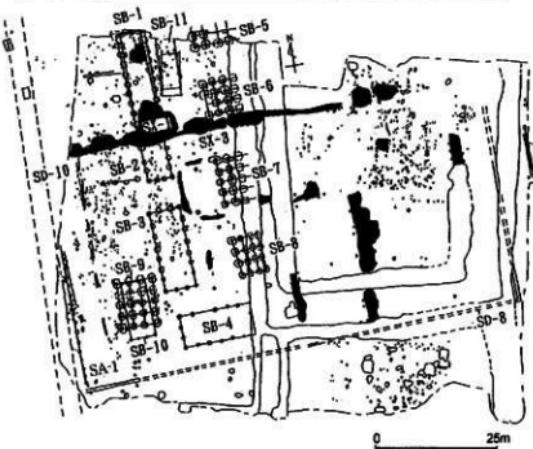
昭和36（1961）年丸茂武重氏は古代の文献史料にみえる国衙・郡衙関係の建物について史料を掲げて総覧された¹⁰。この方面的先駆的作業として利用されることが少なくない。この中で「郡家の建物」として郡家・郡衙・郡庁・郡府・郡治などの名称の出典が示され、「郡家集落の建物」では長元元年（1028）の「上野國交替実録帳」によって官舍・郡庁・郡庁屋・郡庁雜屋のほか一館～四館・厨家・正倉があつたこと。郡庁建物には庁屋・副屋・向屋・厨・公文屋・納屋が、また一～四館には向屋・副屋・宿屋・納屋・厨・廄があつたこと。厨家は竈屋・納屋・櫛屋・酒屋からなっていたこと。正倉には構造によつて土倉・板倉・萱屋・櫛守倉・丸木倉・甲倉などの別があつたことなどがあげられている。

これより先「上野國交替実録帳」は平安中期の郡衙の構造を知る貴重な史料であるところから昭和26（1951）年に竹内理三氏によって、「延喜式」卷38の裏にある郡衙に関する部分が紹介された¹¹。竹内氏の考証によれば本文書の成立は長元3年（1030）ごろである。つぎに各郡には10数字～20数字の正倉があり、萱屋・土倉・板倉・甲倉・丸木倉の種別がある。そして東西南北中を冠し、さらに一・二・三の数字を付してあるところからその建て並べ方も想像できる。正倉については一館～四館があり、各館には宿屋・向屋・副屋・廄各一字がある。竹内氏は正倉院文書に国司郡司の居宅を館と称している例から、宿屋・廄のある点をも参考して「郡司の四等官の官舍ともいべきもの」かと推定された。さらに四館のなかには厨家を備えたものがあるところから、「廄のある館の官人は通勤で、厨家のある館主は住み込みとでもいうことができようか」とされている。また別に郡庁があつて庁屋・公文屋がみられるので、ここが公務を行なう政庁であることが知られる。これらと別に記された厨家には酒屋・竈屋・櫛屋・納屋などがあり、「郡司雜任たちの食事を用意する所」と考えられる。

以上のような「上野國交替実録帳」や大平期の諸國の正税帳にみえる郡衙の構造から、小林昌二氏はつぎのような四つの郡衙の機能をあげている¹²。

- (1)大規模な正倉群の存在は、再生産機能（出撃・勧農）・社会的救済機能（賑給）・公共事業的機能（水利・橋梁建設）を担う一方で、中央公進物の調達・地方官衙の財源・国司の公廄などに充てられた。そのため厳しい収奪機能を果すための不可欠の建物群であった。
- (2)国司の職掌（職員令第二）にみられる多様な業務の実際を現地で執行する郡庁の機能を具体的に示しており、「郡司を主体とした郡内有力者の結集する政治的拠点の機能をもっていた」。
- (3)館や厨家の構成内容から、「郡衙役人」や「郡内外を往来する様々な官人」への供給機能を果した。また駅家や伝馬にかかる郡家には、「地方の支配拠点をつなぐ交通・通信のネット・ワークの機能が存在した。」
- (4)郡家の成立地点には「先行する官衙跡・居館跡をもたず、また集落跡をもたないことが殆どで、その占地が野などの全くの新地に建設された」特徴があげられる。そしてここに至る過程を弥生時代の環濠集落から古墳時代への移行にさかのぼって「『公権力』機関や支配層の居住域と住民の居住域との分離」が進行し、古墳時代に定着した。

以上のうち、現在までの官衙遺跡調査例の増加からは(4)については必ずしも全面的に認められるわけではない。集落跡と重なる場合には官衙建設にあたって先行する集落を移転させたとする説もある。また評衡から郡衙への移行が同一場所で建物配置を異にするケースなども知られてきていて、さらに厳密な分類と解釋が要望されてくるであろう。

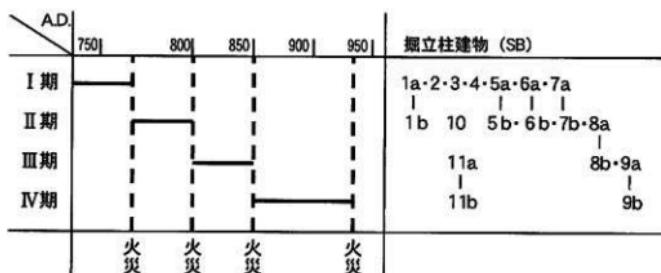


第53図 長者屋敷遺跡全体図（上）、7年度調査区造構配置図（下）（註.8.10文献より）

3. 中津市長者屋敷遺跡の特色

1995(平成7)年、山国川の東方台地(中津市大字永添)に発見された長者屋敷遺跡は、古代下毛郡の官衙関係遺跡として注目を集めた。市営住宅建設に先立つ地域の調査であるために遺構の破壊や削平もあるが、南北方向に柱筋をそろえる掘立柱建物群や土坑・溝などの存在、さらにこれらを方形に囲んだ柵列や溝による区画の存在などが明らかにされた。北側は現在市営住宅群の一部が在り居住しているので発掘調査は将来に待たねばならないが、建物群はその住宅群地区にまで続いている、北限の状況は不明である。しかし東・西・南を画する溝や柵列から推測して、東西約100m、南北もそのくらいか、それ以上の方形または長方形の区画を設けていたと思われる。すなわちほぼ1町方角乃至南北に長い1町以上の区域が設定されていたと考えられる。

以上の区画内におさまる掘立柱建物群は、同区画内の西側半分に集中していて東半分は空地となっている。建物群は4期の変遷を経過している。そして各時期と終焉はいずれも火災によって区分されている。



第54図 掘立柱建物の存続関係

建物群の変遷を通じて最も活発に機能したのは、Ⅰ・Ⅱ期である。すなわち8世紀中頃から9世紀初めに比定される時期である。Ⅰ期における建物群は南北方向をとって並列する東西2群で構成される。西列には1a・2・3の長舎型掘立柱建物とその間に東西方向の4があり、東列には5a・6a・7aの方形・長方形プラン総柱建物がある。2群のあい対する側(内側)の南北方向柱列は柱筋を同一直線上に揃えた計画的配置がみられる。火災後のⅡ期には西列の2・3・4は廃絶して新たに10がさらに西側に新造されるが、東列では5・6・7は旧位置を踏襲し(a→b)、8aが新造された。しかし從来の西端柱筋を揃えることはなされなかった。すなわちⅡ期の建物群は西列群が減少し、東列群は増設されたものの、方位にこだわる計画性は後退している。

つぎに気付くことは、通じて西列群が長舎型掘立柱建物であるのに対して、東列群は方形・長方形総柱建物であることである。東列群建物の構造は3×3間、3×4間の総柱構成からして高床式倉庫であることは異論ないところであろう。その規模についてみると、

6b-3×3間(方形)・面積41.6m²

7b-4×3間(長方形)・面積56.7m²(推定)

8b-3×3間(長方形)・面積38.5m²

すなわち面積30m²以上で、25m²未満が多いとされる集落の倉を越え、山中敏史氏のいう群衆正倉の中型の倉(25~60m²未満)に相当する¹⁰。また西列の長舎型掘立柱建物群が正税帳などに記載された正倉群

中の「屋」に照合されること。またそれらが必ずしも倉庫のみに限らず、「正倉の管理棟や事務棟にあたる」場合もあること。実際に史料にみえる「正倉官舍」で「税長」(郡雜任) や「院守」(国衛衛丁) などが「正倉への穀穀の納入や出舉などに関する出納業務・倉庫の番などにあたっていた」官舍が正倉地区に在り、これら「側柱建物の一部には、そうした倉庫以外の施設も含まれていた可能性」が指摘されている³³。このような視点から、東・西両列の建物群が構造別に分れてあい対して並行する状態を考えると、両者に収納物の相違あるいは機能の相違(動用・不動用など)なども推察される。また両群間の南端に東西方位の側柱建物(SB-4)を業務用官舎にあてることもあるながら否定しないであろう。しかしこの建物もⅡ期には廃滅し、新たにその西隣に規模縮少された側柱建物(SB-10)が出現している。長舎(屋)の減少に連動した官舎の縮少も考えられなくはない。

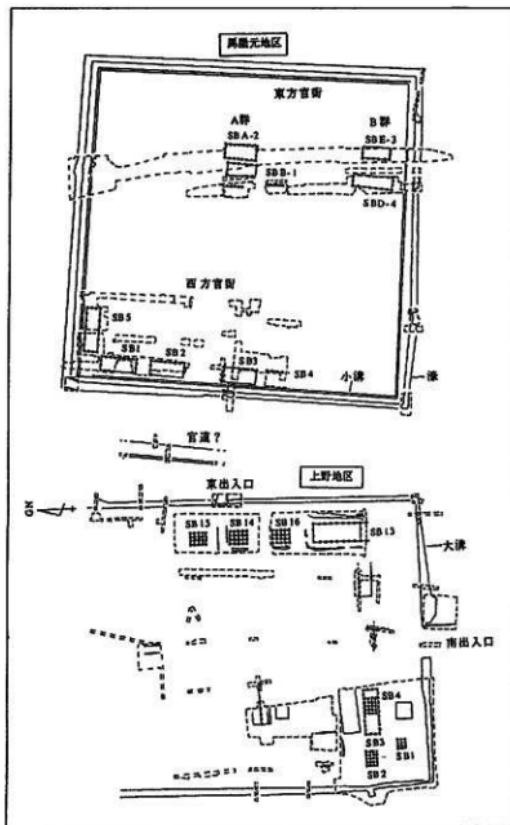
本遺跡の倉庫群に稻穀が収納されていたであろうことは、これらの建物群から炭化米が発見されたという報告からも容易に推察される。したがってその多くは穀稻を収容していたであろう。いまのところ炭化米以外の検出は報告されていない。稻の収納形態には穀稻と穀稻の2種があったことが知られている。正税帳や交替帳にみえる穀倉と穀倉の記載に注目した松村惠司によれば、丸木倉は穀倉専用で規模が小さいこと。甲倉・板倉は穀・穀両稻が収納されたこと。桁行30尺をこえる大型倉は板倉の可能性が高いこと。しかし発掘遺構の平面形態の比較からこれら3種の倉を区別することは難しいことなどが指摘されている³⁴。また穀稻を収納した屋(穎屋)についても天平勝宝年間の越前国桑原庄の板葺構造穎屋を検討して、内上間の可能性が高く、当時の一般住居と差がないこと。「穎倉に伴なう穎屋は、出舉の貸出と返納に深く関係する施設」であり、常に倉に付随して使用されるところから、村尾次郎氏のいう「比較的簡単に出納できる中雜的貯積所」説³⁵を支持している。

以上述べてきたところから長者屋敷遺跡が奈良時代官衛正倉遺構群に相当するものであり、稻穀を貯蔵していたことも知られた。この遺構群の西・南・東三方は細かい溝で囲まれ、その東西幅は約75mである。遺構群はその西半部に集中し、東半部は空間地となっている。さらに東溝と西溝の外側には約7mの間隔をおいて、それぞれ木構列が平行して設けられている。西構列(SA-1)の外側は台地の西端にあたり急落するが、調査者はここに西構列に平行する一段盛り状逆台形の深さ約1.4mの溝(SD-10)があることを確かめている。さらに当遺跡の立地が北側を走る推定古代「官道からゆるやかに坂を登ってきた台地の先端にあたり、西側は小字を『大池』という谷があり込み、約4mの比高差がある。また東側は西端から約185mで東の谷に落ちる。南はそのまま台地が続く³⁶」地形である点から、「倉庫令」に記されたつぎの規定が現実性を帯びてくる。

「凡と倉は、皆高く擗ける處に置け。側に池渠開け。倉を去ること五十丈の内に、館舍置くこと得ず³⁷。」正倉群の立地は令の規定を遵守しており、館舍設置の規定も遵守したとすれば、この台地上に郡庁官舎の存在を考えるのは難しくなる。平成8年(1996)度の調査ではさきの南限溝(SD-8)のさらに約100mほど南に、これとやや方位を異にして重複する2本の東西溝(SD-12・SD-13)が検出された。両溝内からは8世紀中~10世紀前半代の土器が出土し、北側正倉群からこの溝に至る中間域では以前に大量の炭化米が出土していると伝えられる。調査者は北側正倉城を90m四方とすると、新たな発見溝(SD-13)まで約190m、さらに北側正倉城の西限溝(SD-10)から東に台地の端まで最大220mあり、この間でも過去に大量の炭化米が出土したと伝えられるところから、「台地全体に倉庫が小群をつくりながら一つの大きな正倉院を形成するか、倉以外の他の施設の存在³⁸」を考えて、集中型の郡衛正倉群を想定している。今後、平成8年度発見の南限溝に至る地区的調査が以上の想定の是非をきめるためにも早い機会に実施されることが望まれる。

4. おわりに ~筑後国御原郡衙正倉群との対比~

長者屋敷遺跡の調査は、これが古代豊前國下毛郡の郡衙正倉群に比定されることの妥当性を明らかにした。現在福岡・大分県地域ではこのほかにも同時期あるいは前後する時期で郡衙正倉遺構の報告例は増加しつつある。しかしある程度まとまった正倉群の状況や郡庁との関係などが明らかな調査事例となると、かなり限られた現状である。その意味で長者屋敷遺跡の成果は注目されるものであり、いちはやく保存の対応策が中津市でなされたことは、文化財保護行政上からもその先見性は特筆すべきことである。



第55図 下高橋（上野・馬屋元）遺跡造構配置図（1／2,500）

（『月刊考古学ジャーナル』418号・1997年より）

当遺跡とほぼ同時期の郡衙正倉群としてあげられるものに、平成10年国指定史跡となった福岡県太刀洗町下高橋遺跡がある。南面する丘陵先端と筑後平野の接点に位置して東西に並列する2区の1町半四方以上の方形区画で構成される。東区（馬屋元遺跡）はすべて3×8～5間の掘立柱建物（100m²以上）が西方・東方・中央官衙配置をなす郡庁院区域と推定される。対する西区（上野遺跡）は方形掘方建物11棟が東辺と南北に逆L字状に配置されている。総柱建物は2×3間1棟（SB-1）・3×4間5棟（SB-2・4・14・15・16）・全容のわかる側柱建物は3×10間の東西棟長舎1棟（SB-3）のみであり、これはSB-4を切っている。SB-13は全容不明の3×10間以上の南北棟長舎である。大溝をめぐらした区画は東西150m、南北170m以上の長方形で南と東に出入り口が設けられている。倉と屋で構成された広場を設ける正倉院に比定されている。

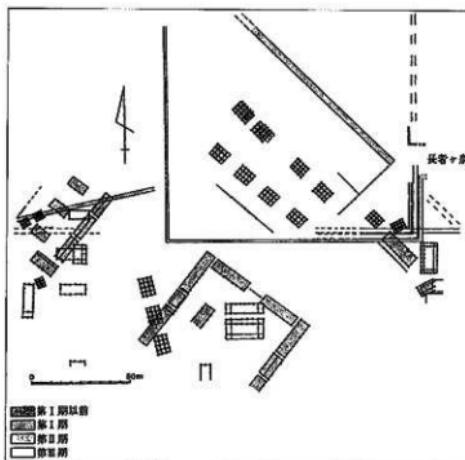
第8表 下高橋遺跡主要掘立柱建物一覧

遺跡名	建物番号	柱間間数	柱間寸法(R)		梁行(m)	桁行(m)	身舎面積(m ²)(/3.3)		主軸方位	間隔(m)	備考
			梁行	桁行			(m ²)	(/3.3)			
上野	SB1	2×3	6.5	5.1	3.89	4.6	17.89	5.42	N3°-W	10	総柱
上野	SB2	3×4	6	6.3	5.48	7.52	41.21	12.49	N2°-W	9	総柱
上野	SB3	3×10	8.3	7.7	7.52	23.06	173.41	52.55	N2°-W		総柱
上野	SB4	3×4	6.2	6.4	5.54	7.74	42.88	12.99	N		建替え1回
上野	SB13	3×10+a	10	10.2	9	30.64+a	275.44+a	83.45	N	53.5	総柱
上野	SB14	3×4	6.6	6.6	6	8	48.00	14.55	N	12	建替え2回
上野	SB15	3×4	7	7.5	6.6	9	59.40	18.00	N	12	総柱
上野	SB16	3×4	7.5	7.2	6.75	8.68	58.59	17.75	N		建替え2回
馬屋元	SB1	3×8	8	7.5	7.2	18	129.60	39.27	N6°-W	7	建替え1回
馬屋元	SB2	3×7	7.2	7.6	6.5	16	104.00	31.52	N7°-W	19.4	建替え2回
馬屋元	SB3	3×7	8	7.4	7.2	17.7	127.44	38.62	N7°-W	3	建替え2回
馬屋元	SB5	3×7	8	10	7.2	21	151.20	45.82	N6°-W		建替え6回
馬屋元	Sb-2	3×7	11	8	6.5	17	110.50	33.48	N5.5°-W	4.5	建替え2回
馬屋元	Sb-1	3×5	6.7	9.8	6.1	14.8	90.28	27.36	N6.5°-W	50	建替え4回
馬屋元	Sb-4	3×7	7	10	6.3	21	132.30	40.09	N7.5°-W	4.5	建替え3回
馬屋元	Sb-3	3×5	7.6	9.5	6.9	14.3	98.67	29.90	N6°-W		

（『古代文化』50・5・1998年より）

本遺跡の時期は8世紀中頃から後半に比定される筑後國御原郡衙に比定されていて、この北西約3.5kmに在る国指定史跡小郡官衙遺跡³⁰は先行する御原郡衙であることは周知のとおりである。長者屋敷遺跡と同時に比定される郡衙正倉群遺跡として参考される。正倉群区域が郡庁院区域の西方に独立している在り方は、長者屋敷遺跡の場合と通ずるところであるが、東側に近接して郡庁院区域が配された点では、さきに掲げた「倉庫令」の「倉を去ること五十丈の内に、館舎を置くことを得ず」とした規定に合致しない。むしろ長者屋敷遺跡の方が令の規定に合っていた可能性が高いように予想される。

下高橋遺跡に先行する小郡官衙遺跡の場合はどうであろうか。現在4期に分けて変遷が整理されている小郡官衙遺跡の第Ⅱ期（8世紀前半）が律令制にもとづいて最も整備された時期であり、南面する「コ」字形配置の郡庁城の西方と北方に付属建物群が配置される。北方建物群は横列で区画されたなかに東西方向に4棟並ぶ掘立総柱建物（4×3間）が南北2列配され、各建物はほぼ同規模の正倉群を構成している。郡庁に近接して付属館舎や正倉院を配置した集中型郡衙のタイプにあたる。後続する下高橋郡衙では、郡庁と正倉群は近接するものの、ほぼ1町半以上の方域を区画する郡庁と同規模の正倉群方域を設定して、小郡官衙より大規模な正倉院を形成した。長者屋敷正倉群も下高橋（上野）正倉院と似た構成をとっている。しかし郡庁城は同一台地上に近接して設けられた確証ではなく、郡庁跡の位置を確定する作業は今後の課題である。



第56図 小郡郡衙遺跡構造変遷図 (1/2,500)

(『月刊考古学ジャーナル』418号・1997年より)

以上のようにたどってくるとき、長者屋敷遺跡の古代郡衙遺跡に占める歴史的位置の重要な位置はきわめて注目すべきものであり、まだ数少ない正倉群遺跡のほぼ全貌がうかがわれる事例として、今後の周辺調査とあわせて解明してゆくべき重要な遺跡であることが認識されてくるのである。さらなる十分な学術的検討に拠って、より正しい復原整備と公開が実現される日の近からんこと切望して筆を下す。

(2001・2・4稿了)

注(1)高井伸三郎「常陸國新治郡上代遺跡の研究」1944年

(2)丸茂武重「国府・郡家の施物一律令制における」(『国学院雑誌』62卷9号) 1961年

(3)竹内理三「郡衙の構造—上野回交替使実録帳について—」

(『史蹟』50輯)『竹内理三著集第四卷・律令制と貴族』(2000年)収録

(4)小林昌二「日本古代の村落と農民支配」第Ⅲ編第一章第二節 2000年

(5)山中敏史「正倉の構造と機能」(『古代地方官衙遺跡の研究』第一章第四節) 1994年

(6)松村恵司「古代船舎をめぐる諸問題」(『文化財論叢』) 1983年

(7)坂尾次郎「律令財政史の研究」P 147. 1964年

(8)高崎章子「奈前國下毛郡衙一大分縣中津市長者屋敷遺跡」(『月刊考古学ジャーナル』418号) 1997年

(9)岩波書店版日本思想大系3『律令』(1976年)による。

(10)高崎章子「大分縣中津市・長者屋敷遺跡の概要とその出現の背景」(『古代文化』50卷5号) 1998年

(11)赤川正秀「福岡県人刀洗町・下高崎(上野・馬屋元)遺跡」(『古代文化』50卷5号) 1998年

(12)小郡市史編集委員会編『小郡市史』第1巻第2章: 1996年

第九章 長者屋敷遺跡の炭化米特性と稻作起源

佐賀大学農学部 和佐野喜久生・真鍋智子

＜本遺跡の概略および遺跡周辺の地理については、本遺跡報告書（文献8）から関係部分を抜粋して記述したものである。＞

本遺跡は中津市大字永添字長者屋敷に所在し、勤使街道を望む標高30mほどの低台地に位置し、1.4km西には古代寺院の相原庵寺、1.2km東には宇佐神宮の祖宮の鹿神社がある。また、街道をはさんで北西には広大な沖田里の地割が広がり、古くは下毛郡の野仲郷に属する宇佐神官領であった。

また、本遺跡の北側に隣接して「八並西後」という地名が残っているが、その地からは焼き米が出土し「八並長者」の米倉があったと伝えられている。北部九州には「八並」や「長者屋敷」とよばれる地名は多く、焼き米や瓦がしばしば出土すると言われている。

発掘調査は平成7年度から行われた。現地は古代官道（推定）よりおよそ350m南に入った低台地上にあり、古代（8世紀の中頃から10世紀、奈良～平安時代）の建物遺構（掘立柱建物11棟、横列、溝、土壙）、中世の八並城跡遺構、土器（土師器、須恵器など）、鏡、瓦及び大量の炭化米が発掘された。特に、北を主軸に整然と並んだ掘立柱建物には大型の総柱建物（5棟、内部にも太い柱を使用、高床式の倉庫）と側柱建物（低い床張りか土間であったと考えられる）があり、総柱建物からは多量の炭化米が出土したことから、当遺跡が豊前の国、下毛郡衙の正倉と考えられる。

側柱建物は倉庫番の役人が政務をする管理棟か、農民から税として集めた稲の穂を束ねて一時保管し、翌年に種穀として再び農民に貸与するための収蔵倉庫であったと考えられる。

炭化米は総柱建物の巨大な柱穴（一边が1～1.5m、深さ60～100cm）及び不定形の土壙から大量に出土した。柱の太さは40～60cmにもなる頑丈な高床式倉庫であったが、火災にあって消失したと考えられる。

本報告は、既報の北部九州及び韓国の古代稲（和佐野：1993、1995）に関する報告資料と比較しながら、本遺跡から出土した炭化米粒の形態的特性を解析し、さらに、本市の古代の稲作起源について考察を行ったものである。

材料及び方法

本報告の炭化米資料は、大分県中津市教育委員会（平成7年度1次調査、平成8年度2次調査）によって発掘されたものである。炭化米は、10～30m離れた異なる13地点の柱穴（掘立て柱建物）及び不定形の土壙中から掘り出した埋没土を水洗して選別した。炭化米粒の計測標本は、出土箇所が異なる13の遺構資料（SX-1、-3、-6、-8、-9、-10、-11、-12、SB-5、-6、-7、-9、SD-13）を区別し、それから100粒前後（100粒以下のものは全粒）を任意に抽出した。計測は、スケール付きの板上（約2mm深の4×8mm間隔の条溝の交点に10粒を並べる）で粒の平面（長・幅）及び側面（厚さ）を接写撮影し、約4.5倍大にプリントしたものから行った。米粒の形態的特性は、粒長、粒幅及び粒厚の測定値及び計算によって求めた長／幅比の4項目とした。

第9及び10表に示した稲粒（米、穀）の形態的特性の表し方及び粒型の分類の仕方については、本報告での解説（文献5を参照のこと）は省略する。なお、日本の古代稲を対象として長粒系（型）と呼称す

第9表 稲粒(米、稻)特性の指標、指標別階級値及び特性の表現法

米粒特性	特性指標					
	1	3	5*	7	9	10
粒長(mm)	(3.5) 極短粒	(4.1) 短粒	(4.7) 中長粒	(5.3) 長粒	(5.9) 極長粒	(6.5) 極大長粒
粒幅(mm)	(1.3) 極狭粒	(1.9) 狭粒	(2.5) 中幅粒	(3.1) 広粒	(3.7) 極広粒	—
粒厚(mm)	(0.7) 極薄粒	(1.3) 薄粒	(1.9) 中厚粒	(2.5) 厚粒	(3.1) 極厚粒	—
長/幅比	—	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	—
稻粒特性	1	3	5	7	9	10
粒長(mm)	(5.3) 極短粒	(5.9) 短粒	(6.5) 中長粒	(7.1) 長粒	(7.7) 極長粒	(8.3) 極大長粒
粒幅(mm)	(1.9) 極狭粒	(2.5) 狭粒	(3.1) 中幅粒	(3.7) 広粒	(4.3) 極広粒	—
粒厚(mm)	(1.3) 極薄粒	(1.9) 薄粒	(2.5) 中厚粒	(3.1) 厚粒	(3.7) 極厚粒	—
長/幅比	—	(1.1) 円粒	(1.7) 中形粒	(2.3) 細粒	(2.9) 極細粒	—

* : 4.4mm ≤ 中長粒 (4.7mm) < 5.0mm, 2.2mm ≤ 中幅粒 (2.5mm) < 2.8mm
 1.6mm ≤ 中厚粒 (1.9mm) < 2.2mm, 1.4 ≤ 中形粒 (1.7) < 2.0

第10表 稲粒(米、稻)の粒長・粒幅指標による粒型分類

	粒長指標						粒幅表現
	1	3	5	7	9	10	
粒長指標	1・1型 3・1型j 5・1型j 7・1型j —**	1・3型 3・3型 5・3型j 7・3型j —	— 3・5型 5・5型j 7・5型j —	— 3・7型 5・7型 7・7型j —	— 3・9型 5・9型 7・9型 —	— 3・10型 5・10型 7・10型 —	極狭粒 狭粒 中幅粒 広粒 極広粒
粒長表現	極短粒	短粒	中長粒	長粒	極長粒	極大長粒	—

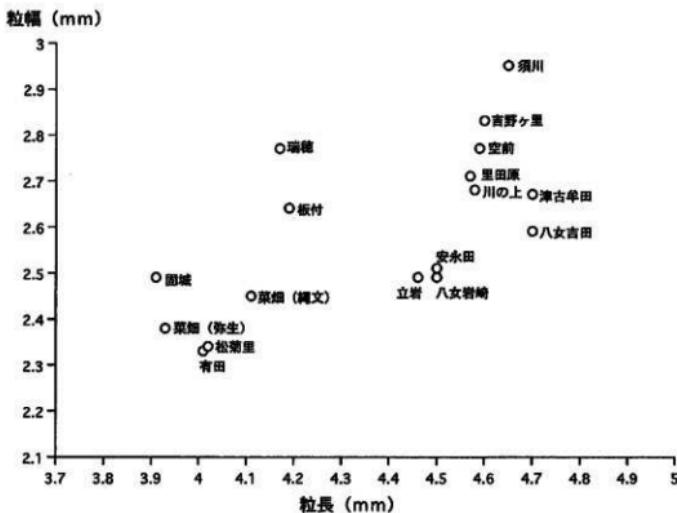
* j : 従来の分類法による長/幅比・2.0以下のジャボニカ・タイプには相当する。

** — : 本報告の資料中にはみられなかった。

るときは、粒型分類の中長粒(粒長指標・5)以上に属するものを意味している。第61図-1に示した炭化米粒の接写写真は、調査資料の全体像を反映するように、正形に近いものから大小・长短などの粒特性を考慮しながら上段右肩から順次に長・大粒から配列して示した。

結果及び考察

本遺跡の炭化米資料について、北部九州14遺跡15資料(縄文晩期から弥生後期)、韓国の松浦里遺跡(紀元前5世紀)及び固城遺跡(紀元1世紀)の2遺跡の炭化米の粒形分布を第57図に示した。図に示されるように、北部九州及び韓国の古代の炭化米の粒形は、粒長でおよそ3.9mmから4.7mm、粒幅で2.35



第 57 図 比較遺跡（北部九州、韓国）の炭化米粒長・幅平均値の分布図

mm から 2.95mm の範囲に分布し、全体的には粒長で 4.1mm 前後の短粒群と 4.6mm 前後の長粒群に分類され、しかも前者は玄界灘に面する九州北岸に、後者は有明海に接する筑後川流域の筑紫平野にそれぞれ分布する。本遺跡の炭化米資料については、このような既報告データと比較しながら記述する。

本遺跡の炭化米粒の 4 形質それぞれの平均値及び標準偏差は、第 11 表に中国及び北部九州の資料と比較しながら示した。第 58 図には長・幅平均値による粒形分布を第 57 図に付加して示したが、本遺跡の資料は遺構ナンバー（第 11 表）を付した黒マル印になっている。第 58 図から明らかのように、本遺跡の炭化米資料はすべて長粒系の属するが、遺構間で明らかに異なる粒特性を示すものがみられ、本遺跡にはいくつかの異なる稻品種が存在していたことが分かる。

第 59 図は、第 58 図の粒形分布図に粒長・粒幅の母集団平均値の 95% 信頼区間を付して比較したものであるが、遺構ナンバー 1、11（一部のものと有意差がみられる）、12 及び 13 を除く 9 資料間には有意差はみられない。以上のことから、本遺跡の炭化米資料は遺構ナンバー 1 の SX-6 型（最も小粒）、遺構ナンバーの 2 から 10 の SX-1 型、及び遺構ナンバー 11,12,13 の SD-13 型（最も大粒）の 3 品種群に分別されるようである。

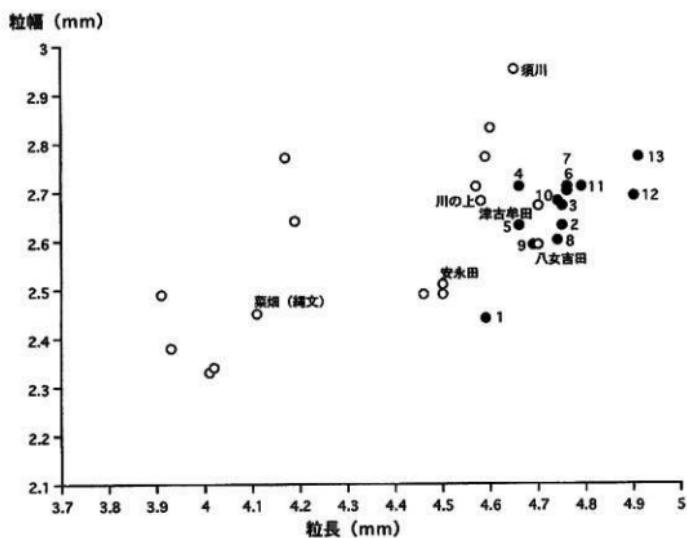
第11表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒特性の平均値及び標準偏差

NO.	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10	
	遺構名	SX-6	SX-1	古代	SX-3	古代	SX-9	古代	SX-11	古代	SX-12	古代	SX-5	古代	SX-6	古代	SX-7	古代	SX-9	古代
所在地	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市								
長 (mm)	4.59	4.75	4.75	4.65	4.66	4.66	4.76	4.76	4.74	4.74	4.76	4.76	4.69	4.69	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74
SD.	0.49	0.32	0.35	0.34	0.44	0.41	0.41	0.41	0.35	0.44	0.41	0.41	0.36	0.36	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32	0.32
幅 (mm)	2.44	2.63	2.67	2.71	2.63	2.63	2.70	2.70	2.60	2.60	2.60	2.60	2.59	2.59	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68
SD.	0.32	0.24	0.24	0.26	0.30	0.26	0.26	0.26	0.25	0.27	0.25	0.25	0.28	0.28	0.24	0.24	0.24	0.24	0.24	0.24
厚 (mm)	1.80	1.92	1.99	2.01	1.89	1.89	2.03	2.03	1.92	1.92	1.92	1.92	1.95	1.95	1.97	1.97	1.97	1.97	1.97	1.97
SD.	0.21	0.18	0.24	0.22	0.23	0.23	0.23	0.23	0.20	0.20	0.20	0.20	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18
長 / 幅比	1.90	1.82	1.79	1.73	1.79	1.73	1.78	1.78	1.77	1.77	1.78	1.78	1.83	1.83	1.78	1.78	1.78	1.78	1.78	1.78
SD.	0.23	0.20	0.22	0.19	0.26	0.22	0.22	0.22	0.19	0.19	0.19	0.19	0.21	0.21	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18	0.18
調査粒数	99	100	100	98	125	60	98	125	60	98	100	98	100	98	100	98	100	98	100	100

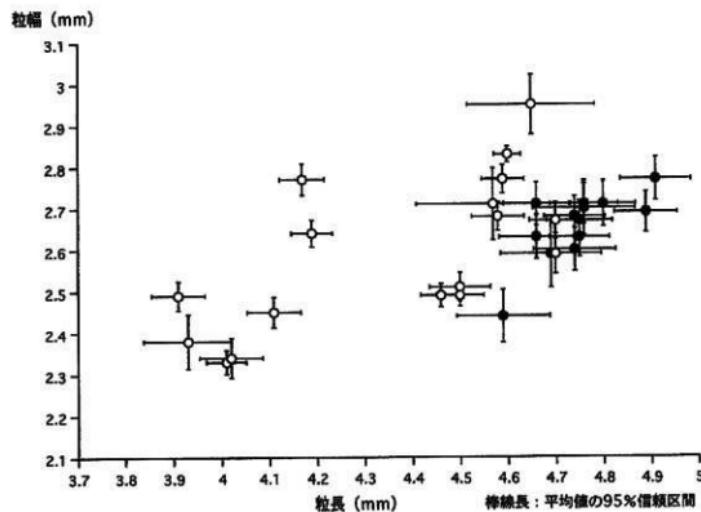
SD.: 標準偏差

NO.	11		12		13		SD - 10		SD - 13		戰國・鎌倉		菜畠		津古牟田		須川		安永田		八女吉田		
	遺構名	SX-8	古代	古代	古代	古代	戰國時代	戰國時代	鎌文時代	鎌文時代	小郡市	朝倉郡	菜畠	津古牟田	須川	朝倉郡	朝倉郡	小郡市	朝倉郡	朝倉郡	朝倉郡	八女市	八女市
所在地	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市	中津市						
長 (mm)	4.80	4.89	4.91	4.87	4.11	4.11	4.70	4.70	4.65	4.65	4.70	4.70	4.69	4.69	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74	4.74	
SD.	0.34	0.34	0.37	0.41	0.35	0.35	0.28	0.28	0.41	0.41	0.35	0.35	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	0.34	
幅 (mm)	2.71	2.69	2.77	2.63	2.45	2.45	2.67	2.67	2.95	2.95	2.60	2.60	2.59	2.59	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68	2.68	
SD.	0.27	0.25	0.26	0.23	0.23	0.23	0.22	0.22	0.22	0.22	0.23	0.23	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	0.21	
厚 (mm)	2.01	2.00	2.08	1.94	1.93	1.93	2.16	2.16	1.86	1.86	1.92	1.92	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	1.91	
SD.	0.19	0.19	0.24	0.18	0.22	0.22	0.17	0.17	0.18	0.18	0.17	0.17	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	0.16	
長 / 幅比	1.79	1.83	1.78	1.86	1.69	1.69	1.77	1.77	1.58	1.58	1.80	1.80	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	1.83	
SD.	0.21	0.20	0.22	0.18	0.17	0.16	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	0.17	
調査粒数	98	100	90	106	106	106	155	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	

SD.: 標準偏差

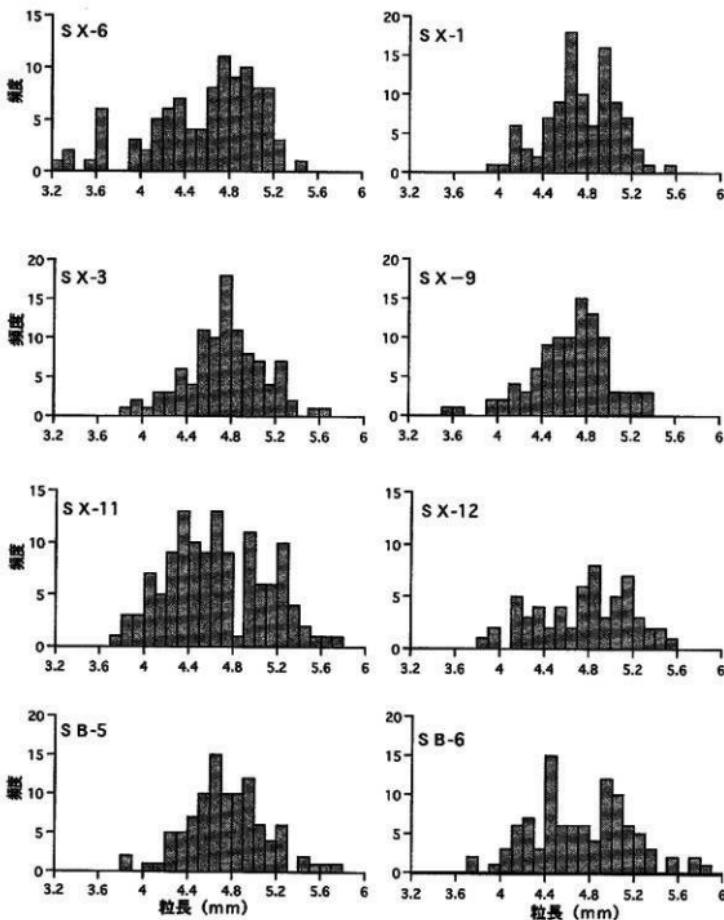


第58図 長者屋敷及び比較遺跡（北部九州、韓国）の炭化米粒長・幅平均値の分布図

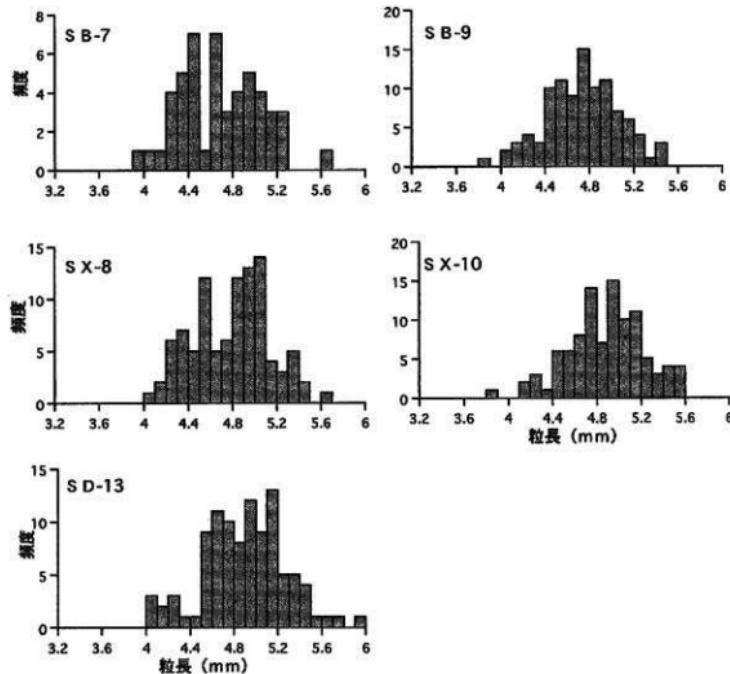


第59図 長者屋敷及び比較遺跡炭化米粒長・幅平均値（付・95%信頼区間）の分布図

次に、本遺跡の炭化米資料それぞれの遺伝的均一性を粒長変異のヒストグラム（第60図-1及び第60図-2）によって比較してみよう。



第60図-1 長者屋敷の炭化米粒長の頻度分布図



第60図-2 長者屋敷の炭化米粒長の頻度分布図

最も小粒のSX-6は、粒長が3.2mmから5.5mmまで幅広く分布し、3.6mm、4.3mm及び4.7mmに分布のピークをもつ3項分布のような変異を示すことから、長粒と短粒品種が混合したものであろう。次に、SX-1型の9資料それぞれの粒長分布をみると、SX-3、SX-9、SB-5及びSB-9の4資料はほぼ正規分布を示すことから、1つの長粒系品種の炭化米資料を見なされよう。しかし、SX-1、SX-11、SX-12、SB-6及びSB-7の5資料については、粒長平均値が4.4～4.6mm及び4.8～5.1mmにある長粒系の2～3品種に短粒系の1品種が混合したものようである。大粒のSD-13型については、SX-10は長粒系の品種由来のものとみれるが、SX-8とSD-13は粒長変異の分布が正規性を欠いた2～3項分布をしていることから、粒長平均値が4.5～4.6mm及び5.0～5.1mmの長粒系の2品種に短粒系の1品種が混合したものと考えられる。

以上のように、本遺跡の13の炭化米資料は長粒系の單一品種由来のものと、2～3品種の長・短粒系の混合したものに分けられるが、ほとんどが長粒系に属するものである。なお、混合資料の由来については、粒長変異の分布の形がそれぞれの資料で同じではないことから、倉庫に貯蔵されていた数品種が火災によって混合したものと考えられる。

第12表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒厚の頻度分布・平均値・標準偏差

NO.	遺構名	粒厚 (mm)								平均値 (mm)	標準偏差	
		1	1.2	1.4	1.6	1.8	2	2.2	2.4	2.6		
1	S X-6	1	5	10	30	38	14	1			1.80	0.21
2	S X-1			3	24	44	23	5			1.92	0.18
3	S X-3		1	4	13	39	23	17	2	1	1.99	0.24
4	S X-9		2	4	11	25	41	13	2		2.01	0.22
5	S X-11		1	10	32	39	23	4	3	1	1.89	0.23
6	S X-12			1	9	19	17	11	3		2.03	0.23
7	S B-5				10	38	32	15	2	1	2.03	0.20
8	S B-6		2	6	21	36	26	5	4		1.92	0.24
9	S B-7				11	22	12	5			1.95	0.18
10	S B-9		1		16	41	33	8	1		1.97	0.18
11	S X-8		2		12	32	38	12	2		2.01	0.19
12	S X-10		1	2	11	34	38	13	1		2.00	0.19
13	S D-13		1	2	7	20	26	28	6		2.08	0.24
戦国糧倉				3	21	44	32	6	2		1.94	0.18
菜畑繩文			1	7	32	57	40	15	3		1.93	0.22
津古羊田				10	34	41	15				1.92	0.17
須川					2	5	16	14	1	1	2.16	0.18
安永田				9	27	56	16	2			1.86	0.16
八女吉田			1		26	17	26	4			1.91	0.18
川の上			1	2	14	59	21	3			2.01	0.15
分類(指數)		薄粒(3)			中厚粒(5)			厚粒(7)				

第13表 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒長 / 幅比の頻度分布・平均値・標準偏差

NO.	遺構名	長/幅 比								平均値	標準偏差	
		1	1.2	1.4	1.6	1.8	2	2.2	2.4	2.6		
1	S X-6	1	8	26	31	24	8	1			1.90	0.23
2	S X-1		14	38	32	12	4				1.82	0.20
3	S X-3	3	21	26	35	12	2	1			1.79	0.22
4	S X-9	4	19	44	20	10	1				1.73	0.19
5	S X-11	6	27	36	27	21	7		1		1.79	0.26
6	S X-12	3	11	20	15	10	1				1.78	0.22
7	S B-5		14	47	26	9	2	1			1.77	0.19
8	S B-6	3	14	30	27	20	5	1			1.84	0.24
9	S B-7	1	7	17	12	12	1				1.83	0.21
10	S B-9		21	33	35	10	1				1.78	0.18
11	S X-8	1	18	35	28	12	3	1			1.79	0.21
12	S X-10		10	36	32	19	3				1.83	0.20
13	S D-13		21	35	29	11	4				1.78	0.22
戦国糧倉				7	20	49	16	4			1.86	0.18
菜畑繩文			4	42	75	26	4	3			1.69	0.17
津古羊田				17	39	36	8				1.77	0.16
須川		2	2	18	12	5					1.58	0.17
安永田				8	45	47	8	2			1.80	0.15
八女吉田			4	30	31	10	1				1.83	0.14
川の上		1	20	54	23	2					1.71	0.14
分類(指數)		円粒(3)			中形粒(5)			細粒(7)				

第12表には13資料それぞれの粒厚の頻度分布を対象資料と比較しながら示した。13資料の粒厚平均値はSX-6の1.80mm以外は1.89~2.08mmの間に分布し、北部九州の全平均(1.88mm)に比べるとやや厚粒になる。対照の7資料とはほぼ同じ値を示すが変異幅は広いものが多い。このことから、本遺跡一帯の水田の条件・栽培環境は、概して稲作には適した状況下にあったと考えられる。第13表には長/幅比の頻度分布を前表と同じように示したが、平均値の1.8前後の値は北部九州の全平均(1.69)に比べてやや大きな値(より狭粒)であった。これは、第61図-1の写真的最上段にみられるような極長粒の存在によるものである。

第14表-1、2は、13の炭化米資料をそれぞれの個々の粒型分布を対照遺跡と比較したもので、以下にその類似性を個別に説明した。

SX-6は、安永田遺跡(鳥栖市、弥生中期)に類似するがより多型的であり、川の上遺跡(豊津町、弥生中期)の粒型分布にもかなり共通部分がみられる。粒幅は狭粒(26%)と広粒(13%)を含む中幅粒(60%)で、粒長は中長粒(46%)を主として、短粒(23%)、長粒(20%)及び極短粒(10%)を含む。粒型は5・5型(29%)を主とするが、5・7型(18%)、5・3型(11%)、3・3型(10%)及び7・5型などを含む変化に富んだジャボニカ・タイプ(62%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(18%)、3・3型(10%)及び3・5型(8%)などが含まれていたことによる。

SX-1は、津古牟田遺跡(小郡市、弥生中期)のものとほとんど同じような粒型分布を示す。粒幅は広粒(30%)を含む中幅粒(67%)で、粒長は中長粒(67%)を主として、長粒(21%)と短粒(12%)を含む。粒型は5・5型(41%)を主として、7・5型(25%)、5・7型(18%)及び5・3型(8%)などを含むジャボニカ・タイプ(76%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(18%)などが含まれていたことによる。

SX-3はSX-1のものとほとんど同じ粒型分布を示す。ジャボニカ・タイプ(78%)の中幅・中長粒種である。

SX-9はSX-1型になり、津古牟田遺跡のものとはほとんど同じ粒型分布を示すが、川の上遺跡(豊津町、弥生中期)のものにもよく類似する。粒幅は広粒(34%)を含む中幅粒(63%)で、粒長は中長粒(67%)を主として、長粒(13%)と短粒(17%)他を含む。粒型は5・5型(43%)を主として、7・5型(23%)、5・3型(11%)及び5・7型(8%)などを含むジャボニカ・タイプ(91%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(8%)などが含まれていたことによる。SX-1に比べて短粒の割合がやや多い。

SX-11はSX-1型であるがより多型的である。粒幅は広粒(27%)を含む中幅粒(67%)で、粒長は中長粒(41%)を主として、短粒(30%)及び長粒(27%)を含む。粒型はかなり多様であり、5・3型(23%)、5・5型(22%)、5・7型(20%)及び7・5型(15%)がほぼ同じ割合で多く含まれ、他に7・7型(6%)、7・3型(5%)などもみられるジャボニカ・タイプ(72%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(20%)などが含まれていたことによる。津古牟田遺跡の5・5型ものを5・3型と5・7型に分散させたような粒型分布である。

第14表-1 長者屋敷及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表

	SX-6 99粒 粒長指數					計 (%)	SX-1 100粒 粒長指數					計 (%)
	1	3	5	7	9		1	3	5	7	9	
粒 1												
幅 3	8	10	8			26		2	1			3
指 5	2	11	29	18		60		8	41	18		67
数 7		2	9	2		13		2	25	3		30
9												
計%	10	23	46	20		99		12	67	21		100
	SX-3 100粒						SX-9 98粒					
粒 1												
幅 3	1	1				2	1		1			2
指 5	9	42	19	1		71	1	11	43	8		63
数 7	6	18	3			27		6	23	5		34
9												
計%	16	61	22	1	100		2	17	67	13		99
	SX-11 125粒						SX-12 60粒					
粒 1												
幅 3	2	3	1			6		2	2			4
指 5	1	23	22	20	1	67		15	25	23		63
数 7	5	15	6	1		27		7	17	10		34
9	1					1						
計%	1	30	41	27	2	101		24	44	33		101
	SB-5 99粒						SB-6 100粒					
粒 1												
幅 3	1	2	1			4		2	1	1		4
指 5	10	36	12	1		59	2	13	34	19	3	71
数 7	3	24	8	1		36		4	10	10		24
9	2					1						1
計%	14	62	21	2	99		2	20	54	30	3	100
	SB-7 50粒						SB-9 100粒					
粒 1												
幅 3	2	6	2			10		1	2			3
指 5	20	34	12			66		8	40	14		62
数 7	2	12	6	2		22		3	23	9		35
9	2					2						
計%	24	54	20	2	100		12	65	23			100

第14表-2 長者屢数及び比較遺跡の炭化米粒の粒型分布表

	SX-B 98粒 粒長指數					計 (%)	SX-10 100粒 粒長指數					計 (%)
	1	3	5	7	9		1	3	5	7	9	
粒 1												
幅 3	2	4				6		2	2			4
指 5	6	29	17			52		4	35	29		68
数 7	7	21	12	1		41		1	18	9		28
計%	15	54	29	1	99			7	55	38		100
SD-13 100粒					菜畠繩文 155粒							
粒 1								8	5	2		15
幅 3												
指 5	5	25	18			48	14	47	19			80
数 7	4	25	20	3		52		5	1			6
計%	9	50	38	3	100		22	57	22			101
戰国櫛倉 108粒					津古牟田 100粒							
粒 1												
幅 3	2	2				4		1				1
指 5	9	42	22	2		75		9	50	13		72
数 7	2	8	11	1		22		2	23	2		27
計%	13	52	33	3	101			12	73	15		100
須川 39粒					安永田 110粒							
粒 1								2	3			5
幅 3												
指 5	8	8	3			19	3	30	53	6		92
数 7	3	13	49	18		83		1	3			4
計%	3	21	57	21		102	3	33	59	6		101
八女吉田 76粒					川の上 100粒							
粒 1												
幅 3		3				3						
指 5	4	71	5			80		21	54	3		78
数 7		16	1			17		2	21			23
計%	4	90	6		100			23	75	3		101

SX-12はSX-1型でSX-1とほぼ同様な分布を示すが、長粒を多く含み多型的である。粒幅は広粒(34%)を含む中幅粒(63%)で、粒長は中長粒(44%)を主として、長粒(33%)及び短粒(24%)を含む。粒型は多型を示し、5・5型(25%)、5・7型(23%)、7・5型(17%)、5・3型(15%)及び7・7型(10%)などを含むジャボニカ・タイプ(73%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(23%)他が含まれていたことによる。

SB-5はSX-1型でSX-1とほぼ同様な粒型分布を示す。粒幅は広粒(36%)を含む中幅粒(59%)で、粒長は中長粒(62%)を主として、長粒(21%)と短粒(14%)を含む。粒型は5・5型(36%)を主として、7・5型(24%)、5・7型(12%)及び5・3型(10%)などを含むジャボニカ・タイプ(82%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(12%)などが含まれていたことによる。

SB-6はSX-1型であるが、長粒を多く含み多型的である。粒幅がやや狭粒になることから八女吉田遺跡(八女市、弥生後期)に類似する。粒幅は広粒(24%)を含む中幅粒(71%)で、粒長は中長粒(45%)を主として、長粒(30%)及び短粒(20%)他を含む。粒型は頗る多型を示し、5・5型(34%)、5・7型(19%)、5・3型(13%)、7・5型(10%)及び7・7型(10%)他を含むジャボニカ・タイプ(74%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(19%)他が含まれていたことによる。

SB-7はSX-1型であるが、SB-6と同じ八女吉田遺跡のものに類似した粒型分布をすることから説明は省略する。

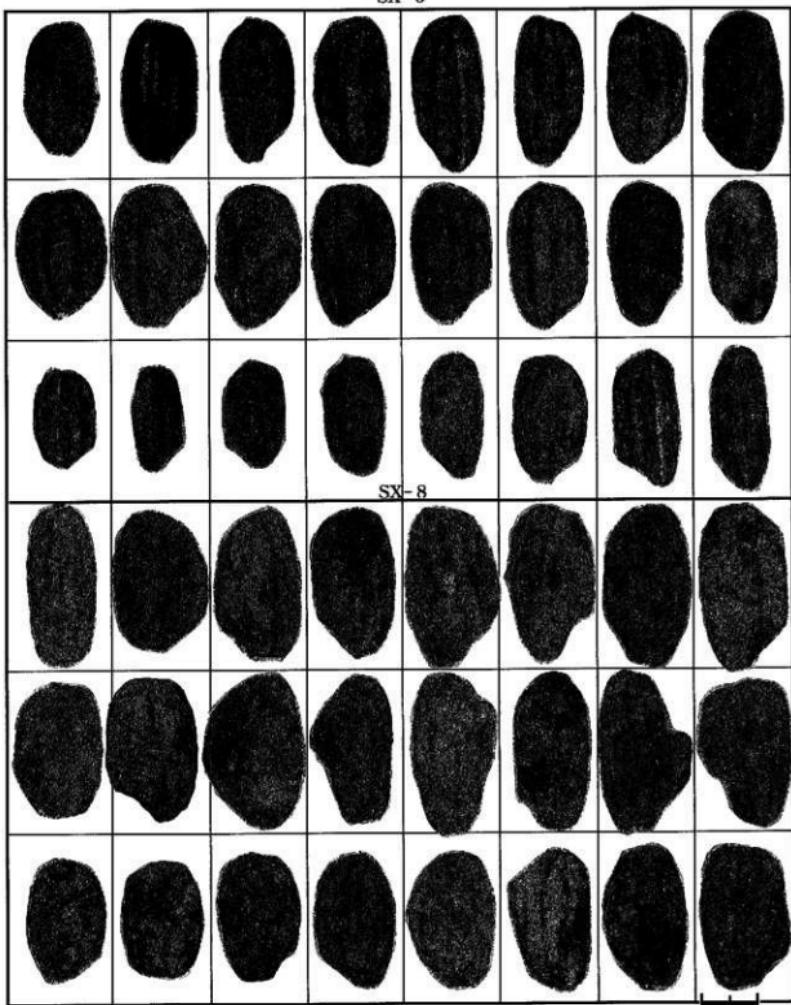
SB-9はSX-1型で、SB-5とほとんど同じ粒型分布を示すことから、SB-5と同じ物であるとして説明は省略する。

SX-8はSX-1型に比べて広粒がより多く含まれ、津古牛田遺跡のものに須川遺跡(朝倉郡、弥生前期)のものを混合したような分布、あるいは中国の戦国糧倉遺跡(江西新干県、戦国時代)のものに類似する。この粒型は後述するSX-10及びSD-13に類似するが、SD-13が広粒型としての特徴を最もよく示すので、SD-13型とする。粒幅は広幅粒(41%)を含む中幅粒(52%)で、粒長は中長粒(54%)を主として、長粒(29%)及び短粒(15%)を含む。粒型は5・5型(29%)、7・5型(21%)、5・7型(17%)及び7・7型(12%)他を含むジャボニカ・タイプ(76%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(17%)他が含まれていたことによる。

SX-10はSD-13型に属するが、5・7型の粒型が多く含まれる。今までの北部九州及び韓国の古代稻にはみられない長粒種で、中国の戦国糧倉遺跡のものに類似する。粒幅は広粒(28%)を含む中幅粒(68%)で、粒長は中長粒(55%)を主として、長粒(38%)及び短粒(7%)を含む。粒型は5・5型(35%)、5・7型(29%)、7・5型(18%)及び7・7型(9%)などを含むジャボニカ・タイプ(67%)の中幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(29%)他が含まれていたことによる。

SD-13は広幅粒(52%)が多く含まれることから、津古牛田遺跡のものに須川遺跡のものを混合したような分布(7・7型を多く含む)を示す。粒幅は中幅粒(48%)を含む広粒(52%)で、粒長は中長粒(50%)を主として、長粒(38%)及び短粒(9%)他を含む。粒型は多型を示し、7・5型(25%)、5・5型(25%)、7・7型(20%)及び5・7型(18%)をほぼ同じ割合で含むジャボニカ・タイプ(79%)の広幅・中長粒種である。インディカ・タイプは5・7型(18%)他が含まれていたことによる。

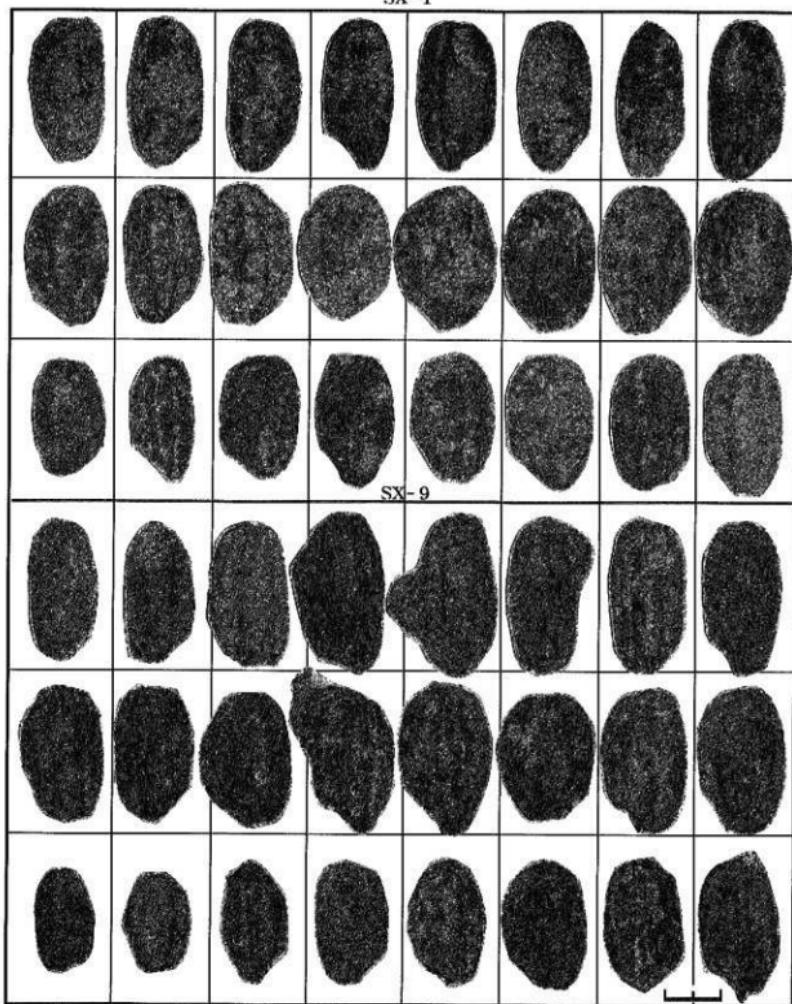
SX-6



縮尺1目盛り：1mm

第61図-1 長者屋敷遺跡の炭化米粒写真

SX-1



第61図-2 長者屋敷遺跡の炭化米粒写真

以上のことから、本遺跡の古代稻作あるいは稻品種の起源は、主として小郡市の津古牟田遺跡（弥生中期）の稻に由来するものと考えられるが、須川遺跡（朝倉郡、弥生前期）、安永田遺跡（鳥栖市、弥生中期）、八女吉田遺跡（八女市、弥生後期）、及び川の上遺跡（恭津町、弥生中期）の粒型ともかなり共通するものを含んでいる。また、粒型分類での長粒（粒長指数・7）あるいは長・大粒系の7・7型の稻粒は九州の弥生時代には上記のいくつかの遺跡以外には稀にしかみられないものである。このことから、SD-13型のような稻品種は中国の戰国糧倉遺跡（江西新干県、戰国時代）や焦庄遺跡（江蘇省東海県、西周時代）にその起源をもつめることも必要になる。しかし、本遺跡の時代が8世紀以降であることから、中国大陆からの稻品種の伝来も中国の広い地域を対象として考えても不自然なことではない。

ところで、本遺跡の時代が8世紀の中頃以降のものであることから、上記のような筑紫平野の弥生時代の遺跡と本遺跡とは500年から1000年の年代差が存在する。このような時代差を稻品種の起源論とどのように関連づけて解釈すればよいのであろうか。弥生時代の稻品種が果たして8世紀の中頃まで筑紫平野で栽培され続けていたであろうか。このことの解釈について直接的にはいざれとも断言することはできないが、一般に農家によって栽培される稻品種の選択は、余程の事情が生じない限りは変わらないものである。全く新しいものに品種を更新するときは、従来からの品種が全滅するような被害に合うとか、あるいは従来の品種に比べて際立ってすぐれた品種が持ち込まれたときぐらいである。

これらのことを考えると、弥生時代前～中期に導入されて筑紫平野で広く栽培された長粒系の稻品種が、1000年後の古代にも栽培続けられていたと考えても何ら不思議なことではない。

以上のことを前提にしたとき、どのような経路を経て中津市に稻品種が伝播したかであろう。地図をみると、筑紫平野から筑後川を數十キロメートル遡ると日田盆地に至り、さらにここから北東に花月川をつめると山国川との分水嶺・大石峠がある。山国川は北流して周防灘に注ぐが、下毛郡の狭い谷間の山村の山国町、耶馬溪町、本耶馬溪町を下っていくと、本遺跡が所在する河口の町・中津市に到達する。

さて、日田市と中津市の間に、古代から中世までにどのような文化交流あるいは交易があったのであろうか、甚だ興味あることである。もしも、そのような古代・中世の文化交流・交易の道があったとすれば、これこそ弥生の筑紫平野と中世の中津の稻作をつなぐ古代の稻の道ではなかったのではないだろうか。

なお、本遺跡の近隣の遺跡の炭化米資料と比較すると、SX-9（No.4）が川の上遺跡（恭津町、弥生中期）のものとよく類似している。また、下郡遺跡（大分市、弥生中期～後期）のものは長粒系品種に属するがやや狭・短粒であり、本遺跡炭化米資料の全体的な粒型とは異なるものであるが、SX-6（No.1）はかなり類似している。

要 約

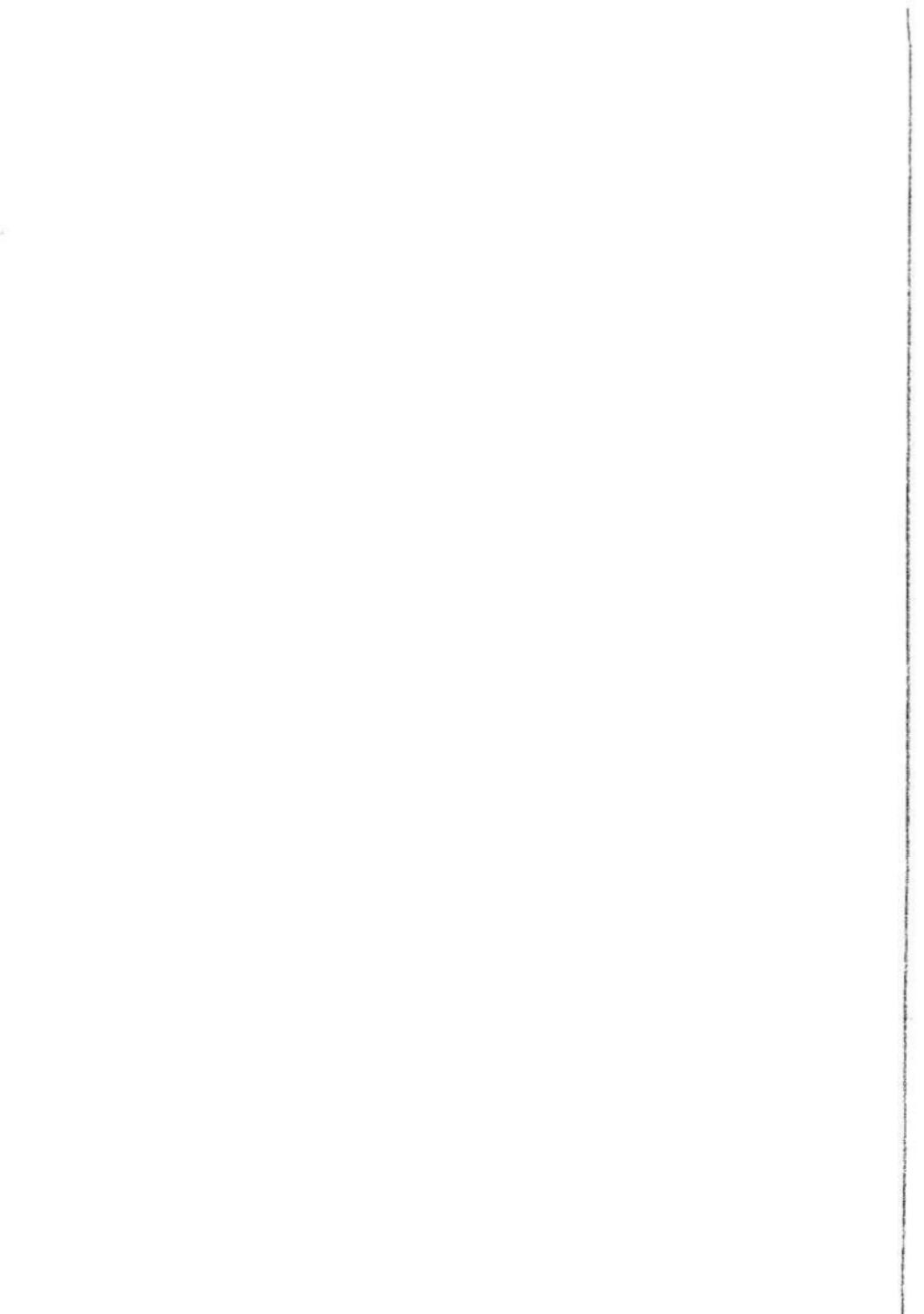
- 1、中津市所在の長者屋敷遺跡（8～10世紀）から発掘された13の炭化米資料の粒特性を既報の北部九州、韓国及び中国の遺跡のものと比較し、本遺跡の古代稻の起源を考察した。
- 2、本遺跡の炭化米粒は長粒系品種に属し、全体的には小郡市の津古牟田遺跡（弥生中期）のものに最も類似したが、弥生時代中～後期の須川・安永田・八女吉田・川の上遺跡の粒型ともかなり類似するものであった。なお、長粒（粒長指数・7）あるいは7・7型の稻粒（長・大粒型）は、日本の弥生時代にはいくつかの遺跡以外には多くみられないものであり、本遺跡の稻作起源に中国の戰国糧倉遺跡（江西新干県、戰国時代）や焦庄遺跡（江蘇省東海県、西周時代）との関連性も考えられる。

- 3、本遺跡の炭化米粒の形質異変は全般的に大きく、特に、個々の粒長変異の分布状況から、本遺跡の周辺域にはいくつかの稻品種が栽培されていたが、仓库の火災によって混合した貯蔵種子が13の資料として発掘されたとも解釈できる。
- 4、炭化米粒の粒厚はやや厚粒であったことから、本遺跡周辺の稻作は全体的にはほぼ好適な栽培条件下で行われたと考察した。長／幅比の平均値からは、やや長粒型に分類された。
- 5、本遺跡の近隣遺跡の炭化米粒との比較では、川の上遺跡（豊津町、弥生中期）のものが最も類似したが、下郡遺跡（大分市、弥生中～後期）のものに類似する資料もみられた。
- 6、本遺跡の古代稻の起源は、津古牟田遺跡の稻が最も有力な祖先品種と考えられるが、その周辺地域の弥生時代中～後期の遺跡群、須川・安永田・八女吉田遺跡の粒型ともかなり類似することから、筑紫平野の北部一帯を中心として栽培された長粒系の稻品種が最も可能性が高いとした。
- 7、本遺跡への稻作の伝播経路については、筑紫平野から筑後川を経て日田盆地、さらに北東に花月川・大石井を経由して山国川を下って中津市に到るルートが考えられるが、今後の途中経路の炭化米資料のデータによって明らかになるだろう。

参考文献

1. 和佐野喜久生 1990. 江南行—日本稻のルーツを求めて。稻—その源流への道。29－33. 東アジア文化交流史研究会。
2. 和佐野喜久生 1992. 稲粒からみた日本稻作の源郷。考古ジャーナル 337:12-1. 8.
3. 和佐野喜久生 1993. 九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究。有学雑誌 43: 589 - 602.
4. 和佐野喜久生 1995. 稲作の江南起源説。講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明。朝倉書店。東京。143 - 167.
5. 和佐野喜久生 1995. 東アジアの古代稻と稻作起源。東アジアの稻作起源と古代稻作文化。文部省科学研究費による国際学術研究、報告・論文集。和佐野喜久生・研究代表・編集 1 - 52, 331pp
6. 和佐保喜久生 1996. 後谷V遺跡、斐川町文化財調査報告書。15:68 - 77.
7. 和佐野喜久生・山下史朗 1996. 玉津田中遺跡、兵庫県文化財調査報告書、第6分冊：127 - 150.
8. 高崎 章子 2001. 長者屋敷遺跡、中津市文化財調査報告・第26集

写 真 図 版





1. 7年度調査区全景

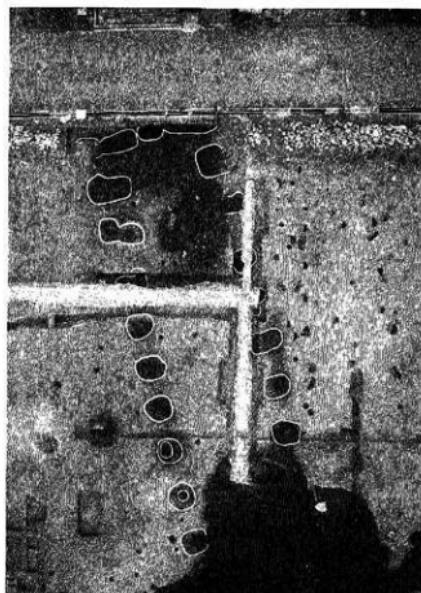


2. 主要建物群

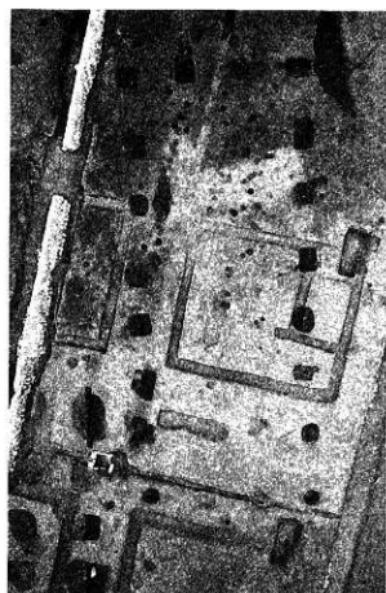


3. 7年度調査区東側

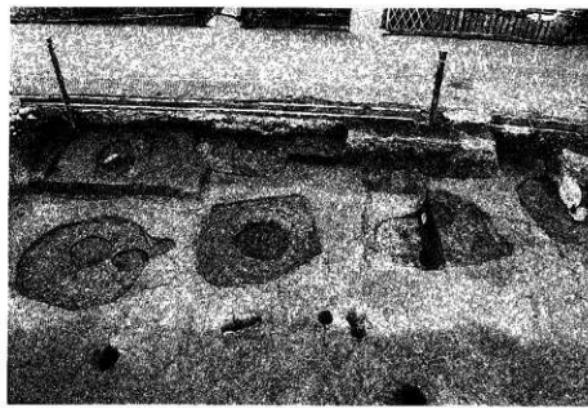
図版2



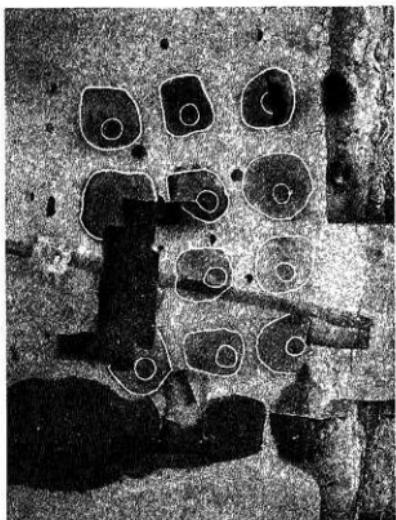
1. SB - 1



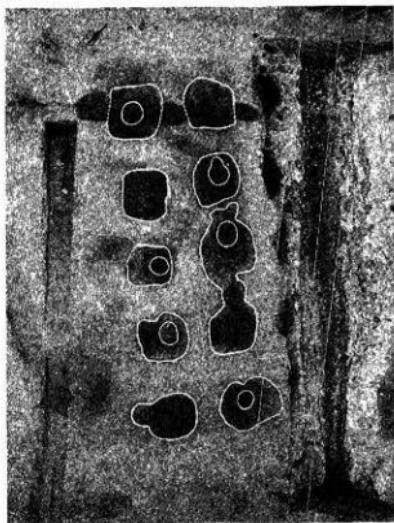
2. SB - 3



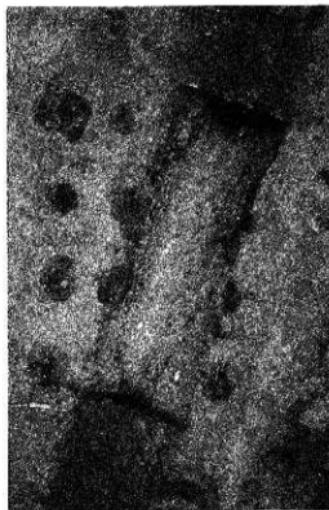
3. SB - 5



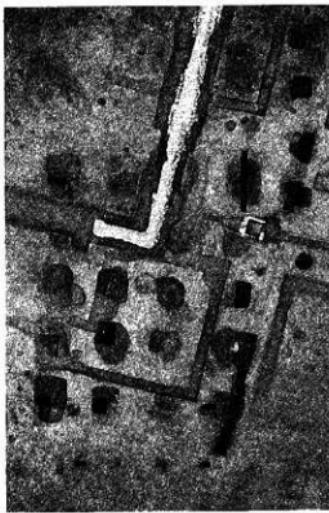
1. SB - 6



2. SB - 7

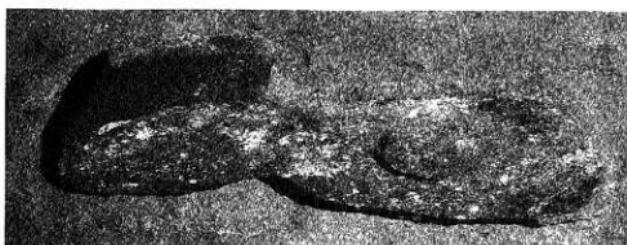


3. SB - 8



4. SB - 9

图版 4



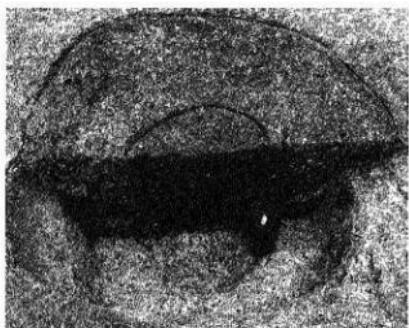
1. SB - 1、pit21



2. SB - 5、pit 1



3. SB - 5、pit 3



1. SB - 6, pit 3



2. SB - 6, pit 1



3. SB - 7, pit 11

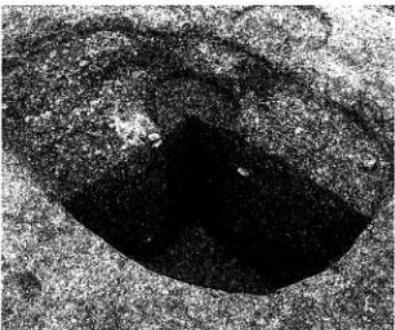


4. SB - 7, pit 1

図版 6



1. SB - 9、pit 1



2. SB - 9、pit 4



3. SB - 9、pit16



4. SB - 9、pit14



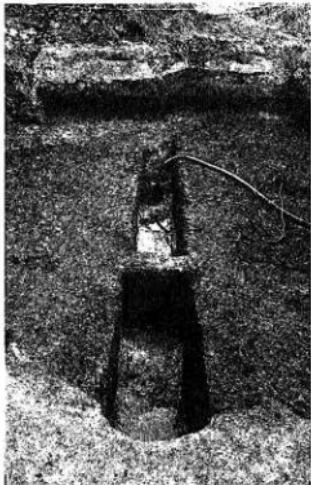
5. SB - 9、pit18



1. SX-3



2. SX-21

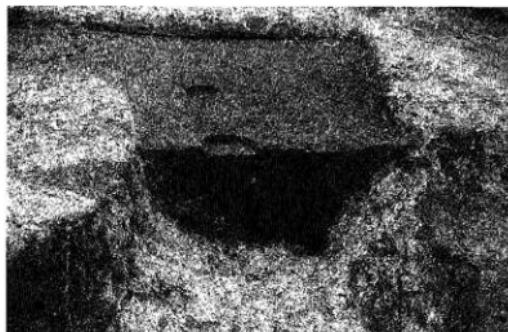


3. SX-21、トレンチ



4. SX-21、トレンチ床面

図版 8



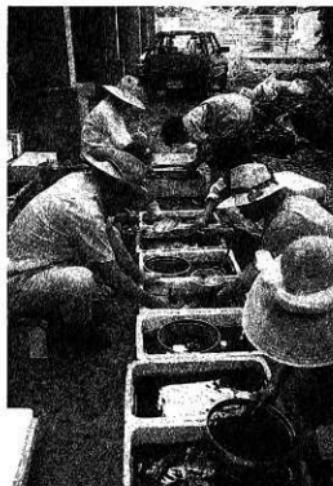
1. SD - 8、コーナー部



2. SD - 12、13 (東から西を望む)



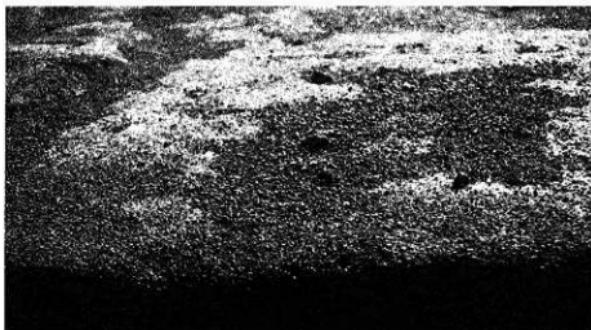
3. SD - 13 (東から西を望む)



1. 炭化米洗净风景

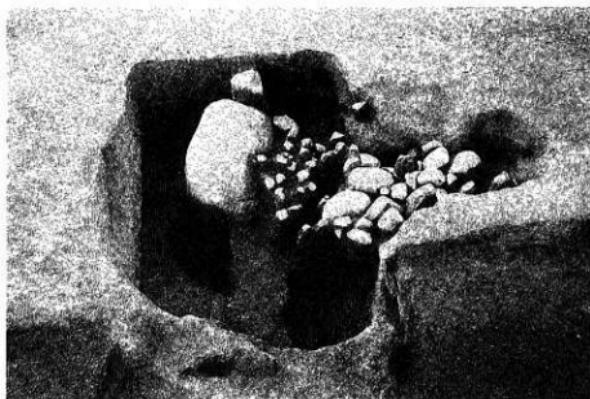


2. 出土炭化米



3. SD -13、炭化米出土状况

図版10



1. SK - 2



2. 八並城の堀
(SD - 13北側)



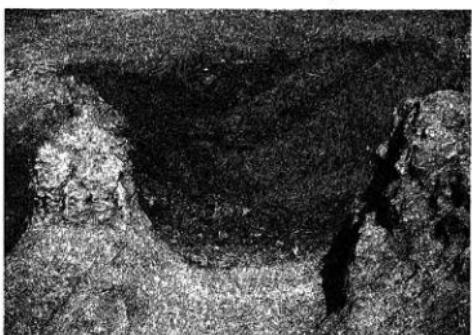
3. 八並城の堀
(SD - 13北側)



1. SD - 1、2 (北から南を望む)



2. SD - 1、3 トレンチ北壁



3. SD - 2, 2 トレンチ北壁



4. SD - 15 (5 トレンチ)



5. SD - 15 (6 トレンチ)



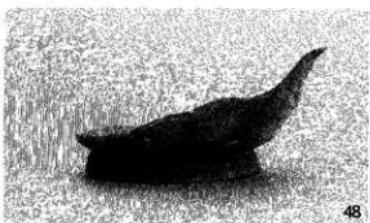
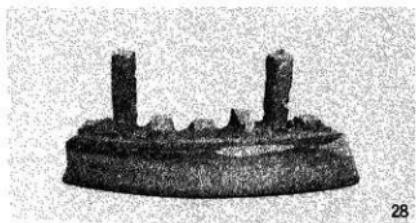
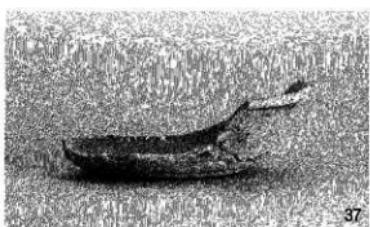
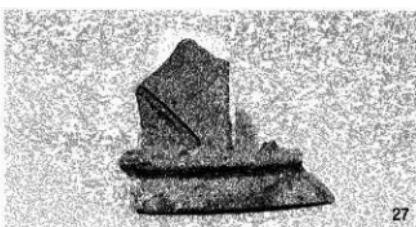
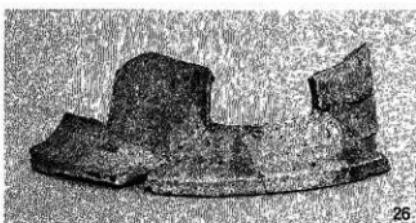
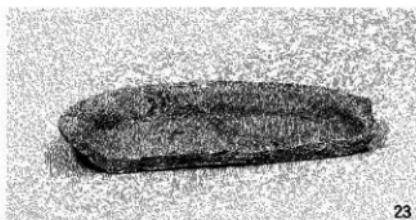
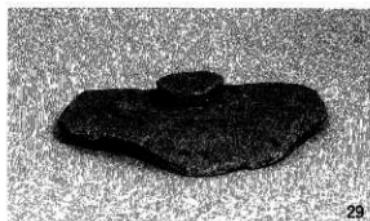
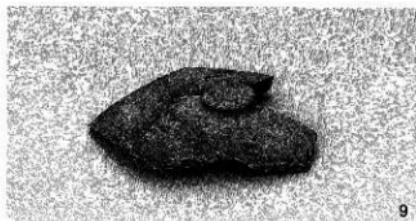
1. 防空壕 1



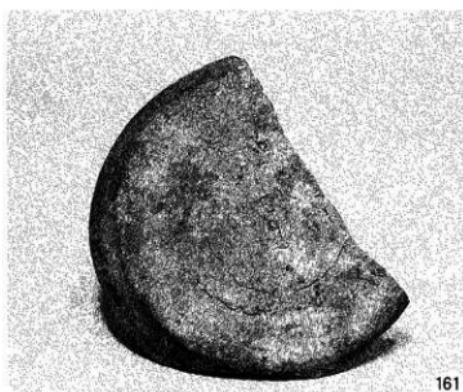
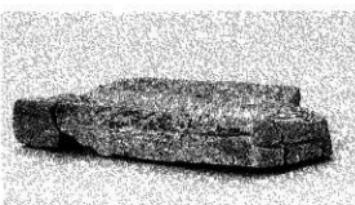
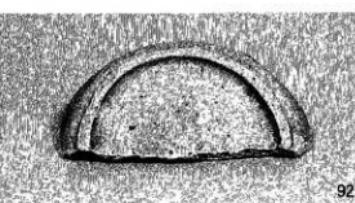
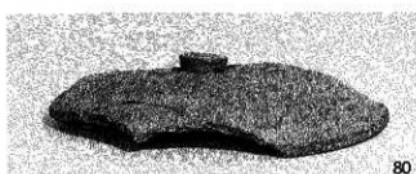
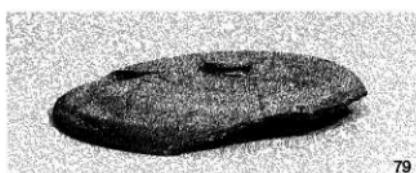
2. 防空壕 2

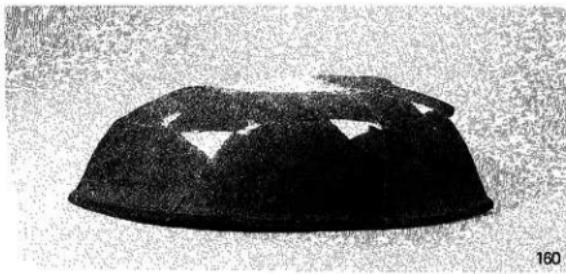
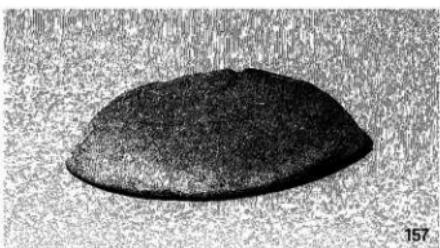


3. 神戸製鋼ひきこみ様

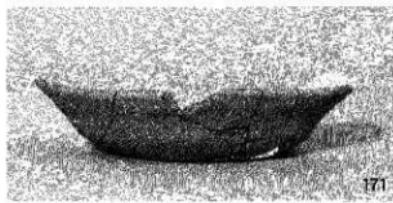
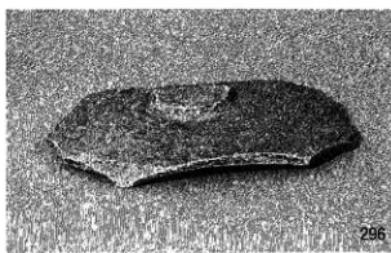
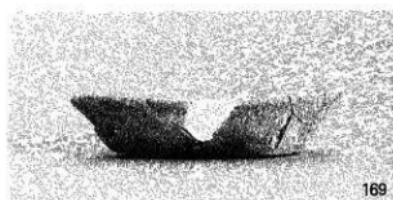
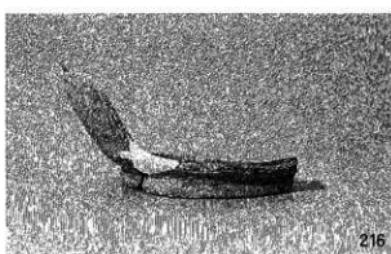
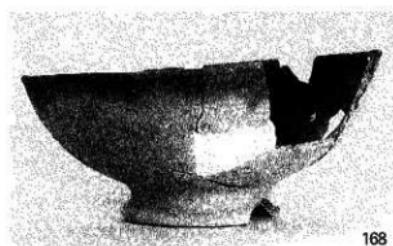
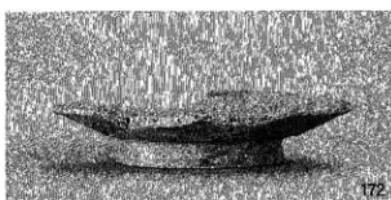
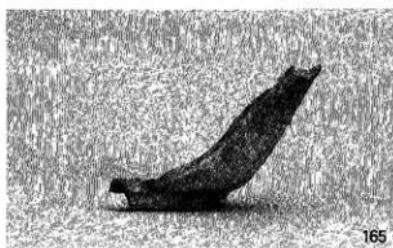


圖版14





圖版16



編集後記

平成7年に長者屋敷遺跡が発見されて以来、実に多くの方々のお世話になってまいりました。各大学、研究機関の先生方、各文化財担当者の方々始め、発掘調査、整理作業にかかわった皆さん、中津市役所の関係各課など、あればさりがありません。気持ちよく発掘調査にご協力下さった土地所有者の方々、聞き取り調査に応じて下さった地元の方々、本当にありがとうございました。きちんとした報告書を作成すべき義務を持ちながら、忙しさに流されて理想と大きくはずれたものになってしまったのは、私の勉強不足以外の何物でもありません。すばらしい原稿をおよせいただいた先生方にもご迷惑をおかけすることになってしまいました。

しかしながら、ご迷惑をおかけしたのは、市営住宅在住の皆さんです。新しい住宅にもどられるのを楽しみされていた方、今後の調査を心配されている方、多くの方々にご心労をおかけしました。埋蔵文化財は何百年、何千年の時を生きのびてきた希少なものであり、長い人類の歴史のほんの一瞬を生きているに過ぎない私達が、勝手に破壊し、未来の人々への継承を断ち切ってよいものではありません。しかし、文化財発掘には時に現在を生きる人々との摩擦があり、幾人もの思いが犠牲になる個面をも有することを私たちは決して忘れてはならないと思います。せめて、後世に伝える幸運を得た遺跡を、よりよい形で継承出来ますよう、今後努力していきたいと思っています。

2001年3月31日 筆者



発掘調査参加者の皆さん

報告書抄録

ふりがな	ちょうじややしきいせき							
書名	長者屋敷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	小田富士雄・和佐野喜久雄・高崎章子							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	大分県中津市豊田町14-3							
発行年月日	2001年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長者屋敷遺跡 (7年度)	大分県中津市大字 永添2565-4他	44203	10119	33° 33' 49"	131° 13' 30"	950829～ 960331	8,000 m ²	市営住宅 建て替え
長者屋敷遺跡 (8年度)	大分県中津市大字 永添2565-1他					961220～ 970331		
長者屋敷遺跡 (12年度)	大分県中津市大字 永添2511-2					000612～ 000725		
八並城跡	同上	44203	101046	同上	同上	同上	同上	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長者屋敷遺跡	官衙	奈良・平安	掘立柱建物・土塁・溝・横列等	須恵器・土師器・円筒碗・墨書き土器・炭化米等	推定古代下毛郡街正倉			
八並城跡	城館	中世	堀・地下式土壤等	瓦質土器・瓦器等	八並城跡			

長者屋敷遺跡

中津市文化財調査報告 第26集

2001年3月31日

発行 中津市教育委員会

印刷 第一印刷株式会社



平成 7 年度調査区 遺構配置図 (1 / 200)



